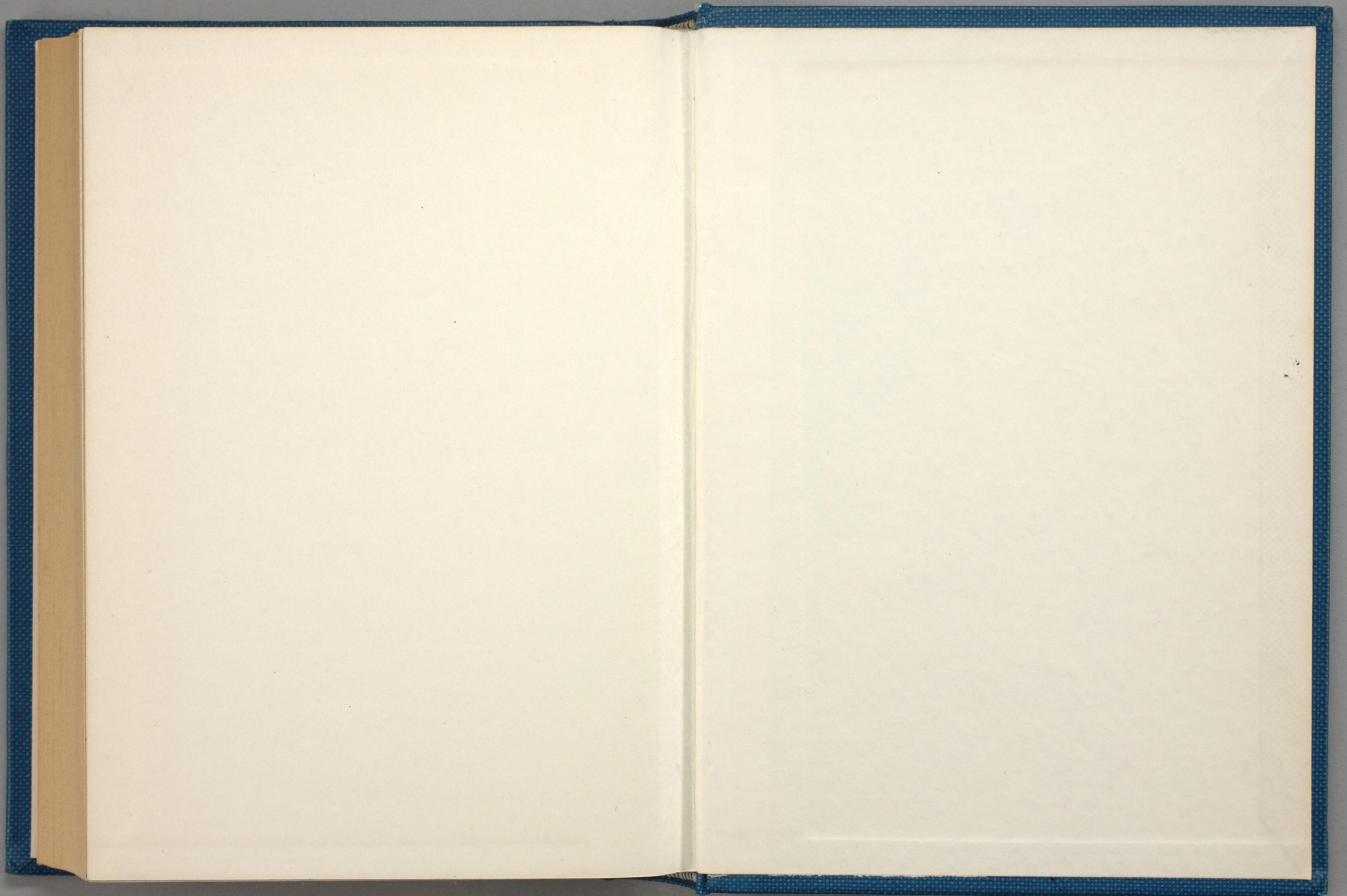


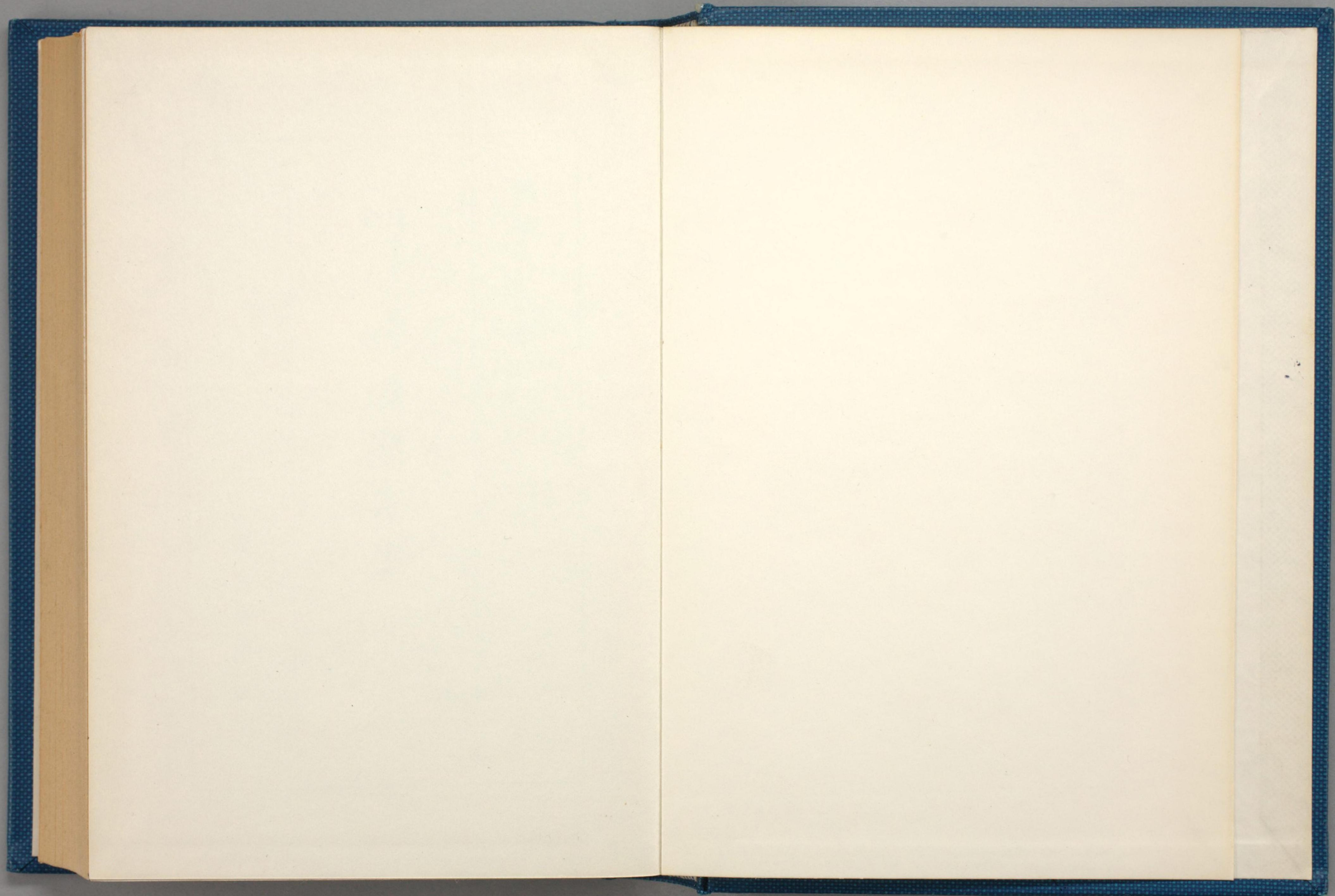
289.1
N652Wn
(t6)



00234834







2-30-41

渡邊英一編

日本女子大學
創立者
成瀬先生

櫻楓會出版部



(影撮年七正大) 像肖生先瀬成



贈
日本女子大厚校
藏



234834

289.1N652Wm
(t6)

目 次

第一編 郷 國 時

- 一 出生前後の時代
- 二 家系及び父母
- 三 父母に對する先
- 四 母君の逝去と宗養
- 五 少年時代の教養
- 六 小學校教員時代

第二編 基督敎牧

- 一 大阪に於ける修養
- 二 梅花女學校に於
- 三 郡山教會時代

○正 誤 表

- 九五頁一〇行十二字の次の讀點(。)は句點(、)
- 一二五頁八行「病と氣」 「病氣と」
- 一二八頁七行「經驗から」 「經驗からも」
- 同 頁一二行「復案」 「腹案」
- 同 頁一三行「友人の方に」 「友人たちに」
- 一三一頁三行「流行感冒」 「流行性感冒」
- 一三二頁二行「歸らない」 「歸られない」
- 一三四頁二行「s」 「to」
- 一三九頁六行「歸米と」 「歸米の」

289.1N652Wm
(t6)

目 次

第一編 郷 國 時

- 一 出生前後の時代
 - 二 家系及び父母
 - 三 父母に對する先
 - 四 母君の逝去と宗教
 - 五 少年時代の教養
 - 六 小學校教員時代
- 第二編 基督教救
- 一 大阪に於ける修養
 - 二 梅花女學校に於
 - 三 郡山教會時代

○正 誤 表

○九五頁一〇行十二字の次の讀點()は句點()	正
○一二五頁八行「病と氣」	「病氣と」
○一二八頁七行「經驗から」	「經驗からも」
○同 頁一二行「復案」	「腹案」
○同 頁一三行「友人の方に」	「友人たちに」
○一三一頁三行「流行感冒」	「流行性感冒」
○一三二頁二行「歸らない」	「歸られない」
○一三四頁二行「 る 」	「 る 」
○一三九頁六行「歸米と」	「歸米の」
○一六三頁五行「侵入」	「進入」
○一六六頁二行「保護」	「保養」
○一九五頁九行「剛腹」	「剛愎」
○二〇一頁三行「ところで」	「ところが」
○二四四頁二行「生命自原」	「生命自爾」
○二六七頁五行「も」	「が」
○同 頁八行「普通の」	「普通の」
○二六九頁六行「はれた」	「はれた」
○二八五頁九行「される」	「された」
○二八七頁六行「卒業での」	「卒業までの」

289.1 N 652 Wm
(t6)

目次

第一編 郷國時代

- 一 出生前後の時代……………一
- 二 家系及び父母……………四
- 三 父母に對する先生の回想……………八
- 四 母君の逝去と宗教心の萌芽……………一六
- 五 少年時代の教養……………三三
- 六 小學校教員時代……………三六

第二編 基督教牧師時代

- 一 大阪に於ける修養と教育事業……………四三
- 二 梅花女學校に於ける教育……………五二
- 三 郡山教會時代……………七三

四 新潟に於ける傳道と教育……………六四

第三編 日本女子大學校設立準備時代

一 米 國 留 學……………二〇九

二 女子大學設立運動……………二六四

第四編 日本女子大學校時代

一 時 代 的 背 景……………三二

二 發展と其の精神的要素……………三四

三 日本女子大學校に於ける教育……………三九

四 新な使命觀と社會運動……………三六三

五 晩年の集中要點……………二九二

六 罹病と永逝……………三〇八

あとがき……………渡邊英一三二

成瀬先生



第一編 郷國時代

一 出生前後の時代



出生 天が大任を負はせて、斯の人を此の世に送り出した時は、實に安政五年、即ち紀元二千五百十八年、西曆千八百五十八年の六月二十三日であつて、その呱呱の聲のあげられた處は、周防國吉敷郡吉敷村である。

時代の概観 今少しく内外當時の時勢を一瞥してみると、先生の生れられたのは、明治維新を距つること正に十年、ちやうど第十九世紀の中葉に方つて、歐米東洋を通じて世界的動搖の時代、多事多難な交代錯綜の時代、又それは政治、經濟、教學、文藝、美術の社會各般にわたつて、さまざまの近代革新的發展の時代であつたのであるが、殊に我が國に在つては、この世界的潮流の餘波をうけ、國內の事情の切迫と相俟つて、大動搖大變轉の絶頂にさしかゝつた時である。即ち先生が生前五年の嘉永六年（紀元二五二三、西紀一八五三）には、米使ペルリが浦賀に、露使が長崎に來航し、超えて安

一 出生前後の時代

一

政元年にはペルリが復び渡航して、米國との間に假條約が結ばれ、尋で露英蘭の諸國にも之を許し、函館下田長崎等の開港を約した。同三年には、外國事務局が幕府に設けられ、同四年には、米國の使節ハリス始めて將軍に謁見して、國書を奉呈し、伊井直弼大老となり、同五年、即ち先生が生れた年には、更に改めて米、露、英、佛、蘭との通商假條約が結ばれ、紛紜暗闘の中心であつた將軍家の繼嗣問題が解決され、將軍家定の薨去、改革運動者の大捕縛等の事件があり、その翌年には、從來の諸港の外に、始めて横濱が開港され、吉田松蔭を始め、改革運動者の多數が刑に所せられ、萬延元年には、伊井大老の暗殺、徳川齊昭の薨去、國使の洋行があり、其の翌文久元年には、浪士の英人襲撃、皇妹和宮の御降嫁があり、かくて、同二年の、生麥に於ける英軍人斬殺事件、荷蘭への留學生派遣、元治元年の蛤御門の變、長州征伐、英佛米蘭聯合艦隊の馬關砲撃、慶應元年の露英佛へ留學生派遣、同二年の長州再征、樺太境界決定問題等の幾多波瀾を経て、遂に慶應三年の王政復古となつたのである。

時勢の影響 先生が人格の搖籃となつた時代は、實に此の如き世界的背景を持つた、國民的慾望と熱情との沸騰洶湧が、舊制度の防波堤を奔溢し突破した、國家的大變革の直なかで、多事多難を極め

た時であつた。殊に先生の生國たる山口藩は時勢激動の一中心地、時代轉回の一樞軸になつたが爲に、藩内にも之に應ずる、激烈な抗争と變動とがあり、幾多の先輩憂國の士が、苦悶難闘の間に生死し成敗するといふ、非常な空氣の中に呼吸した先生は、たとへまだ東西を知らぬ幼孩であつたとはいへ、絶えず耳朶を打ち、唇鼻を襲ふ鞞々の響き、脉々たる波動から、暗々の裡に強い刺戟を受けずには居なかつたであらう。殊に志士の氣慨を稟けて生れた資質であつては、尙更のことである。又維新後の國狀も、大勢は既に定まつて、新時代の急潮を遮ぎる、何等の大勢力も表面に無かつたとはいへ、幾百年來沈澱して居る、封建的習慣氣風の暗礁は、猶牢乎として社會の裡面に横はり、之に激して揚げられる、反動と過誤との波は、恰も大暴風後の海面のやうに、洶湧して容易に収まるものではなかつた。

此の間に在つて、多少の新しい教養に與つたものが、何等か國家改善のために爲さなくては居られない氣風を、無意識の中に得て來るといふのも、亦當然のことであらう。實に維新前後の二十年は、熱烈なる改善主義者を哺育する搖籃として、たとへ絶好といふことは出來ないとしても、恐らくは恰好のものであつたに相違ない。

二 家系及び父母

家族 父君は小左衛門と呼ばれ、山口の支藩、吉敷の藩士である。母君の名は歌子、同郡大歳村の舊家で、やはり同藩士である秦家から嫁せられて三人の子を持たれた。先生はその第二子である。上は久子といふ姉君で、長じて鈴木家に嫁せられ、今(大正十年)もなほ健在である。下は弟で、初めの名は文吉、後に晋と呼ばれ、十三歳の時、山口町の竹下家の養子となつて、その翌年病死された。孰れも三つ違ひの兄弟であつた。

祖先と遺傳 祖先は筑後の久留米で、毛利家が封を山口に移された際、君侯毛利秀包(註、小早川隆景の子)に従つて、その城地であつた吉敷(註、初は與志岐、又良城とも書く)に移つたのである。それから先生に至るまで九世、初めは川崎姓であつたが、父君の時代から成瀬姓に變つた。遠祖から先生を數へて廿一代の間は、他家から養子を入れたことは、一度もなく、皆嫡男が家を嗣いださうである。

又精神方面で見ると、父祖三代ともに皆教育家として命名を博し、其の墓碑が孰れも門下生によつ

て立てられてゐるといふことは、如何なる家風の傳統であるかを語るものである。

父君の性格 嚴君小左衛門氏は維新當時まで萩城に出仕して、多くは君側に侍し、主として文書に關する事務を管掌した人で、所謂祐筆であつた。意見としては開港論、公武合體論の方に傾いてゐたやうであつたが、當時藩内に大騒亂を起した實際運動には、全然關係しなかつたと傳へられる。

その人柄は温厚篤實、謙讓にして能く人を容れる度量があると共に、又剛毅謹嚴な人で、平生言語寡く、起居動作を忽せにせず、子弟の前でも、禮節を崩すといふことがなかつた。而も公共隣保の爲には、誠意を捧げて熱心に盡力するといふ風であつたから、居村の人達は、何か面倒な事件が起ると、必ず相談なり、仲裁なりを持ちこんで來る、氏はいつも快く之に應じて、其の解決をつけるのを常とした。併し氏は道徳一遍の木強漢ではなかつた。趣味が深く、文藝の才に長けて、平素詩歌を嗜み、殊に俳諧は俳號を曉坊と呼んで、宗匠を許されたほどで、また能書の名も取つてゐた。其の讀書好きは全く生來であつて、子供の時はよく小さな弟の守りをさせられたが、いつも弟を負うては村の神社の森の中に往つて、本ばかり讀んでゐたといふことである。

父君の態度 嚴君は決して物に動じない人であつた。強い地震が突然ゆり出して、人が皆驚いて戸

外に飛び出しても、坐つたまゝ泰然としてゐるといふやうな人であつた。従つて喜怒哀樂につけて軽く声色を動かさない。子供などを、容易に言葉に出して教訓したり、讃めたり、叱つたりするといふことがなかつた。口で説かずに、實踐躬行で例示するやうな人であつた。それ故沈黙の中にも、押し返すことのできない威厳があつて、其の言付けはよく子供だちに守られた。

先生が三歳の春、父君が勤務に出てゐる留守中、ある日例のやうに庭前に蓆を敷いて、遊ばされてゐたが、玩具を持つて、餘念なく遊んでゐるので、家の人たちは、晝食を取るために、先生一人を残して、家の中にはひつた。その後で、玩具に飽きた先生はそこらを歩きまわつたと見えて、門外にあつた小池に落ちこんでしまつた。折りよく隣家の人が通りかゝつて、水の上に浮いてゐる先生を見つけて引き上げてくれた。さうして駆けつけた祖母君なども一しよに水を吐かせたり、火を焚いて暖めたりした結果、漸く息を吹きかへした。

役所に居られた父君にも知らせたので、すぐさま歸宅はされたが、其の顛末を尋ねもせず、又家人の不注意を叱りもせず、平生の通り、唯靜かに黙つて居られたといふことである。

またこれはすつと後の、先生が八つか十かの冬のことであるが、或る日父君の言付けで、半里ばか

りも隔つた處に買物の使にやられて歸つて來ると、父君はそのつり錢を勘定して、一厘だけ多く取つて來たのを見付け、「これは取るべき金でないから、すぐさま引返して、返して來い」と言はれた。其の途中は淋しい田舎路で、而も雪の降り出した日が、既に暮れかゝつてゐたのである。併し先生は従順に、足袋もはかずに駆け出して、いひつけ通り、餘分の金をかへして來たといふことである。先生は後に

「この時の印象は、非常に強く残つてゐる。自分が後に公金を取扱ふ機會を多く持つたにも拘らず、一度もそれを私するといふ誘惑にかゝらなかつたのは、幼時かういふ教育を受けたからである。」と言つてゐられる。先生は又父君が膝を崩したり、足をのべて火にあたつたり、定食以外に間食などをしたり、或は物見遊山に出たりしたことを見なかつたといふことである。これ等の話を綜合して考へると、先生の父君はおよそ如何なる性格の人で、その子どもに對して、如何なる態度をとり、如何なる教育を授けられたかといふことがわかる。

母君の性格 先生の母君は早く亡なられて、その平生を記憶してゐる人が殆どない爲に、どんな性格の人であつたか、十分にわからないのは遺憾であるが、僅かに先生の記憶によれば、やさしい、情

愛の深い人であり、親戚の人々の記憶に存してゐる談片に依ると、言葉が少く、温厚で方正、忍耐力に富んでゐたといふこともあるし、又父君の温厚鈍重であつたと違ひ、才氣潑瀾とした女丈夫型の人らしかつたといふ話もある。多分その兩方面を具へた人であつたのであらう。

先生の性格と父母からの繼承 思ふに先生が大事に當つて泰然不動、而も寛宏にして能く人を容れ、進んで社會公共の爲に貢獻しないでは屬られない、剛毅堅忍、忠實熱誠と、讀書を好み、思索を好み、努勉修養一日も廢せざる向上的精神とは、之を主として父方から承け繼ぎ、一度斯うと思ひ立つたことは、寸刻の猶豫もなく之が實行に移り、其の目的を達成するまでは決して止めない。途中に如何なる困難が起り、障害に出逢つても、直ちに之を突破して飛躍するといふ、情熱的、積極的、奮闘的、征服的の性格は、之を主として母方から承け繼がれたのであらう。

なほ兩親の性格、子どもに對する態度等に就いては、時折講話の材料にされた、先生の回想談に實證を求めよう。

三 父母に對する先生の回想

回想談一 先生は「澤山保羅傳」の中に、自分の幼時の教育に就いて記述されてゐるが、その部分の草稿と思はれる邦文の記録の中から、こゝに抄出することとする。

「父は嚴格に過ぎ、母は愛情に過ぎたるものありき。故に余は幼年の時、米國人の如く、一度も父と戯れ、父とおどけしことなく、常に尊敬の念と、極まじめなる愛情ありき。然れども母は之に反し、誠に柔和にして、愛情あり、且つ馴れ／＼しくして、敬畏の念なく、親友の如く交るを得たり。故に余は母に我儘をいひ、命令に反きしを覺ゆと雖も、父に對しては余が生涯一言半句も言返し、或は父の命に對して理屈をいひしことなし。」

回想談二 先生は幼い時に母君を失はれたために、その性格や育て方に就てはあまり記憶してなかつたし、又嚴格な、武士道的鍛錬が眞の教育であると信じてゐたので、自分の人格の基礎を作つてくれたものは父君であり、又其他の男子である。母君はじめ婦人からは、何等の好影響を受けて居らぬ、むしろ性格を傷けられたと、相當長い間考へてゐた。それで次のやうな意味の談話をされたことがある。

「私の母は五つの時(註、これは誤算)死んだので、一つ二つしか記憶は残つて居らぬが、あまり感

心しないことである。祖母も伯母も隣りのおばさんも、私にとっては少しもいゝ印象を與へてゐないので、私は婦人といへば身の毛がよだつやうに感ずる。そこで女が愛を缺いたならば、その結果はどうであらうか。女が子どもを虐待する結果は何であらう。婦人は男子を苦しめるものである。人の心を苦めるものは婦人である。婦人がこんな風で社會はどうなるだらう。どうしてもこれではならぬ。先づ婦人から改めなくてはならぬと考へて、私はひと晩泣いたことがある。これが女子教育のために身を捧げることになつた、そも／＼の動機である。云々」

右の談話中、子供を虐待する云々は、勿論先生の實母に對する感想ではない。先生は父君を非常に尊敬して、子供に對する態度は、父君のやうでなければならぬと考へてゐたので、祖母、母、叔母などが自分を非常に愛してくれた事實を認めつゝも、それは盲目的の溺愛で、正しく人間を育てる眞愛ではなかつたと考へられたのである。

回想談三 ところが明治四十年の夏、三十年ぶりで慕參のために歸省されて叔母君の口から亡き母君に關する話をきき、前の考へを訂正されたのである。而して次のやうな談話をされたことがある。

「誰か賢婦に遇ひしや」私が女子教育に身を捧げたのはこの不満から出發したのである。これを先づ感じたのは、私を産んでくれた母親についてである。私が物の理を辨へるやうになつてから、母に就いて心から感ずることができなかつた。然るにそれは私の誤りであるといふことを知つた。歴史上の偉人は母の感化に依つて出來上がつてゐる。併し私の性格を作つてくれたのは、母でなくて父であると思つてゐたのは、誤りであるといふことを發見した。

何故に母の感化は善くないものであつたやうに印象されたかといふと、母の妹や祖母が非常に私を愛してくれたが、父は又非常に嚴格に私を取扱つて、その間に雲泥の差があつた。それで祖母などの愛は姑息な愛でいけないものと思ひ、而して母もこの祖母や妹の系統であるから、善くなかつたのだといふ考へを作つたのである。併し父は大抵萩の役所に詰めてゐて、家へはめつたに歸らなかつたから、(註、「三年に一度ぐらゐのほか歸らなかつた」とも話されてゐる。)私共三人の兄弟のごく幼少の間は、母が非常な苦心をして、育てゝくれたのである。私の性格には、奮闘的なところに加ふるに、感情的なところがあるが、これは母の系統から受けたものである。私の生涯は沙漠を歩くやうな境遇を経て來たのであるが、その間に言ふべからざる同情慈愛を感じたといふのは、實に祖母の愛であつた。又叔母の愛であつた。先生は又次のやうな回想談をしてゐる。

「母の方は私の六つの時、今(註、明治四十年十二月十七日のこと)から四十三年前の、この頃の晝前であつたが、腸チブスで死んだ。吾々兄弟は祖母の處に預けられてゐたが、どうしてもいけないといふので、つれてかへられた。その時母は眼をつぶつてねて居るので、私は悲うて、『お母さん』と聲をあげて呼びかけたら、手を振つて何か知らせたから、もうそんなに呼ぶなどいふのであらうと思つて、それから黙つてゐた。それが母との別れであつた。その時私は聲をあげて泣いたが、祖父が『男はそんなに泣くものではない。お母さんは別に貰つてやるから』と言はれた。その外にその前後の記憶はないが、今國へ歸つて、母の妹が生きてゐるので、その叔母から『お前の母は實にわれ／＼の如きものでなかつた。なか／＼敬服すべき人であつた』といふことを聞いたのである。」

回想談四 先生は父君の自筆の短冊を五枚手許に保存してゐられたが、これは門弟達の俳句に、父君が評をされたものであらうといふことである。父母の記念祭の折、これに就いて感想に續いて、次の意味の話をされた。

「『うるはしき心ばかりの年ごもり』これは年の暮になると、新年を迎へる用意をする。その時に自分を省るといふことを深く教へられたので、この句が一番私に父のことを思ひ出させる……私は

夜寝る時と朝起きる時とに、何か感動を受けるやうな習慣があるが、これは父が、年の暮には己れを省みさせ、元旦には一年の計畫を立てさせ、打初め(註、鐵砲の打初めのこと)をしたり、遙拜をしたり、その折々につけて、常に物を考へる習慣を養ふやうに導いてくれたことに就いて、昨夜から今朝にかけて、深く感じました。……

私の一番父に就いて感謝してゐること、又自分の親であるからでなく、第三者の立場から公平に考へて、深く感じて居ることは、感化力の非常に強い人であつたといふことである。それは子供の上に最も權威を持つてゐる父親のことであるから、當然であると言はれるかも知れぬが、私は小さい時から、自分を深く愛してくれるにも拘はらず、母でも祖母でも、どうもありがたくない。父はこはいけれども、どちらかといへば、父の方がいゝと考へられた。郷里に私の畏敬した先生が三人ある。今(註、明治四十年)は八十ばかりと、七十四と、七十ばかりになる人々で、皆今日生きてゐられるが、郷里でも人物であると思はれるこれ等の人には、すべて父が私を從學させてくれたのである。けれども自分の最も心服したのは、やはり父親であつた。善い事を最も多く教へてくれ、生涯を貫く教訓をしてくれたのは父親であつた。父親は無口な人で、決して叱つたり、尤めたりした

ことはなかつた。私は粗暴であるが、父は温厚篤實な性であつた。

明治の初年に私共が番兵に出ることができるので、歳は足らぬけれども、私もどうか出して下さいと父に願つたことがあつた。父はだまつてゐて、翌日になつても、翌々日になつても、遂に返事をしてくれなかつた。返事はされぬけれども、これは父の氣に入らぬことであるといふことが、子供心にもわかつたものであるから、思ひ止まつた。又私は獵に往つたり何かすることが非常に好きであつたが、父はそんな事に耽つてはならぬと一言も叱つたことがなかつた。併しその心持はわかつたのである。獵に行つて、大きな猪を撃つて來たこともあり、松茸をとり往つて、籠に一杯持つて還つたこともある。こんな事は近所中でも滅多にないことであるのに、一言もほめてくれない。併し喜んで居られることはすぐわかつた。學校から久しぶりに歸つた時なども、自分の學問の進んだことを喜ばれることが、無言のうちに明かであつた。叱られたことが唯一度あるのは、私が友達と喧嘩をして勝つた。それを私の父に告口したので、父は何も言はずに、私をつかまへて、細引で柱に括りつけて、頭の上から筵をかけた。この争ひが私のセルフイシユなところから起つたからであつた。

片側は山、片側は谷で、寺が一軒あるきりといふやうな、寂しい山路で、こはいところでも夜更けてから使ひにやられたことも度々ある。武士といふものは平生油断をしてはならぬといふので、こく小さい時には刃を引いた刀を、少し大きくなると、眞劍を與へられて、夜寝る時にはいつも枕頭に置いたものである。私の一番好きなのは鐵砲で、小さい時から與へられ、彈藥はいつも澤山貰つてゐた。かやうに武を奨勵され、又元來私が武藝を好んでゐたにも拘らず、讀書の趣味を養ひ、小さい時から哲理などを考へるやうな、つまり文事の方にもはひつて往つたのは、是亦父の感化に由るのである。

今度歸郷して見て驚いたことは、家の位置とか、山川のたゞすまひとか、感覺的のことは少しも記憶に残つてゐなかつたに拘はらず、何か非常に感動した時の事は鮮かに記憶してゐることである。その最も深く印象の残つてゐるのは、父の死ぬる時のことである。丁度三十三年前の今頃であつたが、その廿日前に私の弟が死んだ時に、病氣で寝てゐた父は一寸薄圍を被つたゞけで、だまつてゐた。併しすぐ顔を出した時には、涙を流した容子も見えなかつた。それから愈々わるくなつて、三日ばかり唯呼吸をしてゐるだけで、とう／＼一言の遺言もなく絶命した。父は一度も神佛の前に頭

を屈めなかつた人で、一生涯迷ふことなく、恐れる事もなかつた人であつた。感情も強く、意志も強い人で、大地震の時に、大抵の人は念佛を唱へたりしたのであるが、父はちやんと坐つたなりで、相變らず煙草を吸うてゐた。私の生涯に就いては非常に心を用ゐられたにも拘らず、「お前は勉強しなくてはならぬ」とか「立身せねばならぬ」とかいふ事は、一度として言ひきかされたことはなかつた。併しこの言葉にも發せず、涙にも現はさず、沈黙の中に發揮された精神といふものは、私はどうしても忘れることができない。その力に勵まされて、私は讀書につとめるやうにもなつた。これは私の父に感謝して措かないところである。父の温厚篤實なところ、又その文學趣味などをば、私は受繼いで居ないが、唯その意志精神は傳はつてゐるのである。私が今日努力奮闘獨立の主義で立つことも、讀書を好むことも、すべて父の賜である。……故に私は父が死んだとは考へてゐない。父の意志は確かに私の心の中に生きてゐるのである。この意志の結合さへ出来れば、この女子大學も永久に續いてゆく。それが出来れば、私は何時死んでも、少しも厭ふところはないのである。……」

回想談五 先生は「自己の教育でも他人を教育するにも、『克己』といふことを最初に置く性癖を持つてゐる。而してこれは自分の教育に最も力のあつた父君の習慣に依つて、幼少の時から出来上がつてしまつたものであらう」と言つて、次のやうな話をされてゐる。

「克己といふことであるが、進まうとする時に、自分の不完全を感じるから、一番先きに自分を責めることになる。次には自分に近いものを責めることになる。私の父などは自分の子どもを責めた。子どもの時はそれ相應子供仲間の交際を持つてゐるから、随分その間に利害の衝突、感情の衝突が起るのである。かかる場合に、何時も自分が親から責められたことを忘れることができない。……他所でよい人は家では厳しい人であるといふことがよくあるが、私の父はこの傾きであつたらしく、」

回想談六 先生は父に叱られたのは一度だけと前に話してゐられるが、自著の「澤山ポーロ傳」の中には「唯二度だけである」と言つて、前にもあげた談話をもつと精しく書いてゐられる。その一度は課業を怠つたために、棒で頭を打たれたことがある。他の一度は前の談話にも出てゐたことで、一層精しくなつてゐる。

「九つぐらゐの時に、遊び友達と口論を始めて、とう／＼なぐり合ひになつた。それを二時間も續けて、互ひにへと／＼になつたが、終に自分が勝つた。その子どもが口惜しがつて、泣きながら父

の處へ往つて訴へたので、父がすぐ出て来て、なぜそんなことをするとどなりつけた上で、手を後にまはして柱に縛りつけ、荒筵で身體を包んだ上を細引でぐる／＼巻きつけたまゝ放置された。二時間ばかりで繩を解かれたが、友達は勝ち誇つた容子を見せるし、この時はいくら父でもあまりひどいと思つて、家へはひらずに、すぐ近處の叔父の家へ往つた。併しすぐ後悔して、家へ歸つて一緒に夕飯をたべたが、その晩は父がいつもよりも優しくしてくれたので、自分の機嫌はすぐ直つた。又こんなこともある。

「私は外の子どもだちと石合戦をよくやつた。ある時上唇に石を投げつけられて、夕飯に家へ歸つた時には、ひどく腫れ上がり、痛みも烈しかった。私はだまつてゐた。父も母も、それを懲罰として思ひ知れと言ふ風にだまつてゐた。」

四 母君の逝去と宗教心の萌芽

衰弱と回復 三歳の折の厄難に、先生は運好く水底の藻屑となることをば免れたけれども、乳離れなどのためか、この頃健康がわるかつたところにこの事があつたので、その後の衰弱が容易に回復し

なかつた上に、晋君の生れて間もない際であつたから、養護の手も十分にまはりかねた。ところがちやうど母堂の實家の近處に、灸の上手な醫師があつて、よくきくといふ評判があつた。その灸でも据ゑて見たらといふことになつたが、その灸は一週間ぐらゐつゞけて、毎日据ゑなければならぬので、かたがた秦家に預けられた。秦家には祖父母があり、母堂の妹の叔母君が夫を迎へて、家を嗣いでゐられたのであるが、痩せ細つて、抱き上げると、首がだらりと垂れるやうになつてゐる先生を見た時には、回復はとても覺束ないと思はれたさうである。(編者曰ふ、「池に落ちてから、三十日の間は人の肌で煖められた」といふ話もあるが、それは生家でか、秦家でかわからない。)併し灸の効驗と、非常に手厚い看護とによつて、すん／＼健康がよくなり、一と月ばかりのうちに、略常體になつたので、漸く父母の手許に歸された。

叔母君の愛撫 秦家は矢原といふところで、先生の家から二十町ばかりの近距離であつたから、少し大きくなつてからも、先生はよく遊びに往つて逗留してゐたが、非常な「いたづら見」で、作物をあらしたり、喧嘩をしたり、その苦情を毎日のやうに、近所の百姓だちから持込まれる。叔母君がどんなに叱つても、一向きかないので、叔母君も自身の子どもはあるし、殆ど持てあまして「そんなにいふ

ことをきかないなら、家へ返してやるぞ」といふと、いつも「いや〜」と首を振つた。父家にゐるとき、母君などが「そんなにきかないと、秦へやつてしまふぞ」といふと「秦へ往くの旨い〜が、叔母さんが居ないといふなあ」と言つたさうである。そんなに叱られて、叔母君がこはかつたのであるけれども、秦家へゆくと叔母君にばかり懐き寄つて、どこへゆくにも、決して側を離れなかつたと、これはことし八十六(註、大正十年)で、まだ鏗鏘として居られる叔母君の追懷談である。この叔母君の先生に對する愛情は實に濃厚であつた。先生の死後には寫眞を佛壇に飾つて、念佛供養を怠らず、何か事があると、「仁藏や、仁藏や」と呼びかけて、生きた子どもに物をいふやうに、こまかに報告するのを常とされる。先生も亦起死回生の恩ばかりでなく、平生の愛情に對して、深い感謝の念を持つて居られ、後にその肖像を描かせて、父君の肖像とならべて、校内居宅の寢室に掲げて置かれたのであつた。

母君の逝去 世相の變轉、生活の動搖は、嘗に世界と、國家と、郷國とのみのことではなかつた。先生が靄靄和樂の郷たる家庭の内にもやつて來た。而してそれは殊に猶幼齡であつた先生が精神上に、大なる影響を與へたのである。其の事故の最初にして、且つ最大なものは、實に母君の永逝といふことである。

先生が齡漸く八歳に達したとき、晋君を産んでから、とかく不健康であつた母君は、俄かに又重いチブスに罹られた。傳染性の悪疾であるから、母君は一時の情を忍んで、子どもだちの安全を計るために、三人とも秦家にあづけられた。先生はまだ何の考へもなく、自分の家同様に嬉戯してゐたが、或る日も例の通り、一日遊んで外から歸つて見ると、母君が愈々悪いから、すぐ歸つて來いといふ報知が待つてゐた。そこで早速迎への者につれられて驅けつけた。間もなく、まだ漸く三十を超えたばかりの母君はいたいけな子どもたちを残して息を引きとられた。慶應元年十一月七日のことであつた。

宗教心の發起 この母君との死別は、實に先生の精神の上に深い印象を残したのである。先生の直話によれば、父君の役所からの歸宅の遅い時など、姉弟三人で佛壇の前に燈明を上げて禮拜してゐるときに、父君の心持には、何とも言へない、不思議なものがあつた。その後寂寥、不自由の感を増すにつれ、又他家の子どもだちが、母親の愛撫を受けてゐるのを見るにつけ、何かにつけて母を憶ひ出し、なぜ母は居なくなつたのであらうか。母は死んで極樂に往つたのだといふが、その極樂とはどんなところで、どこにあるのであらう。そんな疑問が、臍氣ながら、絶えず胸中を往來してゐた。祖母などの話

を聴いたり、又祖母や姉弟と一しよに寺へ往つて法話を聴いたりしたが、勿論子どもに納得できるものではなかつた。母を追慕する心情にからまつた、死の不思議に對する疑問は、いつまでも残つてゐた。而して祖母、叔母等の相次いで亡くなつたことは、更にその感情と疑問とを深めた。蓋し母君の死去は、先生の心を人生問題、宗教問題に喚び起す第一曉鐘であつたのである。

母君への追慕 間もなく繼母が迎へられて、其の鞠育の下に頼ることゝなつたのであるが、どうも初に經驗した母の愛といふものを、満足するまで享受することができなかつたらしい。前述のやうな父君の性格、又勤務のため不在勝ちであつたといふやうなところから、恰も母鳥の翼に暖めらるる雛鳥の様な姿で、全く母君の被覆の下で大きくなつた先生の境遇、殊に情熱的な先生としては、當然なことであつたのであらう。爾後先生は屢々「母を亡つた子の不幸」を口にされたといふことを聞けば、以て慰められない當時の失望を推すことができるであらう。而して又後年女子教育に對して心血を濺ぐに至つた一動機は、隠然この間に伏せられてゐたものと見ても宜いであらう。

五 少年時代の教養

あばれつ兒 「私は小さい時に學問が嫌ひであつた。本を習ふといふこと、算盤を教はるといふことが誠に嫌ひであつた。まだ夜の白まぬ前に起きて、朝の稽古にゆくことがまことに嫌であつたのみならず、總體學問をするといふことが苦しいことであつた。夏は川へ泳ぎにゆき、秋は獸獵にゆき、松茸狩りにゆく。又友達と隊を組んで、隣の村へ喧嘩をしかけに行くことが、面白くてしかたがなかつたのであります。」

と、少年時代の告白をされて、又「自分は實に粗暴であつた」とも自評をされてゐる通り、又叔母君の談話にもあつたとほり、先生の少年時代は随分激しい「あばれつ兒」であつた。泉山といふ山丘が、先生の家の西方を塞いで峙つて居り、その峯の低くなだれた、鬱蒼たる小山が、家の背後二町ばかりに迫つてゐる。又二三町ばかり東の方には吉敷川が流れてゐる。この天然好箇の運動場で、幼い先生は犬を追つたり、馬を驅けさせたり、喧嘩をしたり、山狩り、川狩りに、甚大の興味を湧かせてゐたのである。

先生は後に、「何でも自分でやつて見るのでなければ、ほんたうの事はわからぬものである。」といふことを學生に話す時に、その例として、この頃の事を次のやうに話された。

「吉敷川に岩山といふところがあつて、そこへよく泳ぎに往つた。その邊には猿猴などが居て、こはいところであるけれども、皆が川にはひるから、私とはひつた。初めは泳ぎ方を知らなかつたが、誰も教へてくれるものがない。水が深く、足が底にとどかないから、水の底をあるいた。それで泳ぎを覚えたのである。この水の底をあるくといふ経験から、溺れた者を助けたこともある。馬にも乗つたが、これも乗り方を知らない。その上暴れ馬もある。併し私は『こはい』といふことを知らなかつたから、遂に上手になつたのである。」

殺伐な環境 斯ういふ先生の氣質に加へて、時代が前に言つたやうに物騒であつた。殊に漸く物ごころのつき初めた頃の、先生の意識を刺戟した直接の環境は、殺伐を極めたものであつた。その容子も先生の談話に聴くことゝしよう。

「私が幼時の記憶の中で第一の出来事は、私の母の亡くなつたこと、これははつきり頭に残つて居ります。その次に微かに覚えて居るのは、うす暗い頃に役所から使が馳せて来て、『今敵が何處で發砲をし始めたから、油斷してはならぬ。何時兵火に罹るかもわからぬから、愈々の場合には、どこそこに逃げてゆく支度をせよ』と知らせたことである。その時私は七つか八つ(註、これも誤算

である)かの子供であつた。

その後の記憶は戦争、討死、割腹などいふやうな、すべて殺風景な事ばかりです。私の近所に寺がありました。此處は死人や怪我人を運びこむ處になつてゐた。山の上から見ると、大砲が鳴る。人が斃れる。死體をどしどし寺にかつきこむ有様です。一體私の生れた土地からは、奇兵隊といふのが澤山出ましたが、奇兵隊の兵士は裸體で鐵砲をかついで、敵に向つたものです。私の向ふに庄屋があつて、その家の或る者が、一錢の卵を一錢五厘であると言つたので、その者が庭に引出されて、兵士に殺されかけたのを、人々の嘆願で、漸く赦されたことも目撃しました。奇兵隊の一人が誤つて發砲して、友達の腕を撃ち落とした謝罪に割腹したことやら、私共の教はつた先生が激しい議論をして腹を切ると、その兄さんが介錯したことやら、私の従兄も議論をして、久しく閉門を命ぜられた(註、これは多分佐畑信之氏のことであらう。佐畑氏は内海忠勝氏と共に相携へて脱藩して、奇兵隊に加はり、幕府との戦争に、小瀬川といふところに出陣してゐる時、軍略上の事で、軍監太田報介といふ人に抗論し、軍規違反の廉で切腹を命ぜられたのを、内海氏や先輩高杉晋作等の取做して赦されたといふ)ことやら、斯ういふ見聞ばかりの、殺風景な中で、吾々は教育を

受けたのである。それ故どんな考へを持つかといふと、先生も從兄も、國の爲めに生命を捧げた。吾々も國のために命を捨てなければならぬ。士の家にも男と生れた以上は、何時でも國のために死ねべきであるといふ考へが、子供心にも吾々の肝に銘じたのである。それだから、子供の時には、自分分は軍人にならうと決心したのである。併し父は私が軍人になることを好まないで、文學の方、即ち學問の方に導いてくれたのであります。」

軍人志望

藩軍の一部隊たる吉敷の軍隊は支藩の先祖秀包の諡名をとつて宣徳隊と呼ばれてゐた。

その兵士たちが軍樂に依つて進退する勇ましい訓練を目撃して、羨しくてたまらない。軍役に出ようとして父君に願つたが、許されないので思ひ止まつた話は前に出てゐるが、又違つた時の話では、「父君が許してくれさうもないので、或る夜そつと家を抜け出して、軍隊に加はらうとしたのを、家族に見付けられて、引き戻された。父君は例の通り叱言を言はれなかつたが、二三日の間一言も物を言ひかけられなかつたので、大變父の心に逆らつた、悪い仕事であつたと氣がついて、それから一層從順に、一層奮發して學問に身を入れるやうになつた」ともある。とにかく父君がもし尋常一樣の人であつたなら、先生はその一側面の性向と及び時代境遇の刺戟とに導かれて、遂に軍人になつてしまつ

たかも知れぬ。さうしてもし軍人になつたとすれば、籌算を帷幄の裏にめぐらして、勝を千里の外に決する謀將であるよりも、陣頭に三軍を叱咤して、強敵を摧破しなければ止まない、勇敢果斷の猛指揮官として令名を馳せたであらう。先生の幼時はさういふ氣質の子供であつたのである。

敏感と柔順と自制

先生は併し普通のあばれつ兒と言はれ、軍人などになりたがるものに屢々見る

やうな、單純淺薄で機械的な子供ではなかつた。少し年をとつてくるに従つて、その一面に父君の意向を無言の中に識得して誤らないやうな、頗る敏感なところを示す子供であつた。又叱られないのを好い事にして、横着と剛情とを募らせるとは反對に、無言の教訓に隨順して逆らはないといふ、敬虔眞摯な柔順性を現はしてゐた。子どもの時から現れてゐた、この鋭敏な直覺性と、敬虔な柔順性と、及び外力の威迫を俟たぬ、自治的意力とは、女親達の深い愛撫にも拘らず、嚴肅厲刻とも思はれた、父君の方を善いものとして尊んだ理性と共に、後來の生活に大きな關係を持つところの、先生が人格的要素であることを見のがされない。

創始性と模倣性

先生は又幼時から工夫力に富んでゐて、玩具や器物などをよく自分で製作されたさうである。こんなことは不便な土地と、不足がちな家庭と、これ等の境遇にも促されるが、勿論生

來もある。又一方では大人のまねが好きで、大人のやることを何でもやつて見なければ承知しないといふ氣質もあつたさうである。これは創造力と模倣力とを兼ねた、實行的性格の稟賦を示すもので、やはり後年の事業を成す素地が既に有つたものと見られる。

最初の學問 家庭に於ける學問の奨励とかその躰け方とかは、前に引いた先生の談話の中にも窺はれるが、ごく幼少の折には、父君母君の若い時分の苦學のことや、學問修養に關する故事逸話などを、父君が話してきかせたさうである。五歳頃(註、先生の記憶)から、家で讀書習字を學び始め、六歳頃から學校に通つた。而して「己の欲せざるところ、之を人に施す勿れ」といふことを、最もよく教へられ、又卑怯といふこと、虚言を吐くこと、盗みをする事、物事を祕することも、非常に厳く禁ぜられた。これも武士的教育法の要點であつたのである。

先生が最初に就學したのは、吉敷の城下に在つた、憲章館(註、その館趾に今吉敷小學校が建つてゐる)といふ小學校であつた。憲章館は支藩設立の藩學で、本藩萩の明倫館と對峙したものであるが、程度の比較からすると、明倫館を藩政時代に於ける防長二州の大學と見れば、憲章館はその豫備校ぐらゐのところであつた。その最後の館長は古學派に屬する服部東陽といふ、碩學の聞えのあつた人だ

さうであるが、先生の談話によれば、こゝで主に教へられた人は太田保助(註、前現太田報介と同人か)といふ家老格の人で、當時一般の教科書であつた、日本外史、十八史略、蒙求、四書などを學んだ。先生は當時の回想談を次のやうにしてゐられる。

憲章館に於ける學習 「私共の子どもの時には、四季の別なく未明に起きたのです。無論冬でも足袋をはかず、書物をかゝへて、一人で憲章館といふ學校へゆく。一番先きに講堂へ出るのがいゝので、着いた順に坐つて習つてゐると、暫くしてから夜が明けるといふ有様であつた。」

「私共の子どもの時には、眠たい時にも眠たいことに克つといふ教育法でありました。朝は暗いうちから學校へゆかねばならず、算盤や外史の講釋などは、夜學ぶのである。晝は擊劍や何かあつたので、書物は多く夜に學ぶのですから、眠い時には膝をつめてゐたのである。」

學校へ通ふのにも、父母は非常に嚴格で、決して遅刻を許さなかつた。冬の朝でも、足袋も下駄もはかず、裸足で雪や霜を踏んで往つたこともある。而して火の氣のない大廣間へ坐つて本を習ふのである。つまり武士的鍛鍊を嚴格に行はれたのである。

先生の從學した人には、太田氏の外、藩の儒者名井守介といふ人、又明治になつてから、長く吉敷

村長をつとめて、縣下を擧げての名村長と稱されたといふ、谷川山泉といふ人などがある。先生の談話中にある、畏敬した三人の先生といふのは、この人々にあたるのであらうか。當時の學問は漢學が主であつたにつれて、訓育は無論儒教道德によつたものであつた。一般の風習通りに、學校には孔子が祀られ、自分の室には菅公の像を懸けて、毎日禮拜をしてゐた。

獨學主義 先生の家の活計は裕かでなかつた。時代はわからないが、火災の爲に三度まで家が全焼したさうであるし、又前にもある通り、父祖は皆正義廉潔の君子人で、殊に好んで他人や公共のために盡力するといふ風であつたから、元來餘財がなかつたのであるが、維新後になつては一層困難に陥つた。その上父君の勤務中には、士の家の嫡男として、幼いながら母を助けて、留守をしなければならぬといふ責任もあつたから、先生が本來の性格と、父君の教育とに加へて、更に境遇上、強い獨立自治の氣象が養はれたのである。従つて學問の方でも、自然に獨學主義をとるやうになり、又或はむしろとらなければならなかつたのである。そのやり方の一例をあげると、初めて洋算を學んだ時には、少し知つてゐた年上の學友の手引きで、川原の砂の上に字を書きながら、一日で大體のやり方のみこんで、それから書籍を買つて、全く獨りで加減乗除比例と進んださうであるが、それに就い

て、次のやうに話されてゐる。

「私は數學が好きであつたから、いろ／＼いたしましたけれども、決して先生にはたよらないといふ決心を致しました。さうすると原理を見出すのに大變骨が折れたけれども、一つのことを三日でも四日でも、その道理のわかるまで考へたのです。」

學問は自發的の興味に基いた自學によらなくてはいけないといふ教訓の例に、又幼時の事を引いて、
「當時は何でも人から教へられさへすれば覚えられるものゝやうに考へて、十二三の頃にはもう左傳でも何でも讀んだものであるが、今記憶に残つてゐるものは、自分が興味を持つて讀んだ日本外史の外に何も無い。」

「漢學は先生から教はりましたが、これは一番まづい仕方であつた。天文、地文、物理、化學、英語に至るまで、皆自分で研究いたしました。」

始て學問のために家を出る 幼少の時代に學問嫌ひであつた先生も、時勢が變り年齢も進むにつれて、本來の遺傳的天賦がだん／＼芽を吹き出し、十二三ぐらゐからは、是非とも學問をしなければならぬといふ考へになつた。その事で叔父とも議論し、友達とも議論したと自分で言はれてゐる。實際に

もう一と角の考へを持つた、ませた子どもであつたと見えて、「まだやつと十二三のくせに、もう私に意見をする。」と、繼母が親戚などに話したさうである。それで十三の年に(註、明治三年にあたる)小郡(註、吉敷から三里ほど、三陽本線の停車場のある一小驛で、山口方面への分岐點になつてゐる。或る人はこの小郡ではなく、三田尻のやうであつたともいふ。)に病院を開いてゐた、福田徳介氏の許に調剤手として住みこむことになつた。先生は自分の年齢に就いて何時も誤算をしてゐられるから、この時の十三といふのも精確とはいひ難いが、とにかく「十三の時志を立て、家を出た」といふことは、何回となく繰り返して、生涯の一轉回としてゐられたやうであるし、女子大學校の立つたことに就いて、「十三の時の理想夢が實現されるとは、不思議な感じがする。」といふやうな話をされたこともあるのに徴して見ると、多分漠然ながらも、男子として何か一大事業を成就せねばならぬ。その準備として、まづ家庭を出て、新しい知識を外に求めなくてはならぬといふやうな、一大決心を以て思ひ立つたものと推察される。或る場合に「父は私を醫者にしたいと考へた。それで醫者のところへ行つたのであるが、どうも人の身體をいぢくることなどはつまらない。何か天下の事をしたいと思つた」といふやうな話をされたことのあるのによると、父の希望で醫者の家に修業に往つたのではあるが、先生

は自分として違つた考へを持つて、唯々自宅では得られない新知識を求めつつもりで、そこで勉強したのであらう。この時の回想談を次に掲げる。

「私が十三の時、自分の志を以て親に願ひまして、學問に出かけました。この時にはもう本を教はるとか、講義を聞きに行くとか、義務的のことではないので、自分の勝手であるけれども、誠に面白かつたのである。そして勉強をするにも、自分ながら驚く程の勇氣と熱心とを以てすることができたのであります。其の時には夜十二時になつても少しも眠たくない。時には三時頃までも寝るのが惜くて勉強をしました。何をやるよりも、本を読むこと、學問をすることが好きになりました。これほど不思議なことはないと思ひました。」

「十三の時家を出てからは、夜學問をして、眠くなると、頭を擲つたり、澤庵をかぢつたりして、眼をさましたものである。隣りの油屋で、ガタン、ガタンとやり出すと一寸ねむりました。それはどうしても三時頃でした。」

子どもの時に蘭學をやる機會を持つたとか、病院で獨逸の物理學を譯して話してくれるのを筆記して置いて、夜になつてから研究したなどと話したところで見ると、福田といふ人は外國語の出來た人

なのだらう。とにかくこゝでは主に理化學の勉強を始めたのである。調劑手とは言つても、書生も小使も兼ねたやうなもので、晝は藥研で藥を碎く外に、使ひ歩き、拭き掃除もやれば、草取りもやり、夜はよく米搗きまでさせられたさうである。それで晝間は暇がないので、自分の勉強はおもに夜したのである。米搗きをやる時はいつも本を読んださうで、蹈み臼であるから、横木に書籍を持ちそへて、足で杵をふみながら讀んだのである。先生はこの病院に一年ばかり居たやうに、後で話したことがある。前にあるやうに、先生は「醫者などはつまらぬ」と考へたのであるし、又「どうも學問をする暇がなくてこまる」と、叔母君などにたび／＼こぼしたさうであるから、先生は自分から見限つて、早くこゝを出られたのであらう。

「若先生」 明治五年、まだ學制發布前に、父君は二十町ばかり離れたところで、山口町に接近した、湯田といふ小さな町に、小學校様の學塾を開いた。(註、これは學制發布後に、町の有志の立てた小學校に父君が聘されたのであつて、獨力で學校を開く餘裕などはなかつたといふ説もある) 寺小屋と漢學塾と小學校との合の子のやうな風で、教科書には四書五經、小學讀本、福澤翁の「世界國盡し」「西洋事情」などを用ひ、習字と洋算とをも課してゐた。先生はこの學校で、暫く父君の教授を手傳つた。

生徒たちは「若先生」と呼んで尊敬したさうである。

先生はこの頃の學問は大抵獨學であつたらしい。やはり米を搗きながら、絶えず書物を讀んでゐられたさうである。どこでもこの時代にはさうであつたやうに、先生の地方でも、もう漢學などは役に立たないからと言つて、父祖から傳はつてゐる漢籍類を、二束三文に賣りとばしてしまふやうな人が多かつた。先生はそれを廉く買つて貰つて、讀み耽つてゐられたといふ話もある。

令弟及び父君との永訣 明治七年の末、先生は續けざまに令弟と父君とを失つた。十一月の末に今年十四歳(註、十五ともいふ)の晋君がチブスで危篤だといふ報知を受けたときには、前から健康を害して、臥尊してゐられた父君の言付けで、馬で山口の竹下家に馳せつけたが、もう末期に迫つてゐて、先生が手を握つて物を言ふ間もなく、この世の人ではなくなつてしまつた。この報告を持つて歸つた時、父君が暫時夜具で顔を被うたといふやうな、悲傷の容子を見せたことは、外に記憶にないことであると先生は言つてゐられる。それから廿日すぎた、十二月十七日に、父君も亦晋君の後を追つた。年は五十五であつた。先生は弟との別れには非常に泣いたが、父との別れには、深い決心を起こして、もう泣かなかつたさうである。

六 小學校教員時代

教員養成所入學 明治七年山口縣教員養成所(註、後の師範學校)が設立されて、生徒を募集した。新しい學問に飢えてゐた先生は、その入學試験を受けて合格し、八年一月(註、或は七年十二月?)第二期生として入學された。當時の學生は大かた半白の老齡、有髯の壯年で、當年十八の先生は最年少者であつた。併し例の非常な勉強で、第一學期の試験に、在學生六十餘名中第三席の成績を得たさうである。

先生は始めのうちは興味を以て勉強したが、規則が變つたためか、途中でいやになつてしまつたと言つてゐられる。

「自分の志ではひつたから、初めの六ヶ月は愉快に勉強を致しましたが、それからは規則を以て括られてしまつた。そこで非常に嫌になつて、どうかして出たいと思ひましたが、官立の學校であるから、もはや出ることができない。仕方なしに卒業して、今度は小學校の校長にされた。その時も實に苦しかつたのである。」

先生のやうな性格と經驗とを持つた人が、殊に規則と注入とを生命とする當時の學校の教育に初めから不満であつたのは、固より當然のことであらう。

小學校長 九年六月、十五人の同期生と共に養成所を卒業して、同縣熊毛郡の某小學校長となり、巡回訓導を兼ねた。巡回訓導といふのは、郡内の各小學校を巡回して、教員に教育教授の方法を傳授する役目である。何處でも當時の教員は多く士族で、漢學仕込みの老先生も少くなかつたから、とにかく正則の師範教育を受けたものである以上、珍重されるのは當然であらうが、それにしても、先生の卒業成績がやはり優秀であつたものと見られる。

先生はそれから室津郡二島小學校長に轉じ、更に湯田に轉じた。その間も勉學に骨を折つたのは勿論で、土曜日の午後には、山口町の某氏の許に通學したが、その往返の途中は、いつも書物を讀みながら歩いたさうである。

胸裏の諸問題 前にもあるやうに、先生は養成所に在學中、既にその教育法に半ば無意識ながら不満を感じたが、小學校長として實地に當つて見て、愈々その不満を大きくした。自然と生活との間に得來つた活材料を、自家の獨創力で熔鑄して、新機軸の教育をやつて見たいといふ要求が、だんだん強

くなつて來たと共に、多少外國の教育事情などを知るにつれて、形式づくめの官公立學校の不自由を感じ、自己の信するやうな教育を行ふには、どうしても自分で起こした學校でなくてはならないといふことを、この時代からつくづく感じたと言はれてゐる。

先生は福田氏の許にやられた頃から、何か世界的の事をしたいといふ考へを持つたとあるが、年齢と共に、その考へも次第に増大したやうである。それは當時の時勢と、郷國特殊の事情とから推して、極めて自然のことであらうが、併し先生の欲望は又尋常以上に大きかつたのである。先生が最初の任地は公爵伊藤博文氏の郷里であり、二島小學校は子爵山尾庸三氏が設立したものださうであり、最後の湯田には公爵井上馨氏の別荘があつたりして、それ等先輩の消息をきく機會は常にあつたので、先生の欲望は、又之がために直接に刺戟された。それで先生は「こんな郷里にぶら／＼してはゐられない。たとひ人の下僕になつても何でも、何か國家的の事をしなくてはならぬ。貧乏士族であつても、やらうと思へば出來ないことはない。」と考へたと話されてゐる。

教育改革と國家的事業との外に、當時先生の胸中を占領した問題は、自己の修養といふことであつた。これまでの散漫な常識的の學問では、もはや満足して居られない。自己の人格的慾求からしても、

亦教育政治等の活動準備としても、更に深く廣い新知識の必要を感じた。而もその要求を充たすべき教化は、先生の周圍に存在しなかつたのである。併し修養に關して更に深刻な根本問題は、人生に關する徹底的解決の要求で、八歳の時に、母の死といふことによつて、おぼろ氣に開發された宗教心が、年と共に次第々に發育しつゝ、この二十歳前後、恰も精神の轉回期に達した、その上特に潑刺たる精神を持つた青年の胸裏に、廣い人生觀宇宙觀の問題の形をとつて、強く擡頭して來たのであつた。

基督教との接觸 かういふ時に、米國に留學してゐた郷里の先輩澤山保羅氏が偶然歸省した。知識

には飢て、問題は溢るゝばかり胸裏に堆積した先生が、早速澤山氏を訪はれたのは固より當然である。先生の訪問に對する澤山氏の應酬は基督教であつた。質疑、説明、討論が一日一夜にわたつて續けられたといふのによれば、先生の欣求と會心との深さを推測することができる。先生はこの澤山氏との會見によつて、人生解決の鍵鑰は基督教に在るといふ斷定を得た。さうしてその夜の中に基督教を信じようと決心し、それから毎日澤山氏に就いて、聖書の研究に力められた。この時の追懷談には、

「私は七つの時から十四五の時まで、斯ういふ問題に就て苦んだことは非常なものであるけれども、一日話を聽いて、生れ變つたやうな心持がしました。」

「私は六つの時に母を失つて以來、自分は一體どこから生れたのか、上帝などといふものはあるものだらうかといふやうな Inquiry spirit があつたから、澤山といふ人が外國から歸つたときに、一日、夜に至るまで話をして見て、『これは眞實である』と思ひましたので、その晩から酒もやめ、その翌日の日曜を守り、クリスト教で道徳といふ總ての事を守り、罪惡といふ總ての事を斷ちました。そのために親類から迫害をも受けたけれども、少しも苦みませんでした。さうして吾々は耶蘇教といふものが、恰も蛇蝎の如く思はるゝ時に當つてクリスチャンとなり、天下に向つて福音を宣へ傳へたのです。其の時の吾々の考へには誤りがあつたけれども、した事は誠でありました。」

かくて數日の後澤山氏は大阪に歸ることになつたので、先生はそれを好機として職を辭し、氏と同船して郷里を見捨てたのが、明治十年の夏、西南戦役のまだ終熄しないうち、先生の數へ歳が二十の時であつた。さうしてその事を親戚故舊などへも廣く話さずに、極めて神速に決行されたやうである。

出郷の動機目的 先生の出郷の動機目的は明瞭でない。澤山氏と共に大阪まで往かずに、神戸で下船して、當時兵庫縣吏として重要な位置に居た、從兄佐畑信之氏の許に身を寄せたところによつて見ると、基督教を主題としたのではないやうである。先生と最も關係の深かつた近親某氏の推測では、佐

畑氏の助力を得て、學問をしたいといふのが主目的であつたと思ふといふことであるが、當時學問と立身とを求めて郷里を出るといふことは、全國有爲の青年間に於ける、一般の風潮であつて、又先生が強い慾望でもあつたのであるから、前説も謬りではなからう。政治的社會的大活動をやる端緒を捉らへようとする動機もあつたのであらう。とにかく當時の先生が胸裏には、教、政治、知識、信仰の諸問題が入り亂れて渦を卷いてゐた。これ等の問題の内容は皆違つてゐるが、唯々先生を郷里から外に驅り出すことに於ては、總て一致したものである。

神戸に於ける生活 佐畑家に於ける先生は、親戚といふよりも一介の食客として、裏には深い精神と、大きな志望とを藏しながら、殆ど下僕同様に働かれた。さうして自分の勉強は、幼時同様、主に夜分にされた。この時の追憶談を次に引用する。

「神戸に出て、從兄の處に居た時には、從兄の靴もとつた。労働をすることも、下女下男に決して劣らなかつた。初めのうちは、大きなことばかりいふといはれたけれども、暫くの間に、私はその家になくてならぬ人となつた。子どもの教育、家の留守番、其の他一切の事を委ねられるやうになつたのである。」

「天下を支配しようといふ野心を持つて居つても、雑巾がけでも、水汲みでも、下男よりはすつと善くしたのである。何故に自分が放蕩にも陥らず、現實の事を最も忠實にすることができたか、誰にでも本能はあるのである。けれども何がそれを支配して、私を墮落させなかつたかといふと、一つの遠大な抱負があつたからである。」

先生が従兄の前に靴まで執つたのは、強ひられてしたのではなく、又自ら卑めて、阿諛したのではなく、與へられた仕事として、人に對する深切として、自ら進んで勤めたものであることが、前の談話の間にほの見えてゐる。この「遠大な抱負を持ちながら、目前の事を最も忠實にやる」といふことは、先生が一生の生活態度を總括する、不用意の自己告白である。

神戸を去る 佐畑氏の弟が脚氣のために、郷里に轉地して療養することになつたとき、先生はその附添を頼まれたが、病人は船中で急に衝心を起して死亡した。その遺骸をそのまま郷里に運んで、埋葬した先生の萬端の處置が、非常に深切であつたので、一層佐畑氏の信用を得たといふこともある。動機がさういふところにあるかどうかかわからないが、佐畑氏は先生を官吏に推擧しようとして、熱心に勧めたさうである。併し一週間ばかりの間、屢々議論を戦はした末に、遂にその勧誘を拒絶された。

先生が拒絶の理由は、神戸に来て以來、益々深く基督教を信するやうになり、嚴格にその規律を守ることになつたのであるが、當時の官吏生活は、基督教の信條道徳を守るに不都合であつたためであると、先生自ら話されてゐる。さういふこともあつたし、又佐畑氏は基督教が嫌ひであつたし、他面には先生が愈々基督教信者として奉仕しようといふ決心も固くなつて、寄寓以來二三ヶ月で、佐畑家を去つたのである。但し佐畑氏は後に重患に罹つた際、先生の説話に感動して、遂に基督教信者となつたと傳へられる。

澤山氏の書翰 前述の、先生の出郷及びそれ以來の行動に關して、澤山氏から米國の教友ポーター夫人といふ人に書き送つたものがあるから、次に引用しよう。

(前略)

此夏小生が郷里山口の家に還りし時、基督教に對し趣味深く感激せし一青年に遇ひ申候。彼は小生が滯在中、毎日聖書を繙き研究致申候。かくて小生大阪に還らんとせし折、彼は共に神戸迄來り、某高等官たる従弟の所へ參り申候。此青年は信仰益進み、將來教役者たらんと決心せし次第、然るに彼の従弟は之に反對して、官吏たるべく説き奨め候へども、拒絶して應ぜず。若し官吏たらば、

時々安息日を破らざるべからず。安息日を破つて官吏たらんよりは、寧ろ神の聖なる法律を守つて奴隸となるの優れるに若かずと斷言せる趣きに候。かくて彼は已むなく従弟の家を去り、昨土曜日大阪に來り、既に洗禮を受けんと用意致居候。其信仰は驚くべく増進致居申候。(後略)

(武本古木合著、「澤山保羅傳」四〇頁)

第二編 基督教牧師時代

一 大阪に於ける修養と教育事業

先づ前神氏に寄る 神戸の佐畑家を去つた先生は、すぐ大阪に出て澤山氏を訪れた。而して多分氏の紹介で、浪華教會の長老前神醇一氏の許に、一とまづ寄寓することになつたのであらう。「手提鞆一つさげて大阪に出て、この前神君のお宅に泊つて居りました。」と先生は話されて居る。

前神氏は先生よりも年長者で、藥劑師として既に一家を成してゐた。若い時は長崎に遊學して、英和辭書を著したこともあるさうであるが、熱心な基督教信者で、澤山氏等と共に浪華教會を起した人である。温厚篤實深切忠誠といふやうな人で、性格は先生と大に違ふところがあつたし、後には先生と信仰をも異にしたに拘らず、終生互に友情を渝へなかつた。殊に梅花女學校の創立の際や、その維持經營の困難を凌いだこと、先生の渡米や、又留學中家庭の窮迫を切抜けることのできたことなど、總て最も多く氏の力を煩はしたのである。それ故先生は全く肉親の兄のやうに、常に氏に信賴

し、感謝して、家事上、經濟上の内密なことまで、一切打明けて相談する、唯一の人といつていゝやうな間柄になつてゐた。明治三十九年頃、大阪から上京して先生を訪問した氏を、女子大學校の生徒に紹介して、一場の談話を請うた際、次のやうな冒頭の言葉を以て、感謝の意味をくり返されてゐる。

「本校が創立されましたから、五ヶ年と一學期たちまして、漸く第六年の二學期に入りましたが、その起原を考へると、遠く三十年の昔に溯らねばならぬといふことを、前に私が申しました。先日
の記念式に、凡そ十年前からの發起人の働きを御紹介いたしましたから、あなた方も略本校の歴史がおわかりでせうが、その十年よりもまだ以前の發起人があるのであります。それはあまり世間から注目せられないで、最も深き土中に埋もれてゐるところの、本校の根の如きものであります。此の如く最も古く、最も深き根であるところの發起人は澤山にありませんが、その一人であるところの前神醇一君は、三十年來、女子教育に最も深き經驗を以て、本校のために力を盡して下さつた方
であります。」

前神氏の談話や、その手許に保存されてゐた、先生の古い日記や、書翰やなどが、この傳記の編纂について、最も貴重な材料となつてゐるのである。

受洗と聖書研究

先生は大阪に出てから一月ばかりすぎた同年十一月三日に、浪華教會で、澤山牧師に依つて洗禮を受けられた。この時の先生の感激は想像に餘りあることである。而して聖書の研究と又實行と傳道とに、人を驚かす熱心を示したことは勿論である。行住坐臥の間に聖書を離さず、椅子の上でも、路上でも、暇さへあれば讀んでゐたので、外國宣教師の間には「聖書を持つ青年」といふ渾名で通つたさうである。

この熱心は、前にあげた澤山氏の手紙でも驚嘆されてゐるが、先生はわが日本を救ふには、どうしても無限の神の力に頼らなくてはならぬと信じ、而して之がためには、宮内省は勿論、皇室も基督教に改宗させ奉らなくてはならぬと考へて、そのために日夜血の汗を流して祈つたと、自ら話されてゐる。

先生と澤山保羅氏

先生が斯の如き熱心に更に力を興へ、その純一な信仰に培つた人は、實に澤山保羅その人である。郷里に於て面會以來十年の間の先生の生活と仕事とは、全く澤山氏の指導誘掖激勵感化の下に立つてゐたと言つてもいゝくらゐで、かういふ交渉を先生と保つた人は、他に類がないのである。澤山氏も深く先生を愛重信頼して、優れた大傳道者たることを期待してゐたやうであるし、

又先生も澤山氏の精神を最も深く理解し、その信仰を受け継ぐものは自分であると竊かに自任してゐた口吻を洩らしたことがある。それゆゑ先生は實踐倫理の際などに、甚だ屢々氏の生涯や事業を例に引いて「わが生涯に於て、最も尊敬した人は澤山君である。」といひ、「自分が生涯の人格に最大の感化を及ぼしたのは父であり、自分に犠牲的生命を養つてくれ、集中的努力を教へてくれたものは澤山君である。」と感謝してゐられる。それで先生の生涯を知るために澤山氏がどんな人であつたかを大體記憶して置く必要がある。

澤山氏の修養と轉向 澤山保羅氏は先生と同藩士で、また同村に生れた人である。幼名は馬之進、嘉永五年三月廿六日に生れたとあるから、先生には六歳の兄で、幼少の折、先生の父君に讀書習字を學んだことがあると、先生の「ポーロ傳」に記してある。夙に俊才を以て目せられ、幕軍侵境の際には、年少ながら、劍を執つて幕兵と戦つた。その後學問の爲に神戸に出て、宣教師米人グリーン博士に知られ、其の勧誘と助力とで、明治五年米國に渡航し、イリノイ州エバンストンのノースウエスタン大學豫備門に學んだ。氏は既に基督教の信仰に入つては居たものゝ、渡米學問の目的は歸朝後官吏として働くための準備であつたのである。

然るに修學三年の後、その後暫時歸國してゐた、日本派遣宣教師レヴィット氏が、日本に於ける基督教傳道の急務を説き勧めたのを聽いて、大に感奮し、遂に方針を變へて、神のために働くことに決心した。而してその後一年間全然聖書の研究に没頭して、著しい感動もあり、飛躍もあり、愈々自己の使命を自覺した。使徒ポーロの人格と教説とを慕つて、名を「保羅」と改めたのはこの間のことである。同胞救済の熱望に燃え立つた氏が、更に種々の準備的修養をしてからにしてはといふ、先輩や教友の勧めを振りきつて歸朝したのは、明治九年の秋であつた。

教會の創立 當時基督教はまだ全然日本の社會に受容されず、異端邪説として取扱はれて居た時代で、氏が渡米の際には、異教に改宗しないといふ誓約書を、藩命で父に差出したぐらゐであつたから、年時が少し経つたとはいふものゝ、信教はまだ社交及び生活の阻絶を意味し、親戚故舊を始め、氏の信仰と宣傳とに反對するものが多く、殊に父母の失望と困惑とが大きかつたと同時に、他方には又氏が人格と才能とを知る先輩朋友は、高給を以て官職に就くことを勧めたのであつた。併し氏は決心を變へず、大阪に往いて傳道に従事し、十年一月浪華教會を興して、その牧師になつた。當時の教會員は男女合せて十一名、氏の俸給は六七圓位に過ぎなかつた。

澤山氏の人格と徳光 元來以前から漸次健康を害してゐたらしい氏は、其の後間もなく肺患に罹り、あまり長くは生きられないといふ宣告を受けて、十年の牧師時代の時間の、三分の二は病床で過ごしたほどであつた上に、五年間に、父と母と夫人と、子供と、妹と五人に永別したのであるが、氏が精神は肉體の衰弱、境遇の不幸と反比例に、益々緊張を示し、勇敢な献身、鋭敏な良心、赤兒のやうに純真な信仰、高雅な態度、聖靈から來るやうな力のある言葉と、嘗て米國人を讚嘆させた氏の人格と熱信とは、寸刻の懈怠もなく、傳道に向つて集中した。實にその羸軀に現はれる信仰の光は、神を實證する輝きを示し、熱血の籠つた説教、祈禱、談話には、屢々基督の聲を、直接に聴くやうな響きがあつた。而して無私の慈愛に充ちた其の實行は、説教にも増して貴いものであつたと傳へる人は言つてゐる。その結果は殆ど神祕的の魅力となつて、人の肺腑を撃ち、信仰を呼び醒ました。嘗て「不改革の誓約書」を書かせた氏の父も、氏に依つて洗禮を受けた。先生はこの頃の事の一例を、次のやうに話されてゐる。

「日本にリヴァイヴァルといふことの行はれたのは、私の教會、私の學校が初めであつて、又それを眞先きにしたのは澤山といふ人であつた。さうしてその第一の弟子のやうに感じたのは私でし

た。私の學校は非常に感じて來て、同校の學生が悉く悔い改めたのである。眞に感じて來ると、盜みをした人、虚言を言つた人、虚榮等の凡ての罪をさらけ出したのである。私はもうこの事を日本中に廣めねばならぬといひましたが、澤山といふ人は、それはいかぬと言つて、止めました。(註、先生が「廣めねばならぬ」と言つたのは、かういふ貴い奇蹟的事實のあることを新聞紙で宣傳して、信仰の證明とし、布教の材料としようとしたのであり、澤山氏の押し止めたのは、吹聴、廣告めいたことになつてはならぬといふ意味であつたやうにきいてゐる。)

初め微々たる教會も、かくてだん／＼發達すると共に、其の信徒の熱心な點に於て、團結の鞏固で、且つ相親和してゐる點に於て、殊に教會内に、常に純潔高貴な感激の充ち溢れてゐる點に於て、全國の模範教會といふ名を傳へられるやうになつたのであつた。病氣が進んでからは、教會へ來て説教の壇上に立つまでは、いつも別室で横臥してゐなければならなかつた。終つて歸宅してから、疲勞の爲に直ぐ床上に僵れて、翌日まで殆ど人事不省の状態を續けたこともあつた。それにも拘はらず、壇上に於て迸り出る、言語の間に充ちた神々しい熱力は少しも衰へなかつた。又吾身を忘れて人を思ふ濃かな愛情は、愈々深切を増して往つた。慰藉を送るために病床を訪うた人が、却つて慰藉を與へられ

て歸るのを常とした。澤山氏が絶息前一日までも奉仕の仕事が続けて、靜かにこの世に於ける使命の終焉を告げたのは明治二十年三月廿七日、年算は三十六、我が國に於ける基督者としての活動は、僅に十一年間に過ぎなかつたのであるけれども、併し神によつて我が國の精神界に据ゑられた、最も光輝ある礎石であつたのである。

澤山氏の指導一例 武本、古木兩氏の合著に成る「澤山保羅傳」にのせられた、先生宛の多數の書簡によれば、先生に對する澤山氏の深甚な心遣ひを察することができ、なほ直接に提撕を受けた容子を右の傳記によつて拾つて見よう。多分明治十一年ごろであらう。共にまだ獨身であつたので、先生は他の教友二名と、澤山氏の寓居に、數ヶ月間合宿したことがある。先生が一友人と、或人の私行に關して、非難がましい噂話をしてゐると、それを隣室で聞きつけた澤山氏は、鋭い聲で「成瀬君、君はよく事實を訊しもしないで、他人の批評をするのか。見もせず、知りもせぬ事に就いて、他人をかれこれいふ權利が君にあるか。」と烈しく叱咤した。澤山氏自身が決して他人を批評しなかつた人で、他人にもそれを許さなかつたのである。又或る朝、先生がまだ床の中に居る間に、ふと何か思ひついて、「澤山さん」と話しかけると「成瀬君、私はまだ祈禱しないぞ」と強く遮られた。それは、澤山氏

が毎朝起きると、まづ第一に神に祈禱を捧げて、それから人に物を言ふ定めにして居られたからで、「朝、目が醒めたら、まづ第一に神様に物を言はなくてはならぬ。即ち祈禱を捧げなくてはならぬ。若しそれを忘れると、その日の悪魔との戦争は必ず負けである」と、つねづね人に訓戒したさうである。

澤山氏は先生に「提摩太」(テモテ)といふ教名を與へたことがあるさうであるが、これがもし新約聖書「テモテへの前の書」の第一章の「一、二、」我らの救主なる神と我らの希望なるキリスト・イエスとの命によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書を信仰に由りて我が信實の子たるテモテに贈る。」又同「後の書」の第一章の「一、二、」……書を我が愛する子テモテに贈る」とあるに由來するとすれば——パウロとテモテの名の關係によつて、さう推測される——澤山氏は全く信仰に於て、精神に於て、道に於ての「子」として先生を見てゐたものと言つてもいゝであらう。さうしてこの「子」はつまり「後繼者」の意味とすべきである。

先生の澤山觀の一 明治三十九年、澤山氏の二十回忌に臨むために大阪にゆかれた先生は、歸校してから、次のやうな話を學生にされた。

「……澤山といふ人には、社會のため、人道のために、身を捧げて盡されたところの、燃ゆるが如

き信仰があつた。熱心があつた。さうして誠に寛容の徳にみちて居られた。その感化は電氣のやうに、怒り易い人をも、人の批評ばかりしてゐるやうな性質をも、不知不識の間になほすことができたのである。

その當時澤山といへば、神の如くに人々が敬つたのであるけれども、先生自らは、『私は凡ての罪人の首である』と言つて居られた。いづれ人間であるから、缺點は免れないのである。又如何なる人でも、尊ぶべきところは必ず有るのである。故にこの寛大な心を以て、人の人格を尊んで學ぼうとする、謙遜な人は、限りなく發達してゆかれるのである。かういふ暖い同情を以て導かれたればこそ、多くの人を感化することができたのであります……』

先生の澤山觀の二 或る時には、米國で著した澤山氏の傳を生徒に示して、

「不幸と、困窮と、病苦との中に在りながら、如何に人に力を與へ、慰めを與へ、希望を與へたか。集中した人の生涯が如何に有力なものであるかと、この書の中に明かである。この人は亡くなつたけれども、私の心の中にはまだ生きてゐる。私の人格の一つの要素は、この澤山といふ人の人格である。」

と話した後、「私は明日死ぬと言はれても、何の恐るゝところなく、唯々酬いなき仕事を續けるだけである。月復た日、起き上がり、動き、愛し、笑ひ、且つ祈るだけである。」といふ意味の、コールリツヂの言葉を引いて、澤山氏は斯ういふ人であつたと結んでゐられる。

先生の澤山觀の三

先生はまた「私はクリスチャンの中で、わが國に二人とない人を知つて居りません。その人はすでに死なれましたが、この人は虚な人でない。實を尊び、誠を慕つた人です。」と言つて、

澤山氏が幼時仙人譚を聴いて、七日間ばかり、山の中で仙人の修業をした話をされたこともある。その著「モダン・ポロ」の中に、先生が新潟教會へ赴任の際、室内での面會をすら醫師に禁ぜられてゐた澤山氏が、早朝停車場に見送りに出て來て與へた別れの言葉は、病み疲れた魂から出るのではなく、永遠にクリストの勇氣と愉快とに生きる心情から來るものであつたとも記してゐられる。又どんな困難の中でも、失望したことがない。一言も不満や不平を發したことがない。いつも勇氣と、感謝と、愉快と、希望とに充ちてゐたとも記してゐられる。而して「彼は實に勇敢に生き、勇敢に死んだ。」

“I have fought a good fight, I have finished my course, I have kept the faith; henceforth there is laid up for me a crown of righteousness.” と云ふ彼の偉大な同名の人の偉大な言葉を、確信を

以て語り得た生涯であつた。」といふ讃辭で、この傳記を結んでゐられる。

先生は前に此の人に依つて、始めて精神の眼を開かれた。さうして今又日々親炙して、神の言葉、生命の道、基督の生活、救済の事業を研究した。先生が熱誠にして強靱な飛躍的發動的天性の薪は、斯の人の芳醇清新な神來の油を絶えず注がれて、天にも冲するばかり精神の焰を燃え立たせたのである。

先生とレヴィット氏との人格的交渉 先生が大阪で得た生涯の精神的幸福は、嘗に澤山氏の値遇のみに止まらなかつた。更に一人の良師友を得た。それはレヴィット氏(H. H. Leavitt)である。レ氏は米國から派遣された青年宣教師で、信條と儀禮とで固まつた、尋常一般の形式的宗敎家ではない。誠實深切と、博大な心情と、合理的の判斷と、且つ事業的興味と實務的手腕とを兼ね具へた人であつた。澤山氏の思想を轉向させて、傳道事業に専心させることにしたのも、直接には主としてこの人の力であつた。氏は眞に基督の精神に立脚して、さうして深切に日本人の爲に考へてくれた人であつた。また日本の教會は外國人の手を離れて、日本人の手によつて維持されなくてはならぬといふ意見を持つてゐたのであつた。そんな風であつたから、他の外國宣教師とは意見が合はないで、遂に間もなく(註、明治十二年頃)本國へ呼び返されてしまつたのである。それで先生のレヴィット氏に對する心情

も、單純な外國宣教師、乃至は聖書や英語の先生といふだけの冷淡なものではなくて、其の思想上信仰上人格上に、及び傳道上の種々の活動や事業に關して、かなり深刻なそして有益な提擧を受けた。殊に先生が創意的、獨立自治的性格は、恰もレ氏のそれと共鳴して、其の刺戟啓發を受けたところが少くはなかつたであらう。「自分の眞の先生と呼ぶのは、澤山、レヴィット兩氏である」と、後年屢々先生が話されたのに依つても、氏と先生との人格的交渉は、眞實な、且つ深いものであつたことが思はれる。

英語學習 大阪に於ける先生が學習は、基督教の外は主として英語であつた。宣教師コルペー氏と、互に日本語と英語との交換教授をし合つたこともあるが、大方は獨學法をとつたやうに、自ら話されてゐる。決して邦語に翻譯せず、原語のまゝでその意味を覚え、覺えた言葉は機會のある毎に實際につかつてみるといふ方針で、又つとめて外國人と交際し、演説講話を聽聞して、その發音に注意し、少しでも讀めるやうになつては、聖書も註釋書も、總て英語のばかり用ゐた。二三年で英語が使へるやうになり、女學校で教へる物理や化學その他も、すべて英語の教科書で調べた。「私は非常なる感動を以て、總てのものを英語で研究いたしました。」と學生に話されたことがある。少し後の、明治十

五年一月頃に記した日誌の中に、英語の學習に關する自分の規定と思はれる一節がある。

(英學)一ヶ月ニ一度宛レビツト氏ニ書狀ヲ送ルベシ(編者註、此は當時既に米國に歸つてゐたレ氏に、音問を兼ねて、英文練習のために書狀を送るといふ定めであらう)又課業書聖書ヲ英語ニテ研究スベシ、(讀方、綴り、譯、文法)又談話會ヲナスベシ、又西洋人ト相談スルトキ、心ヲ注イデ音ヲ學ブベシ、時ニヨリ能ク覺エザル語ヲ帳面ニ控ヘ之ヲ學ブベシ。

二 梅花女學校に於ける教育

梅花女學校の創立 先生が大阪に出てから三月の後、梅花女學校が設立されて、先生はその教師の一人となつた。これが先生の女子教育に身を投じられた始めである。明治十年十月頃、即ちちやうど先生が大阪に出た當時であつた。大阪府下の組合教會信徒懇親會が開かれた席上で、小泉敦氏(註、小泉氏は當時官立大阪英和學校教師、浪華教會役員で、澤山氏の義兄にあたる人)澤山氏等二三の人が、女學校設立の必要を唱へ、會衆は總てこれに賛成した。多分以前から同様の意見が有志の間にできてゐたのであらう。當時の組合教會は、浪華教會と、その母教會ともいふべき梅本教會(後に大阪教會)の

二つで、信徒は合せて五六十名に過ぎなかつたのであるが、この兩教會の聯合役員會で、愈々その議をまとめ、信徒の間から、義損金三十圓を集めて創立費にあて、土佐堀裏町の借宅の二階に開校式をあげたのが、明治十一年一月八日であつた。小泉敦氏が校主(註、これは梅花女學校の記録でも、亦小泉氏の直話でも確かであるが、同記録には、別に最初の校長澤山氏ともあつて、その關係を明にし得ない。)といふことで、兩教會から選出された學校委員が經營管理の任を負ひ、二名の日本人教師と、二名の外國人教師とが授業を擔當し、生徒は最初十五名入學した。「梅花」といふ校名は、基礎となつた前記兩教會の名の一字づゝをとつて組合せたのであるといふ。レヴィット氏も素より同意見を持つて居たので、外國宣教師間に贊助の意向をまとめたのは、主として氏の斡旋に依つたさうである。この梅花女學校は、外國傳道會社の資金に依らない、日本最初の獨立自給の基督教主義女學校である點に於て、亦一個の意義を有するものであつた。

事實上の校長 先生は當時まだ年少の後輩で、入信の日も淺く、首唱者たるが如き地位には居なかつたのであるし、又學校でも表面上教師の一人たるに過ぎなかつたのであるけれども、その談話にもあるやうに、最初から別に女子教育振興の意見を有し、澤山、小泉、前神、古木等の諸氏と共に創立

者の一員に名を列ねたのみならず、實務上の中心となつて創立の準備一切に奔走し、開校式の際にはその式辭を演べ、その後の教授も經營も、その大部分を先生の努力に俟つた等の點から見て、事實上の創立者、且つ校長たる地位にあつたと言つてもいふであらう。創立相談會の席上で主任教師の話が出た時、澤山氏が先生を推薦したので、創立の議が忽ち一決したと傳へられること、準備の際には、先生が前神氏の宅に寄寓してゐた、他の一人の書生と一緒に、校舎にあてるための借宅を探しあるいたといふこと、規則なども先生が作つたことなどは、その關係を明にするものである。先生も非常な決心で、自分一人にその責任を負擔する覺悟をして、事に當つたのであつたから、後に學生に向つて「私は十八の歳に女子教育を始めた」とか「女學校を創設した」とかと、いつも話されたのである。

女子教育に身を投じた動機 先生が梅花女學校の教師になつたのは、學校が當時それを必要としたといふこともあるし、又先生自身何か仕事と生活とを必要とする境遇に居たといふこともあるであらう。併し如何なる障害があらうとも、道のために一身を捧げると心に誓ひ、澤山氏にも誓つたといふ先生にとつて、それ等のことは重大な問題ではなかつた。外に積極的の見地があつたのである。先生はそれまでの經驗上から、婦人に對して好感を持てなかつた。婦人がこんな風ではこまる。も

う少しどうかならなければならぬと考へてゐた。「私は女子を尊敬したから女子教育に身を捧げたのではない。女子に對して不満であつたからである。」「誰か賢婦に逢ひしや」これが私の動機である。」とは、先生の屢々話されたことである。

一方には又當時基督教の規律を嚴格に守つて居た先生は、阪神地方に於て、社會に儀表たるべき地位に在る士人の、酒色に沈湎して、自恣放逸の限りを盡すことを、一種の誇りとするやうな醜態を常に目撃して、慨嘆の情に堪へなかつた。今にして此の惡風を改めなければ、國は亡びる。而して此の惡風を改める爲めには、まづ教育を興して、女子の識見品格を高め、且つ家庭を改善してゆかなければならぬと考へて、時々その意見を教友などにも（多分澤山氏やレヴィット氏などにも）話されたことがあると、當時を記憶する人が傳へてゐる。

併し先生は何の迷ふところもなく、一と筋に女子教育家になり了つたのではない。「私はアンビシヤスであつた。宗教家にならうか、政治家にならうか、女子教育家にならうかといふ問題に迷つた。」と自白されてゐる。「男子で女子の教育をするのはお手傳ひをするやうなもので、歴史に残ることもなければ、成功したところで自分の功にはならぬからつまらぬと、アンビシオンは不賛成をいふのである。」

「男子で女子教育をやるのが、果して可能であらうかと度々疑つた。」とも言つてゐる。而してこの問題に對しては、大政治家も、大實業家も、大宗教家も、必要である。併しその人一代だけでは仕方がない。社會を救ひ、國家を興すためには、多數の人物が連続して輩出しなくてはならぬ。而して人物を造るものは賢母である。故にその賢母を造るところの女子教育が、根本的の大事業であるといふ論理で解決したと言はれてゐる。「政治家になるなら總理大臣、教育家になるなら文部大臣がやれる自信がなくて、眞の女子教育ができるものではない。」と言はれたことのあるのは、恐らくこの當時からの、偽らぬ心事であつたのであらう。

庶務會計小使まで 外國人教師は英語音樂(初めの一人はレヴィット氏で、音樂を教へたといふ)を教へ、澤山氏が基督教の講義をした外、普通學は初めの間全部先生の擔當であつた。その外庶務會計小使の仕事も、總て一人で引受けた。創立後二三年間は小使すら置けなかつたのである。先生は後に日本女子大學校の生徒の、勉強の時間が不足であるなどといふことを聞く場合に、よくこの時の事を例に引いて勵ました。

「私は一人で五つの組を擔當して居りました。論理も、代數も、幾何も、物理も、化學も、教育も、心理も、一切一人で教へて居りました。その化學實驗をする時の藥も、皆自分で籠を持つて、走りまはつて買ひ集め、器械も多くは自分の手で造り、或は生徒にも拵へさせ、その上會計もして、月謝を取ることから、總ての事を致して居りました。校内の掃除から草むしりをするまで、生徒にもさせ、一緒に何でも致しました。」

その事務を執るためには、夜はどうしても一時頃まで起きて居なければならず、朝は五時には起きねばならぬ。その上に自分の學問もしなければならなかつたのです。今から考へて見ると、よくも出來たものと思はれる位です。」

「學校で教へるのは朝八時から午後四時まで、その支度をすることも大變であつた。その上資金も募り、演説もし、加ふるに私はセルフサポートもしなければならなかつたのであります。けれども私は如何に忙しくとも學問はできたのであります。」

「私は何の科を教へるにしても、準備なくして教へたことはありません。修身にしても、物理化學にしても、皆夜準備をしました。それで寄宿舎を監督すること、父兄に面會することすべて致しました。初めての學校だから、生徒は少いし、家賃は高い。學校から私に與へるものは實に僅かであ

る。私はどうして生活を維持したかといふと、西洋人に日本語を教へて、その方から報酬をとりました。日曜には會が二度、時としては三度ある。水曜日にも會がある。その外毎日バイブルクラスを持ちました。深いことを考へて、精神が燃えてくると、朝の四時から會をすることもありました。その他演説會があると、それにもなるべく出るやうにしたので、毎日追ひまはされたやうなものである。

……この間の私の仕事を時間にくらべてみると、到底不思議と言はざるを得ないのである。それは多くの人の無意義に消費する時を、私は利用するからであります。郡山に居た時の艱難などは、一々申すことはできませんが、ともかく忙いといふことは、一貫してゐるのである。晝から夜まで、夜から晝までぶつ通しで、どうしてかういふ力がでるかといふと、譯がわからないのであるが、これはそも／＼何であらうか。天才は集中であると申します。あなた方が力が足りない、時が足りないといふのは、その集中ができないからである。若しこの集中が出来たならば、寝ずとも時が足らぬとは思はない筈である。集中に依つて到底人の想像し能はざる力が出るのである。」
この「晝から夜まで、夜から晝までぶつ通しで、どうしてかういふ力がでるかといふと、わけがわか

らない。」といふのは、この青年時代だけのことでない。先生が一生を通しての生活批評である。

初めから五つの組があつたかどうかかわからないが、學力のまち／＼な生徒を收容したのであるから、恐らくは個人教授に近い方法をとらなくてはならなかつたであらう。後には七級八級になり、小學校の程度を高等女學校の下に設けたのであつたから、他に助手もはひつたのであらうし、又上級生に下級生を教へさせる方法もとつたのである。またこの頃は基督教の研究の外、英語の勉強を始めたので、少し讀めるやうになつてからは、原書の教科書によつて下調べをしたといふことは前の談話にもある。外國人に日本語を教へるために、毎日二時間ぐらゐ費したと話したこともある。學校の俸給は六圓であつたと話したことがあるが、初めからそれだけは貰はなかつたのであらう。先生は澤山氏の許に數ヶ月を送つた後、別に一と間を借りて、暫く獨りで自炊されたさうである。

當時の教育法 或る人の手許に保存された當時の日誌を見ると、この時の教育に關する方針、方法、學科及び取扱ひ方、試業法及び問題、寮舎の管理、生徒名(或る一時の)などが、ほんの心覚えではあるが、かなり精しく記されてある。その當時、いかに綿密な注意を以て、いかに熱心に従事してゐたか、之に依つて推察される。先生の教育法は、當時既に大に自發自學的で、而して全く生徒本位で

あつた。生徒の希望をきき、規則も生徒に考へさせ、日課の進程も生徒にきめさせる。而してその勉學法も各自の工夫を教師が訂正して、自ら研究させ、生徒が疑問を解くことのできない場合に、始めて教師の説明を與へるといふ方針であつた。教室内などの亂れたときには、之を直ちに叱責したりする代りに、生徒各自の研究問題として、どうすれば靜肅に整頓されるかを、時を與へて考へさせる。總て罪を責めるよりも、改める道を示すといふ風であつた。

一週一回問答會といふものを開いて、各自に實踐修養上の問題を出させ、生徒間の解答の不足を教師が補ふといふ方法もとつてゐた。一方には罰點の制などを設けて、かなり嚴重に怠惰と自恣とを戒めたのであるが、其の本旨は全く自發的研究的で、従つて當時としては甚だ斬新な、デモクラチツクなものであつたのである。大阪府知事や、神戸の佐畑氏その他を學校に請待して、生徒の成績や學業の容子を見せたところが、何れも進歩の意外なのに驚いて、獎勵の演説などもしたことがあつたさうである。

訓育の主義 凡そ生徒は必ず信者となるやうに教化しなければならぬといふ方針で、之が爲に心血を濺ぎ、熱烈な精神的教育を施された。而して常に在校生徒個人が基督教の信仰を持つべきのみなら

ず、卒業生たる者は、不信者と結婚してはならぬといふ意見であつたのである。先生が熱心な鼓吹のために、校内に屢々リヴァイヴアルのやうな光景を呈した。「生徒の態度を一變させた」と自分も話された。先生は此の頃の教育意見に基いて、「婦女子の職務」と題する小冊子を出版されたさうであるが、今傳つてゐないやうである。

基督教精神の徹底と獨立主義 先生が徹底を求めて止まない精神は、教養訓育の内容に於て基督の教旨を充實せしめることに止めず、學校の經營上に於ても、同一の方針を嚴格に貫徹しようとしたのである。即ち他の處に、梅花女學校の目的と經營方針とに關する意見を記して、

「(一)神の旨のある處、信者が信仰を以て神の榮を顯すことなり、故に生徒も教師も信者も全く神に心を捧げ一致して之を爲すべきなり、若し是が世の學校の如く、神の榮の爲めならずば、吾等は今日より之を止むべし。

(二)故に若し不信者に依頼して金を募ること、即信の力に信仰を以て頼らず、世の力によるは神の榮にあらず、吾等の信仰なる賤しき心なり。又不信者より輕蔑を受けん。即ち信者は己の力を以て事を爲す能はずと言はれん、又世の人はこの學校は主に學問する所なりと誤り定めん、時によれば

人を欺くにも至らん、また或時は不都合起らん。故に余は前の主義を變ずるを好まず、又外國人より受くるを好まず、即ち世の金の力に依りて神に不信仰の事となるを好まず。」

と言はれてゐる。苟も教育の理想を實現する爲めには、生徒数がどんなに減つても構はない、經營がどんなに苦くても仕方がない。生徒の月謝と、教會の寄附金だけで間に合せ、ひたすら信仰に於ける一致協力に依つて、獨立自給、以て當初の目的を貫徹しなければならぬといふ意見であつた。

この獨立主義はレヴィット氏、澤山氏を通して流れて、先生に依つてこゝに發揮された、一つの傳統的精神であつたのであるが、又別に先生の性格に自發した、創始的方針でもあつたので、その主張の非常に根強いものになつたのも當然なのであつた。その頃組合教會に屬する全國基督教學校代表者の集會が京都に開かれた時、病氣であつた澤山氏に代つて出席された先生は、獨り立つて、外國の資金に依るのは教育の根本を弱めることになるといふ見地から、前のやうな獨立自給主義を主張したが、多數に容れられなかつたので、憤然席を蹴つて大阪に歸られたといふ回想談もある。

經營難 いふまでもなく學校の經營は非常に困難であつた。生徒は二三ヶ月後に三十名になり、續いて少しづつは増加の傾向であつたが、設立後二年ほどの間に、四回も移轉してまはつたといふ有様

で、當事者たちも絶望し、一旦は廢校の相談すら行はれたぐらゐであつた。併し先生の熱心から感動が起り、前神氏を始め、奮つて贖金する人、中には資産を賣却して融通する人などができて、數百圓の寄附金が集まり、最初に借りた家屋宅地を買ひ取つて、校舎を改築することができ、一時は安心の状態になつた。

それにも拘はらず、其後豫期したほど生徒數も増加せず、やはり維持に苦しんで一口二錢づつの維持會員を募つたといふこともある。それで教會の委員だちを始め、多數は先生と意見を異にし、外國の補助を得ようといふ人もあり、内に於ても多少寛容の方針を執つて、汎く寄附金を募り、なるべく生徒を増募し、信仰上からは雜駁の要素を加へるにしても、經營を容易にすると同時に、教育を普及させた方が善いといふ意見に傾いたのである。

先生はどこまでも此の意見に反對された。さうして其の意見を實行しつゝ、而も同時に學校の困難を救ふために、郷里に僅かばかりある田地などを賣り拂はうと決心して、川口から乗船して歸郷の途に就きかけると、その頃流行してゐた類似コレラに感染した。それで神戸で下船して、友人の家で療養を加へ、快方に向つてから、有馬温泉へ往つて、更に暫く靜養したのである。先生は此の間に熟慮

した結果、首途に當つて此の災厄に罹り、計畫の中絶を餘儀なくさせられたのは、自分の意見行動が神の思召に協はないことの象徴であると判断した。さうして有馬から大阪に歸へると、教員辭職の旨を申出た。教會學校の當事者は、驚いて百方引き留めた。教友達も大に助力するからと約束し、新に寄附金を出す人も出來たので、先生も前意を翻して、再び努力を續けられることになつた。そこで復出直して郷里に歸り、賣れるだけの物は賣つて、小額ながら學校の増築や設備の費用を助けた。これ等の困難の中に在つて、いつも陰に陽に先生を援助した率先者は前神氏であつた。「梅花女學校を維持し得たのは前神君の力である」と、先生は後に感謝されてゐる。

この時の歸國の際であつたらうか、叔父である前原家に預けておいた先祖の位牌を持ち出して、焼いてしまはうとされたのを、非常に叔父君に怒られて止めたといふ挿話がある。又「叔父には廢嫡され、従兄とは五年間絶交し、その他の親戚にも嫌はれ、郷里の總ての人々からは悪人のやうに評判されて、友人とも意見が合はなかつた。總ての人から見捨てられてゐた時が、私の最も熱心な時であつた。」と先生が話されたのも、この前後の事を指したのであらうか。郷里から大阪へ歸る途中、烈しい暴風が出て、船中の人は皆沈没を覺悟した時、先生は「私のする事が若し思召に叶はずば、このまゝ

船を沈めて下さい。思召に叶はず、この風を静めて下さい。」と頻りに祈つてゐるうちに、だん／＼海が靜になつて來たといふ話も残つてゐる。

辭職 一時は斯やうにして收まつたものゝ、學校の困難は以前の通りで、従つて先生と委員との間の意見はやはり一致がでなかつた。又先生が行動に就ても、多少周囲の諒解を缺いたやうなこともあつたらしく、同時に一面先生が基督教の信仰の益々熱烈となるにつれて、全力を擧げて直接傳道を試みたい慾求が次第に強くなつて來た。そこで再び辭職を申出たのである。この時も、せめて代員のあるまでと言つて、引き止められたのであるが、委員の方針が、自分の意見と同じく、教育事業を以て、唯々神の榮光を顯はす奉仕とする一義を、教授にも經營にも貫徹して、金よりも知識よりも、信仰を主としない限りは、止まることができぬ。且つは専心傳道に従事したいからと言ひ添へた陳述書を校長（當時は米國オベリン大學出身、大阪英和學校教師田村初太郎氏）あてに出して、遂に辭職してしまはれたのである。それは明治十五年八月のことで、學校は今年始めて卒業生二名を出し、生徒は八組四十五名に達してゐた。

結婚 先生は梅花女學校在職中、即ち明治十二年、福井縣の人服部滿壽枝嬢と結婚された。嬢は同

學校の生徒であつた人で、又やはり浪華教會で洗禮を受けた信者であつた。例の熱情に宗教的信愛も加はつて、非常に夫人を大切にされた。「あまりに妻君を大事にし過ぎる」といふ評判の起つたほどであつた。結婚後も暫く間借りをされ、尋で一戸に世帯を持たれ、さうして郷里から、後の母君を迎へて、暫く同居されたが、母君はまた郷里に歸つて、他家に再嫁され、そこで病歿されたといふことである。

三 郡山教會時代

郡山教會の設立 梅花女學校を辭された先生は、澤山師の下に副牧師のやうな格で、暫く浪華教會で働いてゐられたのであるが、そのうちに太和の郡山の傳道を專任に受持つことになつた。

大和の郡山は浪華教會の出張傳道所になつてゐて、教會員が日曜日毎に、代るく出かけては傳道してゐたので、先生も度々そこへ澤山師に附いて往つて、説教したことがあるのであるが、學校を辭した年の暮ごろには、いよく満壽枝夫人と二人で、全然そこへ移住された、僅かばかりの書籍や道具の外に、大事な荷物としては聖書とウェブスターの英辭書で、これは先生が自分で、雪の中を背負つ

てゆかれたさうである。而して其の翌年は、ごく少數ではあるが、併し神の榮えと、人の救ひとのために、木や石を運んだり、壁を塗る手傳ひをしたりする労働を心から喜ぶやうな、純朴で熱心な信者だちの助けで、ささやかな會堂が建てられ、十七年一月始めて郡山教會といふものが設立されて、先生はその牧師の職に任ぜられた。

郡山赴任の前に、大阪の浪華教會で、牧師の資格を得るための、按手禮が行はれたのであるが、その際の記事であらう、日記の中に、左の一節がある。

○牧師の任

吾を牧師傳道師となすものは人間にあらず神なり、吾に按手し此任を授けるものはイエスなり、此の任を神の旨に従うて爲さしむるものは聖書なり、故に吾らを之に任じ其の力を興へ玉ふことを神に祈る可し、又兄弟ら吾に按手し之を祝するも、亦神の恵を受けん爲なり。故に按手禮の時は常に神の恵の降らんことを祈る可し、吾々之の任を成就し善牧者となるやう聖靈の漑がれんことを祈るべし、提摩大前二の七、コロサイ一章の一、使傳六の六、使傳八の十七、使傳十三の三。」
その時の郡山に於ける信者數は約三十名ばかり、翌年になつて、四十餘名に増加したさうである。

熱烈なる傳道

この時代に於ける先生の傳道よりは實に熱烈を極めたもので、全身全靈を打ちこみ、晝夜をわかぬ奮闘は、いかにもめざましい限りであつた。先輩澤山氏の説教が、内容は平易で、且つ辯舌は巧みでなくとも、中に輝く神々しい靈的信力で、聽者を感動させずに置かなかつたやうに、先生も辯舌はむしろ拙であつたけれども、唯々その充ち溢れる熱誠は、洪水のやうに人の肺腑に流れこんで、そこに信仰の火を燃え立たせることができた。謂ゆるリヴァイバルのやうな光景が屢々見られたといふことは、當時を記憶する人の今猶ほ驚嘆するところである。

殊に先生が宗教的活動に於て、その徹底的な性格を發揮したのは、家庭傳道、個人教化などの仕事であつた。まだ信仰に入らない人、また既に一旦信仰に入つたものゝ、周圍と弱志とに阻まれて、逡巡したり横走したりするやうな人で、この人はせひとも助け救ふべきであると決定した以上は、途中で倦まず、失望せず、どこまでも深切に、根氣よく、説き、いたはり、慰め、勵まし、かつ祈つた。どんな性質の惡い人でも、社會に卑まれる人でも憚らなかつた。それで忌み憎まれてゐた悪性の犯罪人が、極めて善良な信者になつて、立派な後生涯を送つた例もあるといふ。

迫害、紛紜 勿論他方には非常な迫害があつた。路傍で石を投げつけられたり、教會へ石を投げこ

まれたりするのは、格別珍しいことではなかつた。夜の途中を襲はれたり、巡查の保護を受けた事も數度あつたさうである。又先生の説教を聽いて改宗した青年の爲めに、家庭内に紛紜を惹起して、家を逐はれたり、逃げ出したりした例もある。中にはどうしても收まりがつかないために、先生の手で、そつと大阪に落してやつて、浪華教會の先輩の庇護を受けさせた青年もあつた。教會堂が落成したその夜、正面の白壁に「耶蘇退治」と、非常な大字で書いたものなどがあつた。併し先生が不撓不屈の熱心と誠實とは、次第に反感を征服して往つた。百人以上の人が路傍に立つて謹聽し、その中幾人かは、更に先生と懇談を重ねて歸へるやうなことが、珍らしくなくなつて來た。

戦線の擴張 先生が傳道の戦線は次第に擴がつて往つた。奈良に講義所を開き、又その監獄で、囚人に説教することも頼まれた。それからまづ南方に向つて大和平原を教化する方針で、村落から村落へと、四五里の遠方まで、股引に草鞋ばき、といふ扮装で出かけて、四五の村に傳道説教をするやうになつた。その邊では殊に社會と家庭とに風波を捲き起し、従つて迫害も烈しかつたさうである。其中で、郡山から一里半ばかり隔つた荒蒔といふ村には、七人ばかりの非常に堅固な信者ができて、かなり頻繁にそこへ出かけられたやうである。

其の間には、特殊の集會や傳道の會やのために、大阪京都等に出たことも度々あるやうであるが、明治十八年の夏期には、夫人と一しよに、京都からまはつて伊勢に出張し、三四ヶ月の間、主に久居といふところに居て、折々津の町や、近村にも往つて、傳道につとめられた。津の方では反基督教熱が強く、信者が奔走しても、説教處にあてる家を借りることもできなかつたさうであるが、久居には熱心な信者と研究家とが多く、大に歡待したので、先生も頗る愉快に働かれたらしい。夫人もそこで聖書の研究と讚美歌の教授とを助けて居られた。

教育の努力 先生は郡山で傳道に努めながら、社會に一般的教化を與へる必要のあることを痛切に感じられた。先生が郡山に獨立の教會を設けたのも、唯々空に基督教を世に廣める、基督教の領分を空間的に擴大する興味のためからではない。郡山といふところを救つて、之を一つの聖なる文化的人間社會とする爲の、靈の礎石を据ゑたのであつた。併し當時この地方の教育はあまりに低級であつた。而して風俗の壞亂が甚しかつた。畢竟無智無識なるが爲に何の自覺もなく、滔々相率ゐて墮落の淵に赴く青年子女が多かつたのである。それで教會の中心となり、又教會を承け繼いで、永久に發展させてゆくところの人物を養成すると同時に、又教會といふ中樞機關を助けるところの補助機關としての

學舎、傳道の目的を知識の方面から助成してくれるところの教育が無くてはならないことを、先生は見て取つたのである。その必要から、教會ができて間もなく、夜學が開かれた。それから先生乃至教會が主となつて設立したか、町で設立したかは不分明であるが、とにかく小學校を開くためにも大に盡力された。青年會も先生に依つて組織された。かくて先生は宗教以外にも、地方教化の一勢力となつたのである。明治十八年秋の日記の一節に、次のやうな方針が記されてゐる。

○學 校

今教會は郡山の基礎となるべきものなり。故に少年を教育して、働くものを作り、吾地の凡ての惡風を一洗すべき也。故に教會なり、學校なり、確固不動の基礎の上に建つべきなり、人員の少きを憂ふる勿れ、純粹無缺のものを求めよ。

故に生徒を選ぶべし。殊に英學生は、選んで終りまで忍ぶものにあらざれば、入學を免す勿れ、吾郡山に金のふえ、富の増すを望む勿れ。たとひ貧しくも、眞に神に忠信なるものゝ多く出るを望むべし。凡て外面の事を望む勿れ。眞實の事を望むべし。事を爲すに、更に金や機械に由る勿れ。只精神によれ。

自己の修養 前述のやうな激しい外面的社會的奮闘と同時に、また之に劣らない深い内面的精神的努力が他方にあつた。傳道のあひだに、聖書其の外の書籍に就いて、教義及び傳道に關する研究をして、隔週土曜日の午後からは、大阪に往つて一泊し、病氣の澤山氏を見舞ひかたぐ、教義の不審を質し、傳道上の指導を受け、或は教會の夜の説教を助け、教友と感想を交換し、一緒に祈禱したりして、日曜日の午前に歸郡する定めにしてゐた。一人での祈禱と默想とは絶えず行はれた。祈禱には、澤山氏もさうであつたやうに、また多くの信者がさうあるやうに、教友信者だちのために恩寵を、自分のために救ひを願ひ、默想に於ては、使命の十分に遂げられるやう、常に聖靈の降り落ちて、自己の人格に神意が明耀になり、自分の働きに靈能の力の現はれる期待と憧憬との深化淨化が、透徹するまで行はれた。この動的献身と、靜的沈潜と、發揚救済と、受納修養と、内外兩面を合せて、主一無適の絶え間のない奮闘は、信仰上に於ける先生が飛躍進展を、頗る目ざましいものにしたのである。

此の時代に於ても、先生は學問といふものを重んじてゐた。勿論神の意志を明らかに、又之を宣へ傳へるために、直接必要な修養に限つてゐた。それで英語の學習——これも神の道、眞理をよく知るための——を兼ねて、神學、教會、傳道に關する書物を読み、且つ考へることを力めたのである。多忙

を極めた先生は、日々の時間割を作つて、嚴格にそれを實行されてゐた。

日常生活 郡山教會に於ける牧師としての先生の給料は、始めは浪華教會の方から受けてゐられた。月六圓ぐらゐで、その過半は教會の費用として寄附された(註、最後までそんな状態であつたかどうかはよくわからない)。郡山の信者は先生が赴任後増加したとはいへ、大抵貧困な人だちで、浪華教會員が總て収入の十分の一を教會に寄附する(註、澤山氏、前神氏などは、常にそれ以上を寄附したさうである。)定めにしてゐたやうなわけにはゆかなかつたのである。併し暫くして人員も殖え、先生の献身的熱誠に感化されて、献金することも多くなつたので、傳道費ぐらゐはこの地で支辨ができるやうになつた。先生が郡山に往つた當時は間借りで、後には一軒の家を借りたらしいが、孰れも町外れの茅屋で、手織木綿の着物に、すり切れた袴をはき、冬も火爐を用ゐず、大抵茶粥を啜つてゐる有様であつた。明治十七年の日記の一部と思はれる記録の端に、左のやうな斷片が一つある。

十月分は浪華教會との勘定

一、六圓 福島氏より受取

(外四十錢 萬壽枝分受取)但し浪華教會傳道費へ寄附さるゝ分

三 郡山教會時代

内〇四圓 郡山教會へ寄附

〇一圓五十錢 なら家賃

〇六十八錢五リン 家移入費、障子紙代、並に神澤、谷村、成瀬との夜飯料

〇四錢 車代

〇十貳錢五リン 石炭油代

〇五圓三十錢

内貳圓八十錢

貳圓六十錢

貧苦迫害

禽獸飛鳥野狐有巢穴、只主耶蘇無枕所、

愛兄君亦耶蘇徒弟、故勿煩慮懼今世貧、

この最後の漢文は漢譯聖書（當時はまだ漢譯であつた）の句をとつて、信徒の一人に書き送つたものであらう。

後に次のやうな談話をされたことがある。

「私は澤山といふ人に、如何なる困難をしても、道のために盡くすといふことを誓ひました。そして大雪の中を、ウェブスターの辭書を掲げて郡山へ往つて、五平といふ人の家で、粥をすゝつて傳道しました。けれども獨立自營といふことが主義であるから、自分の生活といふことに就ては、少しも顧慮しなかつたのである。」

實にこの時代の先生の生活には、徹底的性格が宗教の方に現はれたのである。即ち日常唯神あるのみであつた。神の言葉を食し、神の言葉を着、神の言葉に住んでゐた。先生の坐はるのは基督の命するところであつた。先生の起つのは基督の命するところであつた。先生の行くのは基督の命するところであつた。言ふこと、行ふこと、生きること、死ぬること、それは總て唯聖靈の導き、道の掟、與へられた使命の實現に過ぎなかつた。要するに、その常に親むところは、神と聖書と信者とであつて、内外唯々精神を以て充盈し、信仰を以て一貫してゐたのである。勿論是の如き生活態度は、眞面目な宗教家道德家に於て、常に見られるところのものであつて、先生に於て始めて新に啓示されたといふやうな、特異殊絶のものではなかつたのであるが、しかし其の熱烈にして徹底的な點に於て、容易に

尋常人の接踵を許さないやうな、超俗非凡なところがあつたのである。而して又其の生活の興味が全く精神的であつて、左右と後背とを顧ることなく、ひたすら理想の一境に向つて飛躍前進する態度の、熱烈で徹底的なことも、一生を通じ、あらゆる事業に亘り、常に現はれて、絶えて止まなかつたところの先生の天性であつて、先生自身にしても、何もこの時代に特異殊絶の勉強をしてゐるなど意識してゐなかつたのは、いふまでもないことであるが、併しこの時代は恰も先生が青年期を終つて壯年期に移りかけた、意氣旺盛を極めた頃であつたのであるし、殊に病惱十年、妻を失ひ、子を失ひ、其の他の家族をも、財産をも失ひ盡した垂死の床に血を吐きながら、なほ口に筆に行ひに、神の榮光と慈愛とを體現して止まない、先輩澤山氏の活きた模範と鼓舞激勵とがあり、同時に又生活條件、家族關係の比較的單一であつたところから、従つて用意の純眞を得た結果、特に人目を聳えさせるやうな外観を取つて現はれたのであらうと思はれる。

澤山氏などは、そのあまりの熱中の苦闘に、先生の健康を心配して、「留守居役の人を送るから、夏期の休暇を取つて、大阪に休養に来るやうに。いや夏は大阪も暑苦しいから、秋ぐちになつた頃に、二人で自分の留守宅(澤山氏はこの頃多く病院生活をしてゐた)に来て、勝手に暮すやうにしたらよか

らう。或は前神醇一氏のところに厄介になつて居てもよからう」などといふやうな、懇切な手紙をたびたび送つてゐたほどである。因に、澤山氏夫人は明治十七年春病歿され、澤山氏も病狀がよくなくなつたので、その當時やつと四歳になつてゐた「いさ子」嬢を、長い間先生の手許に預つてゐられたこともあつた。

轉任 先生はかくて郡山の地に聖靈の火洗を施し、此處を樞軸として大和一圓に救済教化の寶輪を轉じようといふ計畫を立て、奮闘すること約五年、事業漸くその緒に就いたときに方つて、新潟から特に先生を名ざして、本邦牧師の派遣を切望して來たので、組合教會はその希望を容れ、先生を選抜して派遣することとした。是に於て先生は餘儀なく、手しほにかけて育て上げた郡山教會を後にして、新潟に赴任されたのが、明治十九年八月であつた。大阪出發の際、病院の一室に横臥して、面會をすら禁ぜられてゐた澤山氏が、早朝に車で停車場まで見送りに出て、非常に先生を驚かしたさうであるが、これがこの契りの深かつた二人の、最後の面會になつたのであつた。

先生はこの時代を回想して、次のやうに話されてゐる。

「私は物事をするのに、何時も全力を盡すのであるが、一番熱心になつたのは、大阪に梅花女學校

を興した時、其次は郡山に往つた時であります。其の時は一番困難な時であるが、私は一番望みのない時に、一番熱心になつて、コンセントレートするのであります。」

四 新潟に於ける傳道と教育

上、傳道と教育

時勢と新潟教會及び赴任の事情 この頃はちやうど西洋文明が非常に烈しい勢ひを以て流入し來つた、その潮さきにさしかかつたことではあるし、殊に彼の森有禮氏が伊藤内閣の文部大臣として、全國に教育を普及する系統的大計畫を立て、學制を改正し、着々努力の歩を進めた上に、政府の政策上大に歐化主義を採り、基督教、外國語、女子教育、夜會、舞踏などといふものをゴツチャにして奨励したので、其の風潮は各地方に傳播して、新思潮に眼を覺まし、新知識を渴望する青年の、英語や基督教を學ぼうとするものが非常に多くなつて來た。

元來この頃までは、新知識と英語と基督教とは、わが國では殆ど一つものに結び合はされてゐたのである。新潟は邊鄙の土地であるけれども、貿易港になつてゐたことではあり、以前から外國宣教師

もゐたことであるし、かたゞ時代の風潮は早く侵入して、新しい文化に接觸する要求を持つた青年が一部に増加したのであるが、教會は寧ろ甚だ不振の状態に陥つてゐた。その頃新潟在住の宣教師には、數十年間布教に従事してゐた英人ハーム博士の歸國後、オー・エツチ・ギリキ氏、デビス氏夫妻、スカツダー氏姉弟などが居つた。殊にスカツダー氏は獨身の青年であつて、地方青年と交遊する便宜も多いたるところから、彼等の傾向を看取して、この機に乗じて、大に基督教を宣傳しようといふ計畫を立てた。そこで少數の教會員を激勵して、邦人牧師として先生を招聘する議を決し、その斡旋を在仙臺のデフォレスト博士に依頼した。博士は更に之を大阪の澤山氏及教會に計つたので、遂に先生が派遣されることになつたのである。先生は一旦これを拒絶されたのであるが、新潟の要求が切であるのと、又當時病氣が重體になつて、身近いたるところに先生を置きたい、その自己の感情を抑へて、熱心に赴任を勧めた澤山氏の心事に感動して、とうとう先生は承諾されたのであつた。赴任當時の教會員は二十名内外、牧師の俸給は月額十二圓であつた。

教勢の振張 新潟に於ける先生が宗教的活動も、亦郡山に於けるそのやうに、熱烈なものであつた。赴任當時などは普通の教會の行事の外、連朝連夜の祈禱會を開いて、信徒の精神を鼓舞されたの

であつた。説教講話等のあまりに續いたために咽喉を傷めて、長岡で咯血して、それから暫く音聲を發することができなかつたこともあつた。

そんな風であつたから、當初微々たる教會もおひく／＼隆盛になり、先生が赴任の翌々年、即ち二十一年の五月には、信徒の寄附金に依つて、地方としては壯麗と形容されるほどの教會堂が新築され、それから間もなく、スカツダー（ドリマス）氏の斡旋で、印度の布教に従事すると三十年、六拾餘歳の老年に達して、本國に引きこもつてゐた氏の父君神學博士ヘンリー・スカツダー氏が、その夫人と、男子六名、女子四名の宣教師とを同伴して、傳道應援のために、新潟に渡來せられた。又先生の盡力で、日本基督教會と組合教會とが合併して、一つの新潟教會となつた。求信者も急激に増加して、教會員は二百名以上、毎日曜の出席者も三百名をこえて、會堂に溢れるやうな有様になつた。副牧師として、某氏が來任し、主として教會の説教を受持つことになつたので、先生は聖餐や祈禱、地方傳道の外、女學校の方に力を盡された。婦人會もできて、修養と慈善事業とに力めることにもなつた。先生は猶ほ長岡、與板、五條、中條、新發田等の諸地方に出張傳道を行つて、長岡と新發田とは新に教會が設立された。

先生の態度 先生が新潟に於ける説教も、亦其の熱心から迸り出る精神力を以て人を感動させた。「何だか吸ひこまれるやうだ」とは、よく人々が先生の説教を評し合つた言葉ださうである。先生は又此處でも教律を嚴守した。信者は神のための外に安息日を用ゐてはならぬ。神の仕事でない限りは外出すべきでない。讀むもの、語ること、すべて神のことに亘つてはならぬと教へた。商人でも、日曜日には戸を閉ぢて商賣をしない信者が多かつたさうである。先生自身は日曜日の午前を必ず黙想に費した。而してその間に得た感想は必ず記録して置かれたさうである。

教會が盛になるに従つて、自然に黨派を立てるものも出て來て、相争ふやうなこともあつた。教會の會議などで、夜半までも議論の決しないこともあつたりした。激しい時には大勢の反對派の者が一時に哮り立つて、殆ど暴力を以つて先生に迫る態度を示したこともある。さういふ時の先生の態度は、説教などの時とは打つて變つた、平靜を極めたもので、述べるだけの自説を述べ終つた外は、いかなる暴言を浴びせられようと何の反駁も辯解もせず、「神吾をしろしめす」といふ容子で、唯黙つて端然と見守つてゐるだけであつた。そのために反對派も張合ぬけがして、自然に靜まつてしまふのが常であつたさうである。

この頃の先生は、大抵黒木綿の羽織に、木綿の袴で、山高帽を被り、聖書を左の小脇に搔いこんで教會に急いだ。而して教壇の椅子の上に端坐して、正面を向いたまゝ、終りまで顔を動かさずに話す態度は、端嚴を極めたものであつたといふ。新潟地方は殊に佛教の熱信者の多いところである。先生が來任の前、明治十七年の夏、この地に基督教傳道大會が開かれて、それに澤山氏も出席したのであるが、佛教の僧侶信徒が謀し合せて、聴衆中に多數入りこみ、盛に妨害を試したので、無事に講演を終へた辯士がなかつた。最後に澤山氏が立つた時にも、型の如く妨害が始まつて、喧騒を極めたが、澤山氏が双手を舉げて、制止の姿勢をとりつゝ、聴衆を見渡してゐると、聴衆はその威嚴にうたれて、いつとはなく靜かになり、遂に最後まで熱心に謹聴したさうである。これは澤山氏の人格を説明する逸話でもあるが同時に又地方の對基督教感情を示す實例でもある。かういふ反抗侮蔑の空氣の盛んな中で、先生は極めて大膽に基督教を説き、その主義を發揮した。日曜毎に、隊列を組んだ女生徒を引率して、教會に臨んだ容子などは、町の人々の眼を聳てさせたといふことである。併し又この堂々たる奮闘的態度が、却つて往々に頑固な人を感動させ、佛教の最も盛んな地方の家庭から、特に先生の手許に娘を委託したのもなども數々あり、青年にして、直接間接先生の感化を受けたものは、勿論甚

だ多數であつたと傳へられる。

新潟女學校の創立 先生はこゝでもやはり教育家であつた。先生が牧師として來任すると、時勢に促されて、自宅に英語を習ひに來る人が多かつた。中には禿頭の老爺もあれば、妙齡の處女もあり、白髮紅顏相交はる有様であつたが、殊に高級官吏の夫人令嬢などが多かつた。かういふ知識的欲求に應じて、一般的教化を女子に與へる機關の必要は、地方の風紀を矯正する上からも、亦布教を助ける上からも、共に輕んじ難いものであつたから、社會の改善救済を究極の目標とする先生の理想は、こゝにもその實現の強い動機を當然發見したのである。そこで重立つた官吏、土地の有力者などに説いて、鈴木長藏氏外七名を發起者とし、多少の寄附金を集めて、もと軍隊の營舎であつた空屋の一部を借り、そこに應急の設備を施して、新潟女學校の標札を懸けたのが十九年の十一月であつた。先生は勿論その校長であつた。開校式の演説には、宗教と教育との關係を論じて、純然たる基督教主義に依つて教育すべきことを宣言したのである。生徒は開校當時二十五名位であつた。

一般の輿論はこゝでもやはり女子教育にも、基督教にも反對であつたから、随分困難ではあつたが、併し二年後には生徒數九十名に達し、賛成者も殖えて、八百圓の土地を買ひ、二千五百圓を投じ

て、校舎を新築することもできた。その後生徒数は百五六十名から、その上にまで増した。四年程度の女學校であるが、英語を専修する別科もあつて、これには官吏や有力者の夫人などが多くはひつてゐたのである。尤も轉任其の他の爲めに、この種の學生は次第に少なくなつて、後には殆ど普通の學生だけになつたといふことである。

教授訓育 梅花女學校に於けるやうに、先生はこゝでも語學や技能科以外の普通學科目を殆ど總て教授した。先生の外の教師は、創立當初には男女の外國宣教師であつたが、生徒の増加と共におひ／＼に本邦の婦人を用ゐて、男子宣教師は、後に出來た北越學館を助けることになつた。この頃前後して教師となつた本邦婦人は杉江たつ子（編者註、梅花女學校卒業生、後に米國に留學）、三輪いし子（元麻生校長夫人の従妹）、山田某子、南摩まき子（故南摩綱紀氏の令嬢）などであつた。外國人では、宣教師ニール氏夫人の妹コザット嬢が特に盡力してくれた。それ等の内外の教師が國語英語繪畫習字音樂裁縫編物などを教へたのである。滿壽枝夫人も英語編物などを教へられた。先生は大阪に於けると同様の自發主義をとつたが、特に英語の力を進めるために、科學などの名詞にはなるべく英語を用ゐて講義されたので、まだ學力の低い生徒達は大にこまつたさうである。訓育は基督教主義に由るとは

言つても、併し此處では學生の信仰に對して、以前よりも寛容な態度をとり、自然に養はれて、生長して來るのを待つやうな赴きがあつた。唯日曜日にはなるべく教會に出席するやうに勸めて、自分が引き連れて行つた外に、學校には毎朝始業前三十分間づつ禮拜といふことがあつて、聖書に就いての講話や、祈禱が行はれた。併し教師に對しては、積極的に信仰を鼓吹し、聖書の研究、戒律の嚴守、默想祈禱等を強く勧められたさうである。

學生中學資に乏しいものには何か仕事を與へ、勞働の傍ら勉學させる方針を採つた。此の方法に依つて修業したものが十數人に達したといふ。

又毎月一回づゝ講演會を學校の講堂に開き、一般の有志を集めて、宗教及び教育に關する講話をされた。講師には先生の外、スカツター氏が主として當つてゐた。

指導の態度 女學校の寄宿舎の出來ない間は、地方から出て來た少數の女學生を先生の家に預かつてゐたこともあつた。寄宿舎のできた後も、本人や父兄の希望で、特に残つてゐた者も五六名ぐらゐあつた。（編者註、これらの女學生中には、後に女子高等師範學校を出て、日本女子大學校の教師となり、明治四十一年に亡くなつた難田千尋氏、日本女子大學校を出て、同校に教へる傍ら、先生の家政

を司られた玉木直子氏などがある。それ等の人だちの記憶によれば、何事でも先生が一旦斯うと言ひ出したら、どんな故障があらうと、それを斷行せずには置かなかつた。子ども心にも、恐ろしい意志の強い人だと思つてゐた。又「私には爲すべき事が山のやうにあつて、始終目の前にちらついてゐる」とよく言つて、非常に大きなことを考へ、高尚な教訓ばかりされるかと思ふと、毎日寒暖計をながめて、「今日は寒いから着物をもう一枚重ねて學校へ往け」とか「暖いから羽織を脱いで往け」とかいふやうな、實に細かいところに注意されるので、娘達はこれにも驚かされた。而して或る人々は親にも増して、ありがたく思つてゐたと、當時のことを回想してゐる。日曜日にうっかり友達同志で雑談などを始めると、先生は二階の書齋から降りて来て、だまつて其の間に坐つてゐる。暫くしてから又だまつたまゝ自室へかへる。「安息日にそんな俗談をしてはならぬ」とか「靜肅にせよ」とか口で叱つたことはなかつたさうである。又膽力を鍊るためと言つて、學校の廊下の隅に人骨を吊るして置いて、夜一人づつ見にゆかせたことなどもあつたさうである。

北越學館の創設 教會を興し、女學校を立てさせた同一の理想と機運は、又男子の學校をも要求した。新潟の人阿部欽次郎氏は以前から新潟英學校を設立して、ドリーマス・スカツダー博士の助力の

下に英語を教授してゐたのであつた。が、スカツダー氏及び先生から、宗教の基礎の上に近代學術を教へる高等の教育を興し、縣下の青年を養成する必要を説かれて、大に共鳴し自己の學校を捧げて全く基督教主義の學校を設立することに決した上、尋で阿部氏は洗禮をうけて信者となつた。そこで先生と阿部氏との二人に、更に加藤勝彌氏を加へ、スカツダー氏の協賛に依つて、外國宣教師數名を依頼し、北越學館(註、後に北越學院と改稱)を創設したのが、明治二十年四月であつた。この時信者の一人(註、五泉の人松田國太郎氏?)は二千圓を寄附し、他の一人は二百圓を寄附したといふ。館長には加藤氏、幹事には阿部氏が當り、教頭に内村鑑三氏を招聘した。設立當時は世間の反對が強く、非難攻撃が多くて、随分困難したさうであるが、その中、縣會議員その他の有力な賛助者も殖えて、校運は次第に盛大に赴き、二年も経ないうちに、二町歩餘の土地を買ひ、三千圓の校舍をも新築することができた。生徒數の最も多い時には百八十名に達した。

學校改革運動と先生の態度 暫くすると、内村氏は日本人獨行主義を標榜して、外國宣教師排斥論を提唱し、之を學生間に宣傳したので、一部の學生は之に雷同し、團結して學校に迫り、遂に外國教師の退職を餘儀なくさせる状態になつた。先生はこの時暑中休暇で、地方出張傳道中であつたが、此の

報を聞いて直ぐに馳せ戻り、學校當事者を會して、一夜の中に前議を覆へし、制度復舊といふことに決した。反對學生は大に憤激し、大舉して先生に迫つた。中には刀や杖などを振廻して脅威したのもあつた。併し先生の彼等に對する態度は、教會の紛擾の際に於けると同じことで、泰然として動かない。反抗もしないが、又自説を曲げることは勿論しない。最初深い瞑想に於いて、神の旨を得た結果、外國宣教師と共同して此の事業を完成しようとして決定し、約束したものであるから、今更他の人の意見のために、此の方針を動かすことは斷じて出来ぬといふ主張を述べたまふ、學生等の爲すがまゝにまかせた。血氣の青年だちも、大方はとう／＼屈してしまつて、内村氏も教頭の職を辭して去つたのである。内村氏の辭職後は、先生の大坂以來の教友松村介石氏が教頭に聘されて、學館の教育經營を委せられた。それは明治二十三年であつた。その時松村氏と共に教師として赴任されたのが、元日本女子大學校長麻生正藏先生である。

下、局面轉回と渡米

時代の轉回 此の間に於て、我國の文化は方に一轉回期にさしかゝつた。思想の表面からいへば歐化思潮に對する反動期であるが、實行上では、寧ろ民族の生活が維新後二十年の激動を收束して、更

に着實な秩序的行進を起こすべき反省の時期にさしかゝつた。憲法は發布され、現在まで行はれてゐる學制もその時に略確立され、町村府縣の地方自治制は制定され、議會の開設もさし迫つて來て、いはゆる立憲政體の形式が備はつた。進歩的と反動的との混亂を極めた猛烈な政治運動も、こゝに大きな吐口と秩序とを與へられて、自然に着實な穩健なものになつて往つた。政府も在野の政治家も議會を目標にして、整理と準備とに餘念がなくなつた。一時の政策に出發した、皮相の、而も過激の、喜劇的にして、而も煽動的な歐化運動が、條約改正の失敗と共に止んで、以前から起りかけてゐた、反動的の保守思想は、その機に乗じて勢力を加へ、一面には國民的自覺反省の態度を刺戟した。そこにわが國民道德の大本を宣揚された教育勅語の發布があつて、炳焉たる國民教育の基準を與へられ、確乎たる究極の指鍼を示された教育界は、始めて安定の呼息を吐いた。文藝界も唯淺い功利と卑しい笑諛とを盛るに過ぎなかつた。西歐の翻譯と、江戸時代の糟粕とを排斥して、民衆の生活を直寫したものの、民族の理想を表現したものなど、空疎ではあるが、多少本質的な要素を持つたものを生み出した。古典や近代文藝の眞摯な研究も興つて來た。文藝のみならず、政治、教育、其の他のあらゆるものが、新奇な翻譯と、固陋な守舊との、壓搾と雜揉とから放たれて、略々現實の生活に立脚した、

民族精神の表現であり、表象であるやうなものになりかけた。勝手に奔騰する西歐文化の波濤と、時潮に抗立する過去文化の亂礁とは、互に無批判的に相激し、相撃ち、相破壊し合つてゐた、無用の浪費的盲作をこゝに止めて、或は組織的築堤の材料となり、或は靜かに湛へる教化の漣澗となり、どうか民族生活の錨を下ろすことのできる港を作りかけた。或る意味に於ては、明治の情熱時代、乃至は黎明時代が過ぎて、理智に眼の開く時代、明るい朝暉の下に、規律ある實際の仕事をする時代に入りかけた。

要するに歐米文化の輸入模倣といふ、維新以來の趨向たる、一面の教化運動に變りはなかつたけれども、それすら自由、民権、個人、功利といふやうな特質を持つた、前時代の佛英文化に代つて、國家、法制、組織、論理といふやうな特質を持つた、獨逸文化の流入が、政治、學術、軍事の方面から促進されて來たことから推されるやうに、とにかく時代の思潮は今や漸く民族の慾望と努力と教化と、國民の思想と生活と事業との上に、歴史的基礎と、組織的統制と、及び合理的根據とを要求して來たのである。情熱的突進から、理智的反省への時代的轉回である。

批判の時期 先生の年齢も既に三十を過ぎて、漸く壯年期の中程にさしかゝつた。いかに情熱的な

天性にしても、靜かに周圍の事物を達觀して、批判の眼を内に見開くべき時期に近づいた。而して時代の警鐘は、敏感な先生が耳朶を、右から左から打つてゐる。加ふるに、これまで先生が精神的行進の炬火であつた、澤山保羅氏も既にこの世を去つた。今や先生が高く自分の眼を擧げて觀るべき時である。深く自己の心を沈めて考ふべき時である。

時代は新思潮と新慾望と、及び舊思想と舊習慣とを、理智的打算を以て按配した、秩序的整理の作業にとりかゝつたとはいへ、まだその秩序の精神的根據、整理の理想的方針を發見してはゐない。民衆の生活と道徳とを依然たる舊態に止めて置いて、どうして新しい秩序が立つか、整理の目的を達するか。社會の精神的改善を實質としないで、どうして新様の國民生活が本然の展開を遂げるか。教育は勃興しかけた。同志社は大學設立の計畫を發表し、慶應義塾も大學組織に改めた。殊に明治十九年の改正學制で、高等女學校も規定されて以來、その規定による學校もボツ／＼設立され、女子高等師範學校も獨立した。宗教に依る學校も多數にできてゐる。併し時代の要求に應じ、民族生活の理想的發展を指導する爲めには、一體日本女子の教育をどこに出發させ、どこに歸着さすべきであるかといふ、究竟の根本方針に至つては、まだ考へられてゐない。而もこの根本問題にして解決されない限りは、

生きた教育を期待することができない。たゞ錯雜した知識を堆積し、末梢的技術を裝飾するに過ぎないのである。

先生の反省と宗教 宗教にしても、深い根柢の上に蟠つてゐる舊習舊想と、猛烈な勢ひを以て突撃して来る科學知識との間に狭み撃たれる状態が嵩じて來ては、これと應酬して水掛論に終ることなく、更にこれを調節し、統一し、醇化するために、從來輸入のまゝの形式と獨斷とを墨守して居てよいであらうか。信念を以て國民道義の根柢たらしめ、社會改善の動力たらしめるためには、何等か民族と現代とに適當な、宗教的精神と様式との新展開が必要なのではないか。この問題も亦、是非徹底的に考究されなければならない時代的要件である。

此の時勢と境地と問題とに撞着した先生は、果然從來の意志と情操と、及び生活と事業とに更に確乎たる合理的根據と、新様の組織的形式とを與へなくてはならない要求を、社會に、又自己に看取した。内側に於ては、宗教を理論に依つて整頓し、教育を組織に依つて實效化して、且つ之を根本的統一に收束し、外側に於ては、信仰を教會から民衆に、教化を學校から社會に解放し、以て之を全體に周匝させなくてはならない衝動を、兩面から同時に觸感した。國民全體を目標として、意識的根柢の

上に、從來の精神を更に一段高く廣く、而して且つ實效的に發展せしめた新生活、新運動の美しい景觀は、魔女の魅力を以て、先生が慧眼を捉らへた。かくて新しい、且つ廣い世界に見開いた、先生が意識の眼は、必然に現在の業績に對して、批判の態度をとらせたのである。即ち先生の内心にも理智的反省の時代が來たのである。

自己批評と思想の動き 先生は自己を評して、情熱があると言はれたこともあるが、又「私の心は哲學的で、證明がなければ満足しないところがあつた」とも言はれてゐる。大阪郡山時代の、二十歳から三十歳にわたる約十年間は、その情熱が表面の主宰者となつて活動した時代で、新潟時代になると、暫く裏面に埋もれてゐた理智の方面が、時代と年齢との、内外相應じた刺戟で、そろ／＼動き出したのであらう。これは極めて當然の心理的發展である。

「吾々もキリスト教を信じて、迷信的に突進しました。確かに一つの力を得て、傳道もしました。教育もしました。けれどもそれではまだ足らぬところがある。今日の考へを得るまでには、餘程苦んだのである。」

と話されてゐるのは、後の總括であらうけれども、併しこの時代から、既に動きかけた批判的態度で

あらうと思はれる。

種々の場合に於ける先生の回想談を綜合して見て、先生はこの時代にも、女子教育を以て自己の唯一天職としようと、確實に決定されてゐたかどうかは斷じがたい。併し梅花女學校に從事する時に、先生は政治と宗教と教育との三つの希望の中から擇んで、女子教育家となることにきめたと言つてゐられるし、信仰の進むにつれて、専心傳道の仕事に携らうとし、「この勢ひならば、基督教を以て全國を席捲することができぬ。宮内省の官吏であらうが、何であらうが、改宗させるのは朝食前である」といふ意氣ごみで、郡山に向はれたのであつたが、その郡山でも惜い時と力とを割いて、やはり布教以外の教育に指を染めずには居れなかつた。

「私はどうしても根本のものは宗教であるから、宗教によらねばならぬといふ考へでありましたが、その間にも私の頭から離れぬものは女子教育であつて、何處へ往つても、書生を集めて教育しました。それで自分は教育が天職であると感じました。併し又宗教家にならうかといふ事は、度々考へた問題である。その時の信仰は、今からいへば間違ひであつたけれども、その時は迷信でないと思つて居りました。」

234834

といふのは、多分眞情を吐露されたものであらう。仕事の外面から見ると、大阪時代は、教育が主、宗教が副となつた時代であり、郡山時代は、宗教が中心、教育が補助になつた時代であり、新潟は更に又宗教から教育に重點が移りかけて、しかもなほ兩者相併立してゐた時代といへる。この時代に於ける思想的變動の一端は、學校に於ける教育の内容にも現はれたやうである。即ちその頃學生であつた人の記憶によれば、この時代の終りに近づくに従つて、先生が講話の話題に、宗教以外の社會的、道徳的、教育的方面のことが次第に多く加はつて往つたといふのである。これは時代に反應する意味もあつたらうが、その主因は之を先生の心理に求めるのが正當であらう。

要するに過去を批判し、現在を整理し、而して將來の新方針を樹立すべき志向が、先生自身の裏に動いて來たのである。宗教の基礎の上に立つて、國家を救ふといふこと、女子を教育するといふことのために、時代に策應する、更に新しい大きな計畫の衝動を感じたのである。

學校と新方針の必要 此の衝動は、新潟女學校に關心する時、更に具體的直接的な目的になつて往つた。當時の時勢の中に在つて、從來のまゝの形式と方法とでも、學校の現状維持だけは先生の強い意志の力で出來たに相違ない。併し先生としては、更に大に發展して理想を實現し、家庭と社會と婦人

との改善に成功すべき積極的の見込みが立たなくてはならぬ。獨り新潟女學校だけの問題ではない。苟も高い理想を掲げ、革新の精神を以て社會に立ち往かうとする此の種の學校が、世の風潮に抗じて獨立を全くし、更に進んで其の理想精神を世に布かうとする爲めには、抑々いかなる形式と方法とに依るべきであるかといふことは、消極的形式的の方面ではあるが、併しかなりに重大な一般的研究問題であつたに相違ない。要するところ、更に學術的程度を高くすること、内容を科學的にすること、及び經濟的基礎を確立することに依つて、確乎たる組織的機關とするといふ方針が、まづ最も適切な問題解釋であつたのである。學術的程度を高くしないでは、社會の要求と希望とを新にすることができない。科學的の組織と方法とに依らないでは、時代の理解を確實にし、理想の實現を有効にすることができない。經濟的基礎が確立しないでは、獨自の理想と方式とを把持して立ち續けることができない。此は學校の外形的消極的の要件であるばかりではない。學生其の人に、混亂動搖の渦中に立つても挫けないやうな眞に深い理想信仰を得させ、更に之を壓迫反抗の社會に向つて、有効に實現させるやうな力を與へるための、内容的積極的の要件でもあるのである。先生の慧眼は此の要求を、世に先き立つて看取したのである。而もこれ等一切の根本となり、總括となり、意義となり、生命となるもの

は實に宗教そのものであるから、時代的要求に應ずべき宗教の本質、信仰の内容如何は、殊に重大な問題でなくてはならぬ。之を明確に把握することは、教育上に於ても同時に、又先生自身に於ても、切迫した必須の問題であつたのである。

渡米の決心 新局面の打開には、舞臺の轉換が必要である。新しい花には新しい肥料が必要である。その必要な新しい肥料が先生の身邊に見つからなかつた。國內の文化には、先生の要求にこたへる準備がまだできてゐなかつた。新しい建築の設計には、勢ひ海外先進の經驗を参考とする外に材料を得る途がない。新行進の第一歩は先づ海外の土に着けられなければならぬ。先生が信仰内容の更新と、教育方法の改革向上と、更に之を総合して言はゞ、内外兩面の精神的改革に必要な研究者を主題として、竊に渡米の企圖に到着したのも、極めて自然な展開と言はなくてはならぬ。

果斷な先生は決然として、萬事を抛擲して起つた。一錢の餘剰もない身を挺して、渡米の計畫を發表後、旬日の間に決行した。先生は常に「背水の陣」といふことを口にされたのであるが、先生が行動は實際いつも孤軍背水の陣を布いて、必死の銳鋒を無算の敵陣に突きこんで往つたのである。即ち冒險である。明治十年に郷關を出たのもこれであつた。後の大學設立運動もこれであつた。今次の渡米

の如きも亦正に是れである。先生は「方法を考へてから着手したことはない」と言はれたことがある。「志の在るところ、途自ら開く」とは、蓋し一生を通じて變らない先生の確信であつた。

思慮と援助 冒険といひ、背水の陣とは言つても、併し全然無思慮な、機械的な、暴虎馮河の勇ではなかつた。それまでには常に熱心な祈禱と、深い沈思と、緻密な考究とがあつた。唯々それは目的の決定であつて、方法の工夫ではなかつたのである。先生が一旦決心した後、中途にして躊躇逡巡することのなかつたのは、そこに非常に深い内面的精神的根柢が横はつてゐたからであることを知らなくてはならぬ。而して又勿論同時にその外側には、先生が性格と理想と事業と境遇とを理解して、同意し、慫慂し、その勇氣を勵まし、之に援助を與へて、遂にその壯志を遂げさせた、幾多の先輩友人のあることを忘れてはならない。この時先生の發途を祝するため、新潟の人々によつて捧げられた金品だけでも百五十圓程に達したとあるが、中にも殊に先生に同情し、傾倒することの深かつた老スカツター博士は、先生が渡米の途を開き、且つ渡米後の方針を授け、在米のレヴィット氏は留學中の便宜を計り、大阪の前神氏は旅費の一部を融通し、且つ先生が後顧の憂ひを軽くするために、非常な親切を盡した。先生が深い要求と大きな抱負とを載せた、留學の初志を完くさせたのは、實に此等の人々の高誼に依ると言つてもいゝのである。

先生が渡米後の教會 前にも一言したやうに、明治政府當初の大方針であつた、歐米文明移入の急潮に對して起りかけてゐた保守的反動思想は、明治二十年前後の、殊に甚だ不自然な、無根柢な歐化政策の中止された機會に乗じて、其の巨頭を擡げ出し、猛烈な勢ひを以て氣息を吹いた。彼の三宅雪嶺、志賀重昂、棚橋一郎等諸氏の雜誌「日本人」を中心とする、國粹保存主義の運動の如きは、殊に知識階級多數の人氣に投じたのである。而して之に共鳴する者はむしろ地方に多かつた。固より徳富蘇峯氏の率ゐる民友社、其他文學者によつて清新な西洋文化の紹介が行はれてゐたけれども、その共鳴者は一部の青年知識階級にとゞまつた。而してその反動的思潮の激衝に當つて、最も強い打撃を受けたものは實に基督教であつたのである。

元來封建的舊思想舊習慣の殘留するものが多く、且つ文化の中心に遠くして、而も新文化の洗禮を受けることの甚だしい地方に於て、殊に元來佛教の特に盛であつたところに、偶然の機會から、基督教が一時急激に發展したといふ新潟のやうな地方に於ては、それまで屏息してゐた佛教徒を中心とし

た保守思想の反撃が、極めて猛烈であつた。その上に獨逸福音派や、米國ユニテリアン派によつて導かれた、基督教の新神學、新解釋、それに伴ふ批評的態度は、一般の科學的思潮と相俟つて、在來教會の信仰を冷却させる傾向を作つたのであつた。それで先生の渡米のために、堀貞一氏が牧師の代員として來任した後、暫くは益々盛運に向ふやうに見えた教會も、次第に衰微して、外國宣教師だちも絶望し、明治二十五年、老スカッター氏が病氣のために歸國する際には、他の宣教師も大かた一しよに歸つてしまふといふ有様であつた。

渡米後の女學校と北越學館 教會と同様の運命は、新潟女學校にも、北越學館にも廻つて來た。先生の意見に賛同して、新潟女學校の設立と維持とに多大の助力を與へた縣の高官達は相尋いで轉任し、大抵親みのない新顔になつた。而して彼等は時勢の趨向上皆所謂新信仰、新思想には同情がなかつた。殊に新縣令籠手田安定氏は佛教信者で、又保守思想家であつたので、外國語と新知識とを多分に教へる耶蘇教學校などには甚だ冷淡な態度を示したのである。加ふるに第一回の衆議院議員選舉運動が行はれて、激甚な黨派政争の關係から、學校に同情を持つて居た地方有力者の間にも分裂が起り、又一般に政治の方に民衆の感興が惹きつけられて、寄附金などを募集するにも不便を感じるやうになつ

た。元來妥協迎合を潔しとしないで、ひたすら理想に向つて猛進する先生の志士的態度には、熱心な景仰者同情者の多かつた代り、又反感を抱く者も少くはなかつた。而して時勢の關係上、この反對者側がむしろ得意の地位に立つことになつた。これ等種々の事情のために、先生が在任中、既に女學校が從來の發達が阻止されるやうな微候を現はして來たのである。

先生に代つて校長の任に當るべき人を物色しても、早速には適任者を得難かつたために、重立つた人後に後の事を委託して渡米された後の新潟女學校は、依然として專任の校長を得られなかつたので、長岡の人で同志社出身の實業家澁谷善作氏が一時之に當ることになつた。氏は一方業務を持ちながら、長岡から通つて校務を見たのであるから、其の困難は一層であつたであらう、一年餘にして遂に辭任したのである。其の後校長として經營を引受けたのは阿部欽次郎氏である。其の頃教頭として、又寄宿舍の監督として、専ら生徒教養の任に當られたのが、元の日本女子大學校長麻生氏夫人、即ち當時の三輪永子君であつた。而も中心と外援とを失つた學校は維持益々困難に陥り、遂に五ヶ年間休校といふことにして、そのまゝ廢校の運命に立至つたのが明治廿六年、ちやうど井上毅氏が伊藤内閣の文部大臣として保守主義を採り、大に國漢學を獎勵した年、又井上哲次郎氏が、明治廿四年末に發表し

た「教育と宗教に就いて」の意見の後を繼いで「教育と宗教との衝突」といふ論文を發表し、教育勅語は國家主義の道徳を採り、基督教は超國家主義の出世間道徳を説くものであるから、兩者は到底相容れることができないといふ旨意で、基督教排斥論を主張し、大に國家主義者の共鳴を得た頃である。新潟女學校が斯うならうとは、流石の先生も豫知し得ないことであつた。北越學館も亦漸次新潟女學校と同様の運命に陥り、同じ年に、同じ方式で廢校になつたのである。

第三編 日本女子大學校設立準備時代

一米國留學

上、教育方面の研究

出發 明治二十三年十一月十日、調査や、金策、夫人の暮し方の畫策等のため、一人先きに出發した先生は、まづ京阪から東京の方に向はれた。然るに下婢と二人で、新潟の住居を疊んで、後から出發した夫人は、長岡の知人の許に泊つた夜から發病して、重體に陥つたといふ報知を受けた。元來夫人は蒲柳の質で、新潟に移つてからは、氣候のためか度々氣管などを痛め、平生よく身體の違和を訴へて居たさうであるが、渡米計畫以前から、腹部に少し異狀を覺えて來た。併し新潟の病院長の診斷では、格別重い病症ではないから、南方の暖い土地に移りさへすれば、このまゝ放任して置いても、自然に癒るだらうといふことであつたので、先生は安心して渡米の實行にとりかゝられたのであつた。その留守中の夫人の生活は、京阪の間で、英語手藝などの教授をして報酬を得、それで足りない

ところは、歸朝後まで借財で補ふといふ方針が立てられたのである。

夫人病氣の報知をうけ取つた先生は、すぐ長岡に引返して看護に盡したが、一時人事不省の有様であつた病人も、發作的の神経性のものであつたので、一週間ばかりで回復した。それから同道して東京に出て、帝國大學附屬病院の婦人科長の診断を受けたところが、腹部に病氣はあるが、このまゝにして置いても、三四年間に病氣が進むやうなことはあるまいといふのであつた。それで先生は計畫通り、文部省や、學校、教會などを訪問して、本邦の教育、宗教の狀態等の調査、その他のことに奔走し、十二月十六日横濱から乗船して、愈々目的の首途に上り、夫人は別れて京都に向つたのである。渡米後第一に記したと思はれる日記の最初の部分を抄録して、それからの容子の一端を窺ふことゝしよう。

着米——當時の日記 明治廿三年十一月十日 新潟を出立せり。

余、新潟に在る四年三ヶ月、余初て新潟に來りし時、只一人の朋友ありしが、新潟を出づるときは、多くの親友有り、情を以て余を送れり。親友より余に贈りし金員並に品物は、大凡百五十圓なりし。

十二月十六日横濱を出立、廿一日サンフランシスコに着す。其途中の感を記して、女學雜誌に投ず。一日。二日。桑港に止る。

桑港に於ては、殆ど二千人の日本人ありて、日本人と支那人の區別をよく辨へ居れると雖も、日本人の評判至つて悪しく、日本人を輕蔑すること甚く、一夜市中を朋友と歩行せしが、或は謗り、或は池田と申す人の頭を打ちしものあり。残念至極也。

三日。桑港を出立せり。

シカゴまで、多くは日本人といふことを知らざるのみならず、日本といふ國のあることさへ知らざるものありて、ある者は余等を獨逸人と思ひ、獨逸書を持來り、汝等は獨逸人乎と問ひしものあり。又ある時は余を見てトルコ人ならんと互に語り合ひしものあり。又中には日本人といふことを知るものありて、至つて親切に取扱ひしと雖も、多くは支那人と見なし、ボウイ、或はジョンと呼ぶものありし。残念至極ならずや。

(略)

金なしに米國へ來るは、ハヂカキに來る也。

(略)

八日。朝、スカツダー氏に面會す。一日馬車にて市中を見物せり。

十一日。早朝、ボストンに着す。初めて大西洋を見たり。太平洋を越え、西半球の大陸を過ぎ、再び大西洋に來り、感情交々起れり。

(略)

十一日。十時、Andoverに着、舊友レビットに會ふ。

翌安息日會堂に參る。リバイバルは其日より初れり。

米國にては神の存在、キリストの救世主なることは疑なし。只之に従ふに苦むのみ。

レビット氏は七名の小兒あり、馬あり、車あり。然るに一名の僕婢をも置かず。悉く妻君とレビット氏之をなす。妻君は馬車に乗りて買物に出掛け、主人は馬にまかはし、説教等實に多忙也。米人のよく働くは感服の至也。余も馬をかひ、木を割るなどの働を手傳ひ、大に身體の爲に益す。小兒も各々働を爲し居れり。通例は婢或は僕を置くよしなるが、余をして勉學せしむる爲之を省けり、云々。

横濱よりボストンまでの旅行日數は二十四日也。桑港に二日止り、シカゴウに一日止まれり。差引けば二十一日也、三週間也。其中二三日を除くの外は晴天也。

右の日記にあるやうに、先生はボストンに近いノース・アンドヴァアのサマーヴィルで牧師をしてゐたレヴィット氏の家に迎へられて、その家族の一員になつた。元來先生が渡米に就ては、新潟の老スカツダー博士が、先生の志望を知ると同時に、當時歸國してシカゴにゐた子息、及びレヴィット氏に書面を送り、三人の間で打合せをして先生を立てたので、それに關する事務的のことは、具體的に先生に知らせてなかつた。旅費がスカツダー氏（或はレヴィット氏と共同で）から送られたことも、レヴィット氏が先生を引受けて、學費の便宜を計るやうになつてゐたことも、渡米後に始めて承知したのであつた。レヴィット氏が自分の生活を切りつめて、先生の學費を補助することは、妻君以外の家族にすら秘してゐたのである。而してレ氏等の考へでは、先生をどこかの大學に入學させ、スカラーシップを取るか、又は他の方法を發見して、勉學させようといふ方針であつたらしい。

渡米の目的 さて先生は如何なる目的で渡米されたのであるか。この頃の先生の日記を見ると、自分の天職、目的、事業等に就いて、屢々記されてゐるが、二月廿日の條の中に

吾 天 職

教員にあらず、牧師にあらず、學者にあらず。

社會改良者なり。女子教導者なり。父母の相談相手也。創業者なり。人心興奮者也。とある。その後の條に

吾生涯に可成事

吾目的は吾天職を終るにあり、吾天職は婦人を高め、徳に進ませ、力と知識鍊達を與へ、アイデアルホームを造らせ、人情を敦くし、國を富まし、家を富まし、人を幸にし、病より貧より救ひ、永遠の生命を得させ、罪を亡ぼし、理想的社會を造るにあり。(人種改良もあり)

故にこの建築の方、成功の道を講ずるにあり、實に短日月なれば、尤も必要、尤も入用のもの、み可學。

更に又

余の目的

世界の粹を蒐集して、世界第一の教育、家政、社會、會社、宗教を吾日本に建つるにあり。現在

する粹を蒐集するに止まらず、尙ほ理想の眞理を發明するにあり。

さうして、「モーゼはイスライルを救ふ爲に四十年間野にこもつたが、自分は僅か四年間であるから、とても時が足らぬ」なども記し、夫人に書き送られた書翰の中に「全く青年に歸り、白面書生を氣取り、否赤兒となり、今より大業を創むる覺悟をなせり」と記してあるのに、當時の心境がよく現はれてゐる。他の部分の記載をも参考して綜合すれば、要するに先生の渡米の目的は、婦人を中心とし、家庭を基礎として、社會を改善し、國家民衆の生活と思想とを向上させ、以て理想的の道德世界を作るため、更に究極的には、天國をこの世に來らせるために、宗教の基礎の上に立つて、科學的方法を確立することであつた。而して之が爲に知識を米國に求めるだけでなく、米國の人と事業と文字とを通して、世界の思潮と文化とに接觸し、その粹を採つて、日本改善の資料とされる方針であつたことは、前の日記の通りである。

研究事項 右のための、必要な研究題目として、先生は次の事項を擇ばれてゐる。

吾米國に於て可得事柄

英語。文明の基礎。學制。社會學。教育學。經濟學。神學。英文學。女子の職業。女學校。慈善事

業。有名なる男女の學者、教育者、事業家、宗教家に面會すること。右視察の批評並に適用。家政學。富國の源。政事。人々の傳を讀む事。(二月廿六日)

その數日後の日記には

今此三年間に備ふ可き事件

(一)神學上の問題

神の存在、キリストの性、靈魂不滅

(二)道德の標準

(三)女子教育の方針

(四)女子教育實行の法策

(五)吾生涯の進路

(六)學理、視察、語學

右の準備全く整ふ時は歸朝の日也。

生涯は甚だ短ければ、一日一時も有益に用ひ、及ぶ限り神速に、右六ヶ條を手中に得べし。

などである。一月末に故國の友人に送つた手紙に、十六の研究題目を定め、一題につき二ヶ月の割合で卒業する豫定とあるのは、多分右の前段に相當するのであらう。併し追々に訂正されたり、増加されたりしてゐる。

アンドヴァー神學院入學 右のやうな計畫で、學術の方では、宗教、教育、家庭、社會等の改善事業の基礎的知識を得るため、まづ第一着に社會學を研究することに、渡米以前から豫定されてゐたもののやうである。然るに社會學はまだ新しい學科であつて、それを講ずる十分な學者も學校も當時の米國にあまりなかつたのであるが、アンドヴァーのセオロジカル・セミナーの教授タツカー氏は、社會學者として一方の權威者であると同時に、全米の社會運動の指導者であるやうな地位に居り、殊に徳望家で、學院の柱石とも稱せられる人であつた。又其處の圖書館は完備したもので、中にも社會學に關する書籍が總て網羅されてゐた。附近には別に數個の立派な圖書館もあり、他方には教へを受けたい人物も、視察すべき有益な事業も多かつた上に、宗教的修養には好適地であり、殊にこの學院は先生が平素欽仰してゐられた先輩新島襄氏の出身校で、知友の村井知至、増野悅興氏等も在學中であつたので、旁々先生は到着早々此の學院に入學されたのであつた。

併し先生は此處を卒業する積りではなかつた。大學に入りたいといふレ氏等の希望もあり。女子大學設立の着想を、この時早く既に胸裡に藏した先生は、將來大學を率ゐるためには、學位を持つてゐる方が好都合であらう。又神學院卒業では、舊い形式的宗教で、世人の理解を制限される不都合を醸すかも知れないと考へて、一時は九月の學期を待つて、ハーバート大學に入學する計畫を立てられた。併しそのためには、どうしても先生の事情に許されない時間を要すること、先生の方針に副はない學科を履修しなくてはならないことの理由から、その實行を止められたのである。又どこか師範學校で教育を研究しようかと考へたが、これも同様の理由から止められた。

一方タツカー氏の講義は非常に有益なもので、先生の目的に適合するやうな内容を持つてゐた。その上タツカー氏はよく先生の目的志望を理解し、かつ大に同感し、前例のないスペシアル・スチューデントとして、學院の正規に拘らず、好むがまゝの自由な研究をすることの出来るやうに、取りはからつてくれた。而して先生一人のために、特に時間を設けて、講義、解疑指導の勞をとることを吝まなかつた。それから又スカラシップをも取ることにしてくれたので、先生は愈々こゝで約一年間、社會學を中心に研究した後、クラーク大學その他の大學に移つて、やはり一年間位、女子教育を主題

にした研究を試み、その後の時間を、實地の見學、訪問等に費すことに決して、その際の質問尋求の細項數十條を定めてゐられる。而して前段に掲げた研究事項は、學校で勉學する傍ら、右のやうな實地的方法、書翰の交換、圖書館等によつてその研究を進めるといふ方針であつた。

入學後の半年間 この決定は渡米後間もないことであるが、それから九月の半ばまでは、レヴィット氏の許に止まつて、神學院の方に通學しながら、讀書、思索、訪問等に忙しくしてゐられたやうである。交際の廣いレヴィット氏に依つて、訪問や視察に、出来るだけの便宜を與へられた。宗教家の會に出席して、演説などもした。夏になつては夏期學校に出席して、その説教集などで豫て尊敬してゐたムーデー氏などの講演もきき、其の他の宗教家とも會談し、幾多の尊敬すべき人格者を發見して喜んだ。孤兒院長のカミイン氏に會つた時などは、自分の父に再會したやうな、親しみの情に充たされたと言はれてゐる。又米國人の親切なこと、よく働くこと、富豪の子弟でも、少しも誇るやうな風などがなく、まめくしいこと、階級的の平等、獨立と自由と規律との保たれてゐることなどを觀察して、日本の社會家庭の改善に資することを考へてゐられた。

殊にレヴィット氏の家庭が全く規則的で、總ての家族が一定の仕事を負擔し、獨立自由でありなが

ら、偕和怡樂に充ち、殊に夫人が精神的中心となつて、家族を向上的に引しめてゐる容子には最も感動して、そこから寮舎の組織方法を考へてゐられる。即ち「之を女學校の寄宿舎に應用せば如何」と書いた後に續いて、

(一)寄宿舎は數棟になし、一室に願はくば一名宛を入れ、獨立、自治、自由、自修の風を養成すべし。

(二)一棟を一家族として、相互に關係を有せしむべし。

(三)食事、洗濯、掃除等、悉く生徒になさしむべし。これ健康と性質の爲、實に必要にして、かつ學費を減するの法なり。

(四)眞正の節儉と、眞正の快樂を得るの道を教ふること實に肝要なり。

とあるなどはその一例である。

この頃の先生の手帳を見ると、女子教育、信仰、日本の改善等に關する諸問題に就いて、絶えず思索してゐられたことがわかる。殊に女子大學の計畫、學科、方法等に就いては、粗雑ながら、この頃から既に基礎的腹案を得られたやうである。そのことは故國へ送つた手紙にもほのめかされて居る。

更に之に關聯しては、婦人の天職、生活、家庭、男女の交際等の問題も、頻繁に考へられてゐた。先生が歸朝後に發展した仕事のデザインは、米國留學中にできたのはいふまでもないが、それは又渡航後暫時の着想に、その大體の基礎を總て發見することのできるのは、新潟時代の轉向と關聯して、注目すべきことである。しかし大學といふ名前の教育や學科はとにかく、新潟時代に於て、既に更に程度の高い女子教育の必要を考へてゐられたので、新潟女學校の教師杉江田鶴子氏が先生が斡旋して、米國に留學させたのも、その準備のためであつたと傳へられる。この考へが米國に來る早々大學として稍々具體化されたものであらう。その他日記に記されたものは、總て斷片で、極めて粗硬ではあるが、甚だ肯綮に中つた、深い暗示的な着想が多い。

夫人の病氣 斯ういふ間に、最も深く先生の心を傷ませる報知が、故國から先生の手中に落ちた。それは夫人の病氣に關してである。夫人の生活に就いては渡米後も非常に苦心して、絶えず故國の親友に相談したり、依頼してゐたのであつたが、訣別後二三月の中に、以前の醫師の診斷とは違つて、夫人の病氣は急に進んだ。働くことなどはできなかつたのみならず、そのまゝにしては置けないやう

な状態にすらなつたので、京都の病院で診察を受けて見ると、今のうちに切開治療すればたやすくなほるけれども、捨てて置けば置くほど治療が困難になるといふので、遂に入院して手術を受けることにしたのである。その治療の爲には前後約二ヶ月ほどもかゝつた。その間は夫人の叔母君にあたる、河村學爾氏の夫人も介抱されたのであるが、殊に新潟の人で、先生が教弟子の一人であつた、加藤馨之助氏夫人幸子氏も、ちやうど京都附近に轉住されてゐたので、殆ど付き切りで看護された。さうして其の間の費用は殆ど全部大阪の前神氏に依つて調達された。なほ夫人は春期に一旦回復したが、夏に入つて、再び病氣に悩んだのであつた。

先生の心痛 先生が渡米後も夫人の生活に就いては、絶えず心を苦めながら、いざこれからと豫定の計畫通り勉學に取りかゝつた矢先き、かういふ事情とその處置とに就いて、後から追ひかけるやうに、一々夫人から相談の手紙を受けとつた先生の驚きと心痛とは非常であつた。夫人の病氣は早く治療さへすれば癒るといふのであるから、その方は左程の心配ではないにしても、それよりは治療費と、その後の静養生活の費用との問題の方が重大であつた。その上に一部の友人や親戚からは、歸國して病弱の妻君を安心させなくてははいけないといふ忠告が、その後の數ヶ月間に、續々と送られた。中に

は随分苛烈な難詰の言葉などもあつて、情熱家の先生が胸に、強い打撃を與へたらしい。併し先生が渡航の事情、現在の關係、殊に其の深い使命の自覺の上に立つた、畢生の目的と計畫とは、先生の書翰中にはゆる「大事業のための大準備」であつて、他の尋常一様の留學生のやうに、容易に歸國を許すやうなものではなかつた。而してやはり書翰で先生が言つてゐる通り、今度歸國すれば、再び渡航することは不可能で、又故國に居て全然準備修業に捧げる時間を得ることも不可能なことであつた。よし又米國に先生を送り、先生を迎へた友人たちの厚意と苦心と、及び其の他の一切の事情とをふり棄て、強いて歸國するとしてからが、その旅費の調達すら覺束なかつた。殊に嚴直であつた先生にとつては、スカラシップの金も使ひはなしのまゝにして歸ることなどはできないことであつた。それかと言つて、何か働いて収入を送るといふことも、その時の先生には不可能であつた。

先生は當初一度病弱の夫人の爲に渡米の目的を擲つて、勞働か、或は職業的説教でもして金を獲ようかと考へられたこともあつたのであるが、それは歸國以上に無意義な、不條理なことで、第一米國の友人たちの厚意と苦心とを無にしなれば、爲し得ないことであつたし、又これまで以上に、その人たちの厚意にすぎることなどは、主義上、事情上できないことであつたから、さういふことはやめ

て、當分は唯々故國の女學雜誌に寄稿して、その原稿料を夫人の手許に送るぐらゐのことほか、他に方法を發見しなかつた。

その進退兩難の窘窮は、併し主として先輩前神氏の厚い友情に依つて救はれた。前神氏とても格段餘財のある人ではなかつたのであるけれども、前には先生が渡航費の不足を補ひ、又治療費を支辨し、それから夫人の生活費をも分擔してくれたのであつた。夫人の親戚にあたる河村家、服部家も固より力になつたし、新潟の人々の中にも夫人の爲に美しい奉仕の眞情を表はした有志だちがあつた。その他の友人、教弟子の中にも、直接間接、力になつた人はあつたことであらう。

主義の嚴守 斯ういふ苦しい中でも、先生は嚴乎として平生の主義を守ることが忘れなかつた。當時先生とは餘り深い交りをしてゐなかつた在日本の或る宣教師が、夫人の境遇に同情して、生活費を補助してくれようとしたのであるが、其の報知を夫人から受けとつた先生は、いかに苦しくとも、眞に理解し合つた深い友情からでもない、一時の憐憫の情から出るやうな補助をば受けてはならぬと、斷然謝絶さした。而して前神氏に、高利の金を借りてくれるやうにと依頼したさうである。それは先生も前神氏に餘裕のないことを知つてゐたからであつた。前神氏は高利の金をば借りすにすましたやう

であるけれども、先生はいかに肉身以上の親情を感じても、前神氏の恵みをうける積りでは勿論なかつた。總て歸朝後までの借財として、一時立替へて貰ふことにしてゐたのである。スカツダー、レヅイツト兩氏の援助すら、先生は平然として受けてゐたのではない。利己のためではなく、人類的目的のためにすることで、殊に先生が手帳にも、「米人の愛」と題して「レヅイツト氏、スカツダー氏の如き、眞に日本を愛し、日本人を愛するものなり」と記してあるやうに、兩氏が日本のために人物を作らうとする義心と、先生に對する深い理解と同情とから出た、宗教的奉仕の厚意であるからと、しづしづながら受けてゐた心事は、先生の書翰や、日記によつて明かである。

病と氣米國人の親切 夫人は治療の結果、とにかく病氣の快癒を見ることができた。生活には困難が伴ひ、従つて親戚友人の非難も相變らずで、先生の苦心が続いたけれども、主としては前神氏の援護で、どうにか過してゆくことになつた。それで愈々研究の方に専心するために、廿四年の九月中旬レヅイツト氏の家を出て、神學院の寄宿舎に引移つた。それから兩三日すると、不幸にも流行の熱病にとりつかれ、少しよくなりかけた途中から肋膜炎を併發して、入院手術をうけ、病後數十日、先生も一度は不起を覺悟されたさうであるが、幸ひに回復して、レヅイツト氏の宅でなほ暫く靜養を加へ、そ

れから寄宿舎に歸られたのであつた。

先生はこの病中に、米國人の人情の美はしさといふものを、しみんと飽くまでも味はれた。先生が病氣になつたときくと、學院長スミス氏は、すぐ馬車で醫者をつれて來て診察させ、何くれとなく注意を與へて、その後も度々見舞つた。タツカー博士は、これも醫師をつれて、夫婦で見舞つた。博士夫妻はその後一二度づゝ見舞つた上に、夫人が心をこめて料理した滋養食品を毎日運んでくれた。五六週間の病床食餌は、殆どこのタツカー夫人の手になつたもので間に合つた。先生は後にも「あの時の病氣はタツカー博士夫妻の深切でなほつたのだ」と話し、又「博士夫妻はわが再生の恩人である」「自分の親のやうに思はれた。」とも人々に話されたのである。レヴィット氏も勿論のこと、同窓の増野、村井、尺(周助氏?)の諸氏もよく介抱してくれた。

學生も深切であつた。醫師が室に就いて注意したことをきくと、早速室を換へて、一番善い室に先生を移したこともある。殊に卒業生某氏の如き、歐洲留學に出發しかけてゐた期日を延ばして、毎日來ては先生を介抱する傍ら、小説などを讀みきかせて無聊を慰めてくれた。學生の中にも、外にさういふ人があつた。

レヴィット氏の宅に靜養してゐられた時には、小さな子どもだちが、父母を見做つて、先生が健康の回復の爲に、彼等のできるだけの心を盡した。撫でたり、さすつたり、一しよに手をとり合つて遊戯をしたりした。その時子どもが歌つた歌にこんなのがあつた。

君は雌鳥よ 我等は雛よ

朝夕睦れて 親鳥の

傍へ離れぬ 樂しさよ

疾く癒しませ この病ひ

神も守りて 親鳥を

(これは先生が記憶によつたのである。)

なほ病氣にかゝる前、レヴィット氏の宅から通學中、雪でも降れば、夫人が馬車で學校へ迎ひに來てくれる例であり、又レヴィット氏の家族が旅行した留守居をしながら、一人で勉強してゐた時のことらしいが、相識になつた土地の富豪令嬢が、先生の旅情を慰めるために、土曜日毎に馬車を驅つて、手料理の菓子や果物などを持つて來てくれたことを記し、米人が金持ちでも金持ちぶらぬ、忠實勤勉

深切の美風の一例にしてゐる通信もある。その外、日記の中には、近隣の立派な人達が、或は日曜毎にデイナーに招いてくれたこと、或はデイナーを持運んでくれたこと、幾人か馬車で運動につれ出してくれたこと、見ず識らずの人が、途中から馬車に呼びこんで、送つてくれたことなどがあり、感謝に餘つて涙が流れたことも記されてある。而して米國人の親切、殊に婦人の温情快活等に就いての所感が屢々散見する。先生が極めて頻繁に、愛は人生の大本であることを記し、又感謝が道德の要義であることも説いて、なほそれ等の徳が婦人に於て特に大切であることを説かれてゐるのは、先生の宗教的信念からばかり來たものではなく、かういふ實際の経験から得られた教訓であらう。

先生はこんな風にして、他郷にありながら、他郷にあることを忘れ、むしろ自國では嘗て見られなかつたほどの、暖い人情の中に身を浸して、病氣を癒すことができたと共に、精神の上には更に大なる糧を得られたのであつた。

「澤山保羅傳」の著作 先生は米國に於て、「澤山保羅傳」(“Modern Paul”)を著作出版されたが、それはこの病後の静養中に起稿(註、或は復案だけか?)されたものゝやうである。その以前、四五月の交に、一度この傳記を編まうとして、故國の友人の方に、材料の送附を求めたのであつたが、國の

方にも同じ企てがあると聞いて、「それならば、その上でなほ自分の立場から見た澤山氏の傳を書く必要を認められた時に、四五年経てから、十分なもの著すことにしよう」と言つて、一旦は中止されたのであつた。併しその後、右の企てが故國ではかゝしく運ばなかつたので、更に再び取りかゝつたのである。その時の草稿と思はれるものが残つてゐる。粗末な洋紙の帳面に、日記類と同じく毛筆で走り書いた短篇であるが、その序文めいた一文の中に、著作の理由を、次のやうに記されてゐる。

「余當國に來り、日本古來の宗教、及びキリスト教、教育、風俗等につき、問はるゝこと屢々にして、時には其或點に於て、誤解甚しきに驚くことあり、又一方のみ見えて、他方の暗きを感じることも屢々なりき。かつ余は大に澤山氏と關係を有するものなれば、氏の傳を綴るの責任あるを感ずること切なり。終に筆を取つて之を試む。」

又翌年傳記の出版される頃の日記に

澤山傳に付き

“It must be instruction to the American youth.”とある。

又後に日本女子大學校の學生に話されたことの中にも、この著作に關したことがある。

「澤山保羅の傳を書いたこともある。あの人の生涯は、私の脳裡に深く記するところがある故に、私はこの人の傳を書いて、米國人に紹介しようといふ決心をして、二週間といふものは人と交際を断ちまして、その間に澤山といふ人の生涯は、私の頭の中に出来たのである。併しそれだけではまだ公にすることができないから、澤山といふ人を知つてゐる人の話をきき、又澤山と交際した人に悉く手紙を出して、澤山の手紙を皆借り集めて、さうして私の頭の中にできてゐるところの、澤山の生涯と照らし合せて、始めて之を文に表はし、世に公にすることができたのであります。」

澤山氏を紹介すると同時に、日本の事情を紹介する目的もあつたので、その手段として、先生自身の経歴がかなりよく語られてゐるから、先生の自叙傳の一部と見ることも出来るやうな點がある。この著作は翌二十五年（一八九二年）補輯（註、或は實際起稿？）を加へて出版されたが、大に米國人の興味を惹き、二十版を重ねたさうである。同年の秋頃、先生が故國に數百圓を送附して、借財の償却にあてたのは、多分この傳記から得た原稿料が、少くもその一部であらうと思はれる。先生は又米國で得た材料を編んで、著作をする計畫を、渡米の春頃に決定された。それは自己の主張を明かにし、女子大學設立の準備とするため、歸朝後の一年間を全くこの事業に費すことに豫定されてゐたので

ある。

この頃の情緒生活 渡米後には、以前に蓄へて居た髯も剃り落し、その言葉通り全く白面の書生となつて、青年學生に伍した先生は、その年の暮に、再び流行感冒に罹つて發熱し、その時も學院の人だちの深切に感銘してゐられるが、それは暫時で回復した外、大かた健康で、ひたすら豫定の學業に奮勵したやうである。學問修養のためには、全く赤兒の心を持つこと、謙虛の心を持つことの必要などが、その頃の日記に記されてゐる。而して血の涙を流すほどの苦心を理解し得ない人々から、夫人に對してあまりに冷酷無責任であるといふ非難を受けたほど、剛毅不屈の態度を以て、萬難を排しつつ、計畫通り仕事を運んでゐられる間にも、併し故國に對する熱い情愛は、絶えず沸騰してゐた。本國の事情、殊に嘗て心血を濺いだ教會や學校の状態に就いて、その通信を待ち、梅花女學校の財政に關して、度々前神氏に心配の手紙を送つたりしてゐられる。先生は分秒を惜んで勉強しながら、隨分頻繁に書翰を認められた。（註、その多くは、繼がない半切紙に毛筆で書かれてゐる）而して又故國の人々からの通信を非常に待つてゐられた。一日數回、郵便局へ見に往かれたことなどもある。前神氏

などにも、短いものでいゝから、出来るだけ頻繁に手紙を送るやうにと頼んだりしてゐる。「その頃、私の身體が疲れて居て、多分生きては歸らないだらう、と考へましたから、幾らか寂寞を感じ、それに道中の疲れやら何かで、弱つて居りましたから、かたゞ故國を懐しく思つて居りました。」と話されてゐるのは、主として病後のことであらうが、視察のために巡歴した時のこともあるのかも知れぬ。とにかく人格者に會ふとか、まじめな祈禱會に出るとか、人の深切を受けるとかの精神的愉樂の外に、娛樂をとる機會を持たなかつた先生は、故國からの通信を、主要な慰藉にされてゐたのであらう。

もう一つの慰藉は自然の鑑賞であつたやうである。日記に「秋夜月を見て感あり」などといふ題目も見え、「禽鳥、水流、虫の音は音楽に優る」などとも記し、自然は俗情を洗ひ、神に觸れ、交はらせる力であるから「親友なき者は野に出で、天然を友とせよ。師友なきものは山に入りて學べ」と言つて、その見地からと、又一つは健康の上からも、屢々學校の位置といふことを考へ、植物學、動物學、天文學は教育に缺くべからざるものと言はれてゐる。先生の自然觀は勿論單純な感覺主義者、又は機械論者のそれとは違つた、宗教的精神的のもので、天然は神の言葉、神の業、神の表現であると見てゐられたのである。従つて又自然に對しては、道德的感觸が多かつたのである。

アンドヴァーに居るうちにも、學校の參觀や集會出席の際など、講話を頼まれたことも折々あつたやうである。その頃先生の講話を聞いた或る婦人の評によれば、「先生の言葉は誤謬と不精確とが多く、正しい文章になつてゐないが、唯々中に溢れる精神が胸に響いて、その言はうとする意味が不思議にわかつた。」といふことである。

夏期巡回視察 アンドヴァー神學院に於ける仕事を終へて、豫定のクラーク大學に移られたのは、明治廿五年（一八九二年）の九月である。併し「夏期巡回日記」と題する、現在保存されてゐる米國在留日記の最後のものによれば、アンドヴァーを六月末に見棄て、それから附近各地の學校を參觀し、教育家、宗教家を訪問し、且つ毎々教會で講演をしてゐられる。その話題は宗教か、又は日本に關すること、この頃になつては、大に英語に熟達し、講義の組織や言葉に就ても、賞讃を受けたこともあるが、殊にその内容は大かた興味を惹起し、感動を與へたことを自記されてゐる。多くは英文であるが、日本語のところを抜いて見ると、

August 2; 1892

I spoke to the young men in Ayer at the meeting Y. P. O. E. O. Subject: Christ the only Saviour. 大に感動を興へたり。當教會の Councils. 日曜學校長、當地公立學校長等、教會の主立は當夜出席せり。余が當會に話すことを決せしは前日なりし。而して各々立つて、その感動せしことを公衆に述べたりき。實に今夜は一言日本の事は言はず、只キリストに付て、己の感を陳べたるのみ。彼等の言に、今夜は尤も感動せりと。實に神の靈其會に在りしを覺えたり。是れ實に米國に於ての第一の經驗なりき。今夜は更に報を望まず話せし故に、實に愉快なりき。當教會の會員は、多くは壯年青年にて、かつ敏捷なり。

十一月一日の條下に、ウイスター師範學校見學中、學生に對して講話したことを記して、次のやうに言つてゐられるのも、その一例である。

「校長余を紹介して曰く、過日成瀬氏當校を研究し度旨を告げ、余の許しを乞はれたり。余は悦んで總ての門戸を開き、其機會を供したり。爾來氏より吾人の受くるところ多し。與へしところよりも、吾人の受けしもの却つて多からん。云々。

余は一時間餘の長演説をなし、屢々演説中に略せしところありたるが、校長は各論をも聽きたし。他日を期して残るところを演じくれたしとて、全生の賛成を得て、かく決す。全校大に感動せるを見受けらる。演説後、多くの尋問に答へたり。實に感じたる各生各教師の表白あり。……」
 或はかういふ説教を毎日曜に聴きたいと、數人の青年に言はれたこともあれば、子供に生まれ、別れを惜しまれたこともある。この間にも多くの人々から深切な待遇を受けて、屢々感謝し、中には復た父に會つたやうな感じを持つたことを記してゐられる。主婦のよく働くこと、教育もあまりなささうな田舎の婦人が、自分の描いた油繪で、室内を裝飾してゐること、雪隠の中にまで畫を懸けてあることに驚いたりしてゐられる。

この頃の教會の話の時には、聽衆の中から任意に醸出された報酬を、大抵受けてゐられたやうである。レヴィット、前神二氏の手を通して、夫人に向つて送金したことなども記されてゐる。

この日記が一八九三年(明治廿六年)の五月まで誌されてあるのを見ると、クラーク大學に入つてからも、そこで勉學しながら、時々地方に出掛けられたものと見える。

クラーク大學に移る クラーク大學では、教授養成機關であるところの教育學部研究科で、豫定どほり教育、殊に女子教育を主題として研究した。總長スタンレー・ホール博士は特に同情を以て、研究上種々の便宜を與へてくれた。ホール博士は先生に望みを囑して「君が専攻した社會學は新しい學科であつて、まだ十分に研究されてゐない。従つて開拓すべき分野は廣大である。殊に女子教育といふ部門に至つては、之を一個の専門として研究した學者をまだ聞いたことがない。君は幸ひに此の二つの新しい研究に着手したのであるから、論文を書いて發表してはどうか。學界に利益を與へることも多大であらうし、この大學からは早速學位を贈ることにするであらう」といふ勸告を與へたさうである。併し先生の計畫は前述の通りであつたから、その勸告には従はなかつた。又先生の計畫をよく知つてゐた或る人は、「講演又は著述等に依つて、資金を募集して歸つてはどうか」と勸告したことがあつた。併し例の獨立主義で、自分の學費を米國人の世話になること、スカラシップを取ることにすら不本意に思つてゐたくらゐであつたから、知人の深切を感謝しつゝも、その勸告には従はなかつた。

第三期研究と主要な面會者 明治廿六年四月頃からは愈々三期計畫、即ち大學での研究を止めて、

宗教、女子教育、社會事業等の實地調査見學及び訪問に専門にとりかゝつた。先生の主として見られたのは、獨立の、又は附設の女子大學、及び男女共學の大學であつたが、その外盲啞教育、白痴教育、感化事業等をも視察すると共に、それ等の機關を指導經營してゐる主要の教育家、宗教家、其の他に會つて、豫て用意した質問を提出し、意見を交換した。かういふ訪問の際には、例の熱心から、屢々先生は文字通り、目的の前には「赤兒」になつて、平生まるでその方面に交渉を持たない實業家などに、突然女子教育に關する質問を提出して意見を求め、相手は面喰つて、怪訝な顔をしてゐるのに、此方は大まじめで論じ立てるといふ風で、傍觀者からは、随分滑稽にも、非常識にも見えることがあつたさうである。

視察の途中は、實際の文化及び生活、教育の實績等を具體的に捕捉するために、なるべく學校の寄宿舎か、或は校長教授等の宅に客になる方針をとつた。かうして先生の會見された主な人々は、前に見えた人名の外、ウエスレー女子大學前總長フリーマン・パーマー夫人、マウントホーリヨーク女子大學總長ミード夫人、スミス女子大學總長シーリー博士、ヴァーサー女子大學總長テラー博士、プリンモア女子大學前總長ロード博士、ウースター州立師範學校長ラツセル氏、ハーヴァード大學心

理學教授ゼームス博士、同體育部長醫學博士サーゼント氏、スプリングフィールド體操學校前教頭醫學士ギユリキ氏、シカゴ大學總長ハーバー氏、また宗教界の名士としては、フイリツプス・ブルークス氏、ドワイト・ライマン・ムーデー氏、ライマン・アボット氏などであつた。

下、宗教方面の進展

宗教的方面の不分明 以上に記したやうな順序で、先生の教育方面の研究が進められたのであるが、宗教方面の修養に關しては、明瞭にその跡をつけることができない。元來先生の表面の仕事の大部分は女子教育、及び社會事業に關する研究調査であつたが、併し内面に於ける主要題目は宗教であつたのである。渡航した春、夫人に書送られた書簡の中に、

「余は日々キリストを學び、偉大なる人物の傳を考へ、徳を養ふことを第一の務となしをる也。學問と視察は第二の事と致候。」

とあるやうに、自己の生活に於ても、事業の經營に於ても、信仰を中心とする精神の修養が先決問題であつた。併しこれは内面の問題であつて、外界にあまり發表されて居らぬから、その發展が、如何なる経過をとつて、如何なる點に歸着したかは不明瞭である。それを明にするに最も重要な材料は日

記であるが、これはアンドヴァー在學以後のものは、前に擧げた「夏期巡回日記」の外に見當らない。而もこの日記には内心の消息があまり記されて居らぬ。女子教育に關しては、當初既に大綱が決定されて、爾後の研究は唯々その組織や方法に關するものであつたから、後半の記録がなくとも、推量がつくのであるが、宗教方面では少し趣きが違つてゐる。精密にいへば根本的大變動を來さないにしても、少くも修整された程度がかなりに多大であつたやうである。従つて宗教方面で重大な結論は、むしろ滯米と後期に至つて始めて發見されなくてはならぬ。又女子教育に關しては、歸朝後著書を公にして、その意見を發表したが、宗教信仰の問題に關しては、殆ど口を緘して語られない。唯々後の女子大學校に於ける實踐倫理の中心思想が、即ち先生の宗教の内容の展開であり、又講話の輪廓と順序とは、その進展過程の表現であると見られる。それすら容易にその究竟の點を直接積極的には説明しないで、多分はそこに到達しようとする熱意を刺戟し、その方途を指示し、獨斷的の偏見と誤解によつて、邪路に陥ることのないやうな用心をしながら、一面には廣い基礎を築き、一面には各自の自力で、各自の信仰内容を捕捉建設させるといふ方針を採られたやうであり、その上、先生自身も、絶えざる平生の努力によつて、歩々向上飛躍が行はれてゐたのであるから、かたぐゝ後の實踐倫理の

内容を以て、直接に米國時代の宗教的修養の説明とすることもできない。併しとにかく實踐倫理に推測の間接的要件を發見するのが、最も肯綮を得るに近い方法であらう。その他は今保存されてゐる日記の中から多少の材料をひろつて、それを補ふ外に道がない。

米國教界に對する兩面の觀察 まづ先生は米國在留の初期に於て、米國教界から如何なる影響を受け、又如何なる態度を以て、それに對したかといふと、至極公平な態度で、善い方面の影響を受容れてゐられたと推測される。渡航して間もない頃の日記に、次のやうな批評が記されてゐる。

「リバイバルも儀式となり、死したるが如し。青年は男女相見るとの娛樂のために教會にゆくあり。習慣に制せられ、或は夫婦の強制により、或は朋友の義理により、偽善虚飾の爲に教會に行くもの多きが如し。サンデー學校を見るに、暗誦は上手になし、或はコーラスにて歌ふことは巧なるも、或は教壇の前に在つて、よく己の思想を述ぶるも、祈禱の節は天井を見るもの多し。至誠神に従ひ、眞理を考ふることは眞に稀なりといふべし。日本の青年とは非常の相違なり。

米國にて小兒に暗記させるは誤也。之に由つて聖書をお經(佛法をさす)にする也。眞正の感情を毒する也。……

自然に草木の地より生ずるやうになさざれば、眞正の實を結ぶ信仰を育つること能はざるなり。

米國否な世界中、宗教大改革の時來らんとする也。

祈禱會も、説教の仕方、萬事改めざるべからず。

今日の宗教はパリサイ、サドカイ、佛法の如きものとなれり。」

以上は大體の一般評で、或る時には見過しかねる深切心から、牧師に意見をのべて、忠告を試みたやうなこともあるが、先生は斯ういふ暗い方面ばかり見て、米國の宗教界を唾棄することをしなかつた。他の方面に於ける、一生の方針、又米國に於ける學問の方針と同様に、宗教の方でも、努めて明るい處に着眼して、砂礫の中から、黄金を發見し、ダイヤモンドを發見して、拾ひ上げられた寶物の量は多大であつたやうである。前掲の日記の次の日曜日條に、

「今朝彼の老人(カミイン)の祈禱を聽くに、眞に信仰と愛に満ち、眞正のクリスチャンたるを認めたり。又余と余の妻の事を祈りしが、實に愛情に満ちたる祈也。

毎朝レヴィット氏も余が妻の事を祈らざることなし。

カミインの説教を聽く。題は「吾は失はれたる者を尋ねて救はん爲に來れり。」彼は七十七年の白

髮老人なれども、精神に満ち、力ある説教をなし、多くの人に感動を與へたり。余は此人の咄を聴く間、常に涙にむせびたり。……」

斯ういふやうに感激した個人と教會、或は集會を數多く發見してゐられる。渡航した年の夏期學校に出席して、ムーデーその他の外の人物に傾倒し、日曜日毎に教會に出席する士人の美風を讃頌し、學院に於ける祈禱會その他のまじめな集會が、寂寥を慰める、大きな歡喜であり、養はれるところが甚だ多いとも通信してゐられる。かういふ方面から見ると、米國に於ける宗教の力の偉大であることを認め、日記に次のやうに記してゐられる。

「キリスト教は教育、政事、風俗等、凡て社會に非常の勢力を有するものゝ如し。凡て有力者はキリスト教會に屬し、日曜日には必ず會堂に集まる。故に牧師が吹込む精神は、悉く人民に通ずる也。米人が犠牲の精神を持ち、己が國の爲に死し、或は學校公共事業の爲、彼等の最も大切なる金銀を投ずること、貧民救助、傳道費等、金を人の爲に用ふること實に夥しきが、是等は夫れ牧師が人民に吹込むなり。政事思想、道義心、教育心も、多くは牧師がつきこむ也。」

キリスト中心 右のやうな見方で、先生は信仰の動機本質の方から、米國一般教界の墮落を見ても、宗教の社會的效果の方からは、その中に感化救濟の力の多大であることを發見して、その弊を釀す要件を脱却し、力の本源を突き止めて、更に益々力の眞價を發揮する方向に進まれた。本國に在る間の先生の信仰は、單純な獨斷的熱信と概括さるべきものであつたが、併しその中にも、宗派や信條儀式的外形を固執するのではなく、直ちに神、基督、聖靈、聖書に迫りゆく趣きがあつた。つまり物事の眞相に徹底しなければ止まない性格の現はれである。同じ傾向は、米國に於ても勿論續けられた。而して少くも在米の半頃までは、信仰の中心そのものは事實上變つてゐない。渡航の春の故國への通信に「キリストにつき、聖書に付ては、當時大に神學上に變化を來し、余の信仰にも大に影響を來さんとせり。併し余は慥に活ける神の導きを得、吾が心に得る處ありて、信仰にすゝむを得たり。」とある。この書面の前半に在るやうに、既に動きかけて居た、先生の信仰の外廓は、米國に來て、その教界一部の自由な批評的見地のために、又先生が科學的哲學的修養のために、益々動いたのであらうが、その中核は愈々本質に肉迫して往つたのであらう。偉人の傳記を読むことを一つの修養とされたことは、前にも記されてゐるが、その頃は殊にボーロ、コロンバス、スタンレー、リヴィングスト

ンなどのやうな人々を好まれたやうである。これは一つは先生の標語のやうにしてゐた「事業の成功は、易き道を避けて、難きに就くに在る」といふ、方法的の方針からも出て居ようが、元來創始的に、独自の理想的新境地を開拓せねば止まない先生の冒險的性格に、自ら共鳴するところがあつたからであらう。併しその最も中心の位地を占めた目標は、前の書翰にも現はれてゐる通り、やはりキリストであつた。キリストの愛、赦し、救ひ、受難、復活は當に人の踐むべき至道であり、その體現は信に於て可能な、献身奉仕の日常生活でなければならぬとしてゐられた。

二十四年の始め頃に「吾生涯の目的」と題して

「神を愛し、キリストを愛し、人を愛し、國を愛し、全く人々の幸福の爲に働くにあり。」

實に宇宙が和合せざることは、決して企つべからず。……

吾が働きの目的は、女も、子供も、老人も、嫁も、姑も、舅も、貧人も、富者も、病人も、不具者も、悉く幸福を得るの道を探ね、之を實行して國を救ふに在り。其の爲に生命を投ぜば足れり。汝の心常に如是なる可し。」

と記し、夏の頃には

「キリストは救主なり。吾人もキリストと共に眞に人の苦難を憐み、之を助くる爲に一生を盡すべし。」

文章、演説、働き、企圖、萬事この目的を達せざれば益なく、又成功することあらざるなり。

キリストの大目的は世を救はんことなり。これ亦吾(キリストに在る)が生涯の大目的也。」

と記し、廿五年の始め頃には、

「師父の心。

弟子の爲、子の爲、教會の爲、友の爲、眞に己の兄弟姉妹の如く思ひ、キリストの弟子に於けるが如くなるべき也。生涯を全く彼等の爲に捧ぐべし。常に燃ゆるの愛に在る可し。

是れ人を治むるの道なり。」

と記し、同年夏には、

「人間終極の道はキリストの意を行ふにあり。此の社會、キリストの道を以て心となさば、萬人幼より老に至るまで、眞正の幸福を受くべし。」

と記されてゐる。先生が困難の途を擇んで、しかも常に喜び勇みつゝ進まれたのは、キリストの十字

架を負ふ體驗に外ならなかつたのである。

直截自由な神觀 この頃までの先生は、人格的の神を信じ、その全能を信じ、キリストが「神より遣はされたる全き人」たることを信じ、靈魂の不滅を信ずるといふ究竟の點に於て、普通の基督教徒とあまり變つて居ない。併し形式的でなく、本質に觸接して、従つていかにも態度の自由、見地の寬廣を得て居る容子が、始めから現はれてゐる。神は全能であるから、奇蹟の如きも當然できる筈である。併し聖書にある奇蹟談の眞偽、神の永遠な意圖の不明等は、自分には關係がない。「吾は唯現在認むる神を信じ、之に頼り、之に順ふ也」と言ふ、最も直截な態度である。従つて「この信仰と實行とある者は、如何なる宗派、如何なる宗教に屬すと雖も、眞に神の友、神の信者也。」と、自由な批判の態度に發展したのは當然である。この態度は、普通の狭い形式的見解からすると、既に基督教を超越したものと云はなければならぬ。

宇宙の神

神は一國一種族の神にあらず。萬民の神なり。故に往古より今に至る迄、萬國萬民、萬物を一様に支配し玉ふ也。此の眞理に適はざるものは、神の主意ならざる也。」

と記し、「佛教、儒教、神道、その他凡ての宗教の中にも、神の聖旨に適ふ多數の人のあるのは當然で

ある。神が彼等を見過ごしたまふ道理がない。又若し神は二千五百年間、日本人の靈魂救済に注意したまふことなく、唯々ユダヤ人のみを導かれたものとすれば、偏頗な神になつてしまふ」と言はれてゐるのは、渡航後間もない頃のことである。この神觀は、理論的考察からはひつた人にとつて、その頃にしても新しい見解とはいへまい。併し理智意識の推論からでなしに、單純な熱信から、内容的に開けて往つたものとして、貴い人格的の價値が認められる。而して後の宗教歸一觀の端緒が、既にそこに見られるであらう。

人間的キリスト觀 それであるから、キリストの見方も大に人間的經驗的である。廿四年の日記に

「聖書は人心の經驗より發したるもの、自信自行の言也。」と記し、又「聖書研究法」と題した中で、

「キリストの心、キリストの目的を知らんが爲に聖書を讀む可し。

キリストのヒウマニチーを認めん爲に研究すべし。

キリストのデヴィニチーを認めん爲に研究すべし。

弟子の人物を知らんが爲に調ぶべし。

己の品格信仰の爲に調ぶべし。

道德の基本を定むる爲に讀むべし。

人情に通ずる爲に讀むべし。」

この読み方の解しようによつては、純粹信仰の立場から異議が出るかもしれない。しかし、最後の「人情に通ずるために聖書を讀む」といふのは、普通の意味に解しても面白いことであるが「人情」の解釋如何によつては、非常に高遠な理想に接觸する。又他の處に「己の需要に應ずるやう調理して、其の眞理を味ふこと大切也」とあつて、既に聖書に對して、解放された、或る意味の批判的態度をとりつゝある趣きを示してゐられる。

絶對信順の生活 斯の如く、形式に囚はれない態度で、直ちに信の本質に接觸し、そこに一切を投げ出して、無礙の安住地としてゐられたことは、廿四年の初め頃の、

「神は吾生涯を保護し、導きたまふを信じ、安心して大膽に事を爲すべし。金のなき、健康を缺くことは、憂ふるに足らず。萬事祈禱と信仰に依つて歩行すべし。

自ら行を作らず、神を信じ、自然の發達に従ふべし。」

とある、又病後の頃の、

「神は愛なり、救なり、善良なり。故に何事も吾を益せざることなし。病も、死も、不幸も恐るゝこと勿れ。常に安心して己の業にかゝるべし。又人に付ても心配することを止めよ。神の恵に依つて、萬事善に歸るべし。人の心は素と善きものなれば、人の氣を損ぜんことを恐るゝ勿れ。萬事自然に任せ、平和に己の業に従事すべし。」

とあるに徴してわかる。その頃夫人の事、自分の事で、隨分心を苦めながら、そのために少しも失望せず、萎縮せず、憤怨せず、踊躍歡喜して、明るい樂天的な努力を續け得たのは、やせ我慢でも、冷酷なためでもなく、唯この神に於て自然に任せるといふ、純な信順の態度の、深い根柢が据ゑられてゐたからであつた。

信順と自然、自由と定命 神の信順者にとつて、自由と必然とは一つことであつて、自然の風趣に於てそれが見られる。それ故廿四五年の間の日記には、

自然

は神の政事也、眞理也、道理也。故に自然を觀ること必要也。自然に従ふこと大切也。

Natural

ナチュラル、即ち神の工也。神の攝理なり。故に全くナチュラルと和合一致すべし。然らば凡ての

自由を得らるべし。……病より、心配より、罪より、惡より救はれ、眞正の自由を得べし。キリストの與へ玉ふ自由、即ち神の與へ玉ふ自由なり。」

「天然、即ち神と偕に行き、偕に働かば、水の流れに従つて下るが如し。向ふ處何物として吾を妨ぐるものなし。大勢力、大熱心を以つて、萬事、即ち吾目的、吾天職を成遂ぐるを得べし。

吾が命は定まれり。全く天命に従はゞ、吾が天職を成遂ぐることに必然なり。天職を遂ぐるは、神の榮と吾が榮、天地の大事業をなすこと、吾がアンビションを遂ぐることなり。吾天地にある、亦天命なり。吾は之を受け、之に従はゞ、何事も成るに相違なし。

日々熱心其命に従ひ、則を超えず、吾に與へらるゝものは悉く遂げ、吾に爲せと命ぜらるゝ事は悉く爲し、教へらるゝ課を悉く學びなば、計畫せずして人物となるべし。

キリストの生涯の如し。彼れ著書を企てずして聖書は出來、大事業を企てずして、大事業成れり。自然に任せば出來てゆくものなり。吾もかくあるべし。徒に明日の事を思ひ煩ふ勿れ。明日の事は明日思へ。今日は今日の事をなせ。」

「星を見れば心天に走せ、神に交り、神の榮光と、全智と、全能とを感ず。花を見、果を見、葉を見、

光線流水を見れば、神の至愛の親に優るを感ず。

山中に入れば世の塵埃を免れて、心自ら靜に、清淨となり、良心の聲、明に耳に聞え、天父の命令心にきこゆ。」

といふのは、同じ直觀でも、「溪聲即是廣長舌、山色豈非清淨身」といふやうな、純粹な智的汎神觀とは異つて、道德的なだけ、聖書に記された人格的一神觀の立脚地に立つてゐるけれども、理性的自然と、感覺的自然との交響に於て、象徴的に見た自然から、汎神的思想に入る途も開けてゐる。或る意味では、親鸞上人の「自然法爾」に近づきつゝあるやうな趣きがある。

奴隸と自由 そこには又運命觀と自由觀との交錯があつて、人生の眞相を公平に見てゐられる。自己の使命天職といふ觀念の一脚は運命觀で、一脚は自由觀である。而してその道德的究竟は、絶對の奴隸にして、始めて全き自由人であるといふ、最高の綜合觀に達する。即ち先生が「自由は奴隸より生ずる」として、「一の學問をなし遂ぐるにも、全くその奴隸となり、萬事を空しくし、身を捧げて之に仕へて、始めて得らる」と言ひ、「眞正に律法より自由となるには、之に事へて律法の支配を受くることを忘るゝに至り、更に己れ自らそのものとなるに在り。」と言つてゐられるのも、基督の教へ、又

少し賢明な常識が明瞭に示してゐることで、何も新しい見解ではないが、それが體驗の表白であるかぎり、貴い言葉でなければならぬ。

獨立とコスモポリタン——**個と全** 同一の思想を外界社會に發展させれば、先生のいふ「獨立とコスモポリタン」の關係になる。「國家はその自國の特殊性を發揮し、獨立自主を保つ必要あると同時に、國家相互に補助融會して、世界の進歩、萬國史の完成に努むるの義務あることを忘るべからず」といふ、個人と社會との關係と等しく、國家と世界との相即的綜合觀に達するのが當然である。この「個」と「全」との相即といふ見地は、先生の常に忘れない理觀で、限界を劃して「私」を立て、一に偏して他を排することは、強く排斥されたことである。然るに愛は常に個に著して、全を忘れ易い。故に「女子教育の方針、目的」と題して、

「愛は次第に擴りて、終に一國を思ひ、一世界を顧るに至るのみならず、進んで宇宙といふ觀念を生ぜしむるなり。此の頂上に達して、始めて完全なる愛を悟り、完全なる徳を行ふを得るなり。

故に婦人と雖も、この完全なる愛と徳とを要し、一個人的思想でなく、國家的、否宇内(宇宙)的の觀念を要するなり。……これ女子教育の本徳なり。これ女子の道德智識の勢力なり、生命な

り。之を缺く時は、他は悉く死塊と化せんのみ。」

といふ、道德的コスモポリタンチズムを強調されたのである。

全日本の綜合 この常に全體を見渡し、總てを生かすといふ、博愛の眞義に立つ態度は、又先生の日本に於ける事業經營の方針に對する綜合的精神となつて現はれる。

「日本社會は四千萬人を以て成る。之と協同し、この一體各枝が其分を盡し、互に相顧て、始めて社會は成り、又社會は美しく、幸ひとなる。この大眞理を忘れ、己れ一個の事業、名譽都合杯を思ふべからず。

教育は官立、私立、大學、中學、小學、女學、男學、專門、普通を區別するなく、日本の文部大臣となつて、日本全體の教育の進歩を計り、研究すべし。

宗教は佛法、神道、キリスト教、各宗を身方とし、親類として、その改進を計るべし。

富國、政事、其他の萬事は日本の社會をなすの一要素なれば、眼を全體に及ぼし、其改良を計るべし。

吾事業の資本は日本に在る悉皆を使用すべき也。如何にせば之を有益に使用し得べきや。

吾同志身方となりて働くものは四千萬人あり。如何に之を組織して運動すべきや。學校も無數に有り、如何に之を管理すべきや。

若しこの四千萬人の物を計り、其益を其勞働と資産の多寡に應じて分配せば、誰か盡力せざるものあらん。實にこの精神を實行せば、誰か幸福を得ざるものあらん。」

この中には、全民主義、協同主義、個人主義、民主主義等の萌芽がすべて綜合されて、先生が後來の教育經營、及び改善運動の思想的根柢が、既に適確にこゝに成立つてゐる。

總て基礎よりこの全觀的態度は、改善事業の着手の順序を、次の如く全然民主的精神で立てさせた。

元より始めよ

一個人より始めて、國に及ぼすべし。

田舎より始めて、都會に及ぼすべし。

働きより考へて、學校創立に及ぶべし。

重きを人民に置き、輕きを政府に置くべし。重きを地方田舎に置き、輕きを都會に置くべし。重きを家庭に置き、輕きを社會に置くべし。」

同様にして、一區に一箇處位の、「朝夕女學校」を置き、簡易な家事教育を施す必要、村々に寺院に代るべき「女教會」の如き社を結び、ホームミツションの精神と、傳道士の熱心とを以つて教化に努むる必要を考へられた。事業の精神を最高の頂點に置くと共に、その具體的の着手の基礎を、最下の底邊に据ゑるといふこの考へは、やはり兩極を公平に見、普遍的充實をその間に求める全觀的態度から出て來るのである。同じ態度が時間の方に展びては、女子の一世を親の結婚まで遡らなくてはならぬから、「女子教育の卒業期は、一世紀、即ち百年と見なくてはならぬ」といひ、又「千年二千年の後を考へて、事業の計畫を立てなくてはならぬ」といふ、永遠な着眼を生むのである。

感謝と愛 先生が愛と共に、感謝の念を以て徳の本であるとしたことは、既に前にも述べた。而してその感謝は、神に對するものから、人に對する謝恩となつて實現されたのである。先生はこの頃までの、總ての善事を以て、皆神の恩寵に歸してゐられる。

謝恩の念は深かつたけれども、それは結局神に對する根本から來てゐる上に、明かな人格的自覺の上に立たれてゐたから、感傷的に俗情に殉じて、卑屈な性格を養ひ、自己の使命を捨てることをされなかつた。先生は日記の中で、米國に來た日本の青年が、何故に屢々卑屈になるかの原因を考へ、そ

の態度に警戒を加へて居られる。

先生は同様に、眞理、力の源として最も多く愛を説かれたが、それがためにセンチメンタルになりはされなかつた。「英雄丈夫の品格とは、愛の高く、廣く、大なることである」として、

「キリストは雄勇也。豪傑也。眞に一人を愛し、それより及ぼして萬人に至り、國を愛し、宇宙を愛せしの人也。」

と言つておられる。

祈禱と労働 祈禱も亦最も尊ばれたことで、之に關する感想も亦最も多い。「祈禱は、生命であり、力であり、信じて眞に祈れば、聽かれざることは決してない」として、まじめな祈禱會に出席することを樂みとされたが、又獨りで祈ることを喜んでおられた。聖書を讀むことも、最大な學問であつた。併しそれも徒に靜閑の裡に沈潜ばかりして、言語文字に浸ることを貴しとされてはゐない。先生の學問も、修養も、事業も、皆「決死の覺悟」で「空撃でなく、實戰を戦ふ」のであつた。常套的の弱い言葉でいへば、徹頭徹尾「實行」を重んじたのである。それ故教育上でも「日本にはキリスト教あり。佛教あり。儒教あり、然れども眞に之を教ふるもの、行ふものなし。今日の急務は、眞に之を味ひ、

之を行ふものを多く養成するを要する也。」といふ着眼が生れて來る。従つて又労働といふことには重い價値を置かれてゐる。「労働するを俗物とするの理なし。鋏を持つて天父を考ふべし。哲學を學ぶべし。學者は鋏を持つことを恥とする勿れ。」と言つて、富家の子弟の教育も、労働を學ぶことから始めなければならぬとされた。但しこれに對しては、又他の一端を見て、下層民にも、發明、發見のために、子女の教育のために、政治に關はるがために、高等教育を要するとしておられる。

問題の兩極を見る 右のやうな公平な態度から、米國の婦人の高い教養に感嘆しつゝも、男女合同教育、男女交際には、大に制限を要するとし、高遠な理想の教育を考へつゝも、自分の子供時代の寺小屋教育に採るべきものがあるとし、大學を必要としつゝも、小組織の私塾が必要であるとし、宗教信仰を教育の根柢としなくてはならぬと確信しつゝ、併し「宗教と教育とは、全く分離すべし、別々に働きを爲すべし。然らざれば教育を普及すること能はず。眞信仰は自由にする事大切なり。」と言はれてゐる。斯の如く、問題の兩極を見て、それを適確に把握することを忘れない態度は殆ど天性であるかのやうで、驚嘆に價するものがある。

後期に於ける内面的發展の推測 前に擧げた材料は、總て米國に於ける初期の思想から拾ひあげた

ものであるが、此の如き内容と態度とを持つて、一面知識的研究批判と、實行的の考慮修整とを加へつゝ、如何様に發展し、如何なる結論に到着したかは、略々推測されるやうに思はれる。要するに之を縦に見れば、信條儀式の漆桶から脱出して、直ちに基督につき、基督の精神と行爲とを透過して、更に神に往き、遂に固定した人格の概念をさし措いて、直地に普遍絶対の神の實態、生命、力、そのものに融會されたのである。之を横に見れば、信仰の内容に於て、一面精神の眞髓そのものを、その究竟まで追求し、一面愛の實現を、無限普遍に擴充し、その兩端から、舊套形式の「基督教」といふ藩籬を、おのづから脱出して、名目を持たない、實質的信境に進入されたのである。

先生は後に、「日本を去る時に、既に神學上の疑問があり、信仰上の懷疑時代であつた」と話されてゐるが、併しその懷疑は信仰の内容本質そのものに關して居らぬ。内容本質は少しも動搖して居らぬのみか、益々深化されて往つた趣きが、前に引いた日記によつて見ても明かである。然らば先生の懷疑といふのは外形に關するものであつて、即ち固定した舊形式が壊はれて、独自の直觀の透徹と、自由な理性の批判とが新に加はり、傳統的獨斷の代りに、自主的合理的の根據が信仰に据ゑられる間の、意識上だけの動搖と解しなくてはならぬ。但し右の進展が、米國に居る間に完成したものと限られ

ないであらう。安んじてその方向に進展の續けられる、大飛躍を経験したものと解すべきであらう。やはり後の講話の中に、「集中して研究して見ると、今まで信じて居たことが、皆間違つてゐるやうに感じて、半年間は大に苦みましたが、ともかくも自分だけの土臺を造りました。」とあるのによると、教育の方と同じやうに、宗教の方でも、初期の中に新信仰の基礎ができたものと思はれるが、併しその時代から、少なくとも留學半ば頃までは、基督を生活の指導者とし、聖書を教訓の寶典としてゐられた容子が、前述のやうに明かであるから、最初半年間に於ける信仰改造といふことも、外部的の形式であることがわかる。

自身の談話 尙ほ右に續いた談話を補綴して見ると、

「宗教と教育と、その孰れを仕事とすべきかと考へました。さうして若し私が生涯を捧げて宗教家となるとすれば、どういふ風にすべきであるかといふ光明は認めましたが、私はどうしても女子教育をしなければならぬ。日本には誰か私と同じ志で宗教を起すものがあるであらうと信じて、私は女子教育に身を委ねることにしたのである。それから日本に歸つて、今日まで待つたけれども、まだ私の氣に入るやうな宗教家は、一人も起らないのである。かう申すと甚だ高慢なやうであるが、

自分だけの光明は認めただのである。これはまだ誰にも言はないのである。若しこれを公言するとすれば、大に準備しなければならぬのである。私は神學をしたものでもない、又どこまでも教育家である。故に公衆に向つて説くといふことはしません。併しながら教育上必要な範圍までは進まねばならぬ。さればとて、これをなまはんじやくにすると、却つて結果が面白くないから、餘程用心をしなければならぬ。私の信ずるところは、今まで有りふれたやうな、動搖し易いものでない。故に健全な頭を持つてゐる人ならば、はつきりわかつて、動かないところの土臺ができる筈である。私が始終あなた方に申すやうに、オーソリチーに據りすぎてはいけない。故に私が言ふからと言つて、信ずるには及ばない。併し私の信ずるものは、天地間に滿ち渡つた、宇宙の眞理でなければならぬ。世界のオーソリチーには凡て相談したところのものであるが、私のオリヂナリチーもありますから、決して獨斷的のものでない。私の信仰となつたものであります。(明治三十八年)

この談話中に在るやうに、いよ／＼形式上の専門宗教事業を捨て、女子教育によつて、理想の實現、社會の救済に努力することに、改めて最後の決心したといふのは、何時の頃のことか、今跡づけ得ない。日記によれば、少くも初期の間は、女子教育を中心に、傳道、社會事業、講演、著述、新聞

雜誌等、社會改善のために必要な、各種の仕事をしようと考へてゐられたやうである。

その後(註、明治四十五年)學生に話された筆記によると、極めて概括的ではあるが、宗教の研究と進展との経過を示すところがあるから、多少修訂しながら、それをこゝに引用しよう。

「私がアメリカのアンドヴァーに居つた時分、即ち今から凡そ十七年前と思ひます。其の頃自分は女子教育の研究の爲に行つて居たのであるが、其の根本となるべき宗教問題に就いて、どうしても解決せねばならぬと考へ、多大の努力に由つて解決を得、一つの假説を立てたのである。更にこの研究を完成するためには、女子教育といふ目的を抛つてしまふかと考へたこともありましたが、どうしてもこれは抛つわけにゆかぬ。宗教と女子教育とは密接な關係がある。否むしろこの宗教は、將來わが國の婦人に依つて實現さるべきものであると考へたのである。爾來この宗教的假説について、今日まで研究を續けて來たのであつて、この學校の開校をも／＼から、この思想が閃いてゐたのであり、又今日この學校及び學生の中に活動してゐるところの精神は、やはりそこから流れて來てゐるのに外ならぬことを、卒業生は感知するであらうと思ふ。

私の宗教思想に大なる變革を持ち來した力は科學である。殊に私がアンドヴァーで研究した社會

學である。その以前の私は熱烈なるクリスト教信者であり、思想としては、形而上學的、神學的哲學であつたのであるが、それを破つたものは、科學殊に社會學であつた。私は今後の宗教、今後の信仰といふものは、獨斷的なクリスト教のみではできない。同様に他の宗教のみでもできないと考へたのである。併し私にはその舊信仰と新解釋とが十分に調和統一して、一つの信仰内容を作ることができたのである。」

假りに結論を作れば 今前述のやうな基礎の上に立ち、歸朝後にまで亘る、當然の發展の到着すべき結論を假りに作つて見るならば、其の信念は人性本具の要求と、宇宙必然の靈能との間に成立つところの精神的事實であつて、人爲的の一宗一派を以て限るべきものでなく、又あらゆる民族と歴史とを貫いて、而も深く個人の胸奥に自發する第一義的人格生活であることが確認されたのである。宗教と限らず、あらゆる歴史的傳統的文化の方式は、要するに一時一處の環境と事情とによつて具體化された、人格生活の第二次的發展形式であつて、之を以て其の根本たる、第一義的精神生活の本質を規劃すべきものではない。却つて此の第一義の精神生活が一切の方式に生命を與へ、その發展の動力と

なるべきものである。故に此の精神生活は、何人と雖も必ず體驗しなくてはならないものであつて、又必ず獨自に自由に體驗することのできるものである。先生は此の新なる宗教的進展飛躍によつて、新なる精神的充實を生活の内容に齎らすことができたのであらう。

併し先生の内面の生活の跡を顧ると、これは「新なる」といふよりも、形式を通して、始めからそこに侵入してゐたものであつて、後には唯々意識的にそれを確認し、理智的にそれを證明したものに過ぎぬと言ひ得るやうである。ともかく外面的には、從來の教會で作り上げた、いはゆる「基督教」といふ人爲的、且つ因襲的形式の殻を破壊し、直地にあらゆる人類に共通普遍的な、本具的な宗教意識の本質に突き入つて、そこに精神生活の立脚地を据ゑ、少くも主觀的には、たとへ如何に新しい科學的研究と、哲學的批判との伏兵に會つても、狼狽することを要しない、又たとへ如何に頑強な保守主義、國粹主義の突撃を受けても、辟易することを要しない、むしろ之を綜合し、調和し、醇化し、聖化して、之に價值を與へ、生命を與へて往くことができる、且つ必ずさうして往かなくてはならないといふ、確信を攫んで起つことができたのである。これは實に留學以前からの宗教的要求であつて、而て少くも或る程度まで満足のできる成果を得られたのである。

右のやうな内面の成果を得、又外面の研究も略々豫定の課程を終へたので、夢寐の間も忘れ得なかつた故國に歸つて、その理想を實現し、使命を果すべき時になつた。

歸朝の旅装をととのへる先生を見たレヴィット氏、スカツダー氏等は、も少し留まつて研究することを勧めたやうである。又それは素より先生の望むところであつたが、併し先生が家庭的、生活的事情はそれを許さなかつた。殊に日本の社會は今や急迫の淵に臨んでゐる。その救濟の手を緩るゝことができぬと考へられたので、こゝに宗教的確信と、教育的計畫とから、自然に湧き上がる、躍々たる希望と活氣とを胸に懷いて、苦しく、又樂しかつた米大陸を後に見捨てられたのが、明治廿六年の暮で、故國では方に思想界學藝界が萎靡沈滞して、朝野の政争劇甚を極め、遂に伊藤内閣がその超然主義を捨て、始めて陰に政黨(註、自由黨)と握手し、議會は「對外硬」の旗幟を掲げて政府に迫り、朝鮮を中に狭んだ日清間の外交が、漸く緊張し來つた頃であつた。

二 女子大學設立運動

上、準備

歸朝と靜養 明治廿七年一月を以て横濱に上陸した先生は、直に京阪に向はれた。さうしてそこで先輩友人と會ひ、澤山氏の墓に詣で、待ちわびて居られた夫人と一しよに、當時同志社に奉職されて居た夫人の令弟服部他之助氏の京都の寓居に同居されて、靜かに疲勞を養ひながら、事業着手の考案にとりかゝられた。

先生は日本の精神界に對する滔天的雄圖の中心、且つ先頭たる事業は、即ち女子大學の設立である。而して之が準備の着手は、米國で立てた腹案と、蒐め得た知識とを編んで、一書を公刊し、女子教育の意義と必要と方針と方法とを明にして、社會の蒙を啓き、その理解を得ることに始まるべき豫定で、之がために一年間を費す計畫であつた。一方に又設立の具體的基礎を顧ると、自分で創立した新潟女學校は、歸朝を待ち得ず倒れてしまつてゐるし、殆ど創業者として心血を濺いだ梅花女學校は、舊のまゝの形式的基督教主義の上に基礎を据ゑてゐるし、してみると先生が理想を實現するための機關としては、全然新たな學校を興さなければならなかつた。愈々新設に着手するとなれば、教育及び經濟に關する時代の傾向實狀を觀察し、その上に立つて理想を實現するに適切なる方針と手段とに就いて、細密な考案を定めなければならぬのであるが、殊にこの頃はちやうど清國との關係が險惡になつて、

人心は非常に興奮し、世間は一體にも騒がしくなつて來た際であるから、又折柄米國に於ける積年奮闘の爲め、肋膜炎再發の徵候もあつたので、保護かたぐ、暫く靜觀と熟慮との間に筆を執られるといふことは、内外兩界から見ても適宜の方針であつた。

梅花女學校長 然るにこの時ちやうど梅花女學校では、宮川經輝氏が校主であつたが、別に校長の適任者を得なければならぬ際であつたので、折よく歸朝した先生をといふ交渉があつた。先生は既に前述のやうな、米國以來の豫定案を持つてゐる。その上以前の牧師時代とは著しく違つた様式の思想信仰を懷いてゐる。宗教的信念の基礎の上に教育を行ふ必要を認める點に於ては同一であつても、舊來の狭い形式的基督教を主位に置いて、その中から他の一切の社會を見、又其の因襲的信條儀禮に依る外に宗教的教育の方法がないかのやうに考へられてゐた意見を、全く變へられた今日であるから、先生はこの招聘に對して應諾を躊躇した。併し女學校の教育内容は以前に比べて餘ほど違つて來てゐると、殊に先生の意見どほりに教育する自由を與へるといふ條件を附けた懇請があつたので、先生も然らばこの梅花女學校を改善し、發達させて、自分の理想を實現するに適當な教育機關とすることができらう。さう出來ればむしろその方が捷徑であると考へて、今度は前途に多大の希望を負

うた校長として、思ひ出の深い講堂に就任式の擧げられたのが、二十七年三月であつた。

別に創設する必要 先生はこゝで校長としての校務を視、又直接教育の任に當りながら、科目や方法に改善を施し、又女學校の普通程度の上に、教育部、文學部などのやうな幾つかの學部を開き、上級生及卒業生をそれに編入して、着々努力を加へかけて見た。併し設立以來二十年に近い年月を重ねて、歴史的教會派の形式の下に固く育まれて來た學校は、其の組織學風習慣及び各種關係に於て、既に牢乎として抜くことのできない根柢を作つてゐた。學校委員の意見はよし先生の自由を認めても、實際上全般に亘つて其の所信を貫徹し、理想を實現するといふことは甚だ困難な状態であつた。それで先生は梅花女學校はやはり舊來の主義と歴史とに従つて、どこまでも其の特色を發揮させるのが自然であり、さうして他方自己の新理想の實現のためには、やはり又それに應ずる新機關の設備の必要であることを認められたのである。

麻生先生の協力と「女子教育」の流傳 さういふ次第で、先生は梅花女學校に盡力する傍ら、徐々と其の本來の目的に向つて計畫の歩を進めて往かれたのであるが、それに參與して萬事協力した人は、實に元日本女子大學校長麻生氏であつた。麻生氏に對しては、越後時代から先生の信賴深く、渡米の

際には新潟女學校の後事を擧げて、之を委託しようとしたくらいであつたのであるが、氏は思ふところがあつてそれをうけなかつた。氏は廿五年に北越學館をも辭任して西上し、折柄校長を缺いてゐた梅花女學校の懇請によつて、暫時其の校務を見たこともある。尋で同志社に教鞭を執つて、先生が歸朝當時も其の職に居たのである。先生は在米中から屢々書翰を氏に送つて、共に本邦女子教育の爲めに、やがては社會改善のために相提携して盡力しようと思つてゐたのであるから、歸朝後は勿論この希望を以て氏に勸説されたのである。梅花女學校の改善——といふよりもむしろ女子大學設立計畫に就いても、勿論研究し畫策する唯一の協力者であつた。

先生は二十八年夏期休業中京都に寓居して、麻生氏の助力を借りつゝ、「女子教育」の一篇を草し、翌年二月を以て出版された。此の「女子教育」に於て述べられた先生が意見は、米國に於ける理論的實際的兩面の研究調査から得た材料に、わが國の歴史と國情とを參酌して立論案配したものであつて、實に先生が教育事業の基礎的内容を示すものであるから、左に其の要點を摘出する。

「女子教育」の梗概 第一章は「女子教育の方針」と題して、本邦女子教育不振の原因は、其の方針の確立しないためである。良妻賢母の養成を標榜しながら、其の實唯々古來の習慣に従つて、裁縫手

藝等の日常卑近の實用的技能、及び茶の湯生花等の實效に乏しい裝飾的技能を機械的に模習させるに止まり、到底本邦の國家的使命に對する責任を負擔させるに足らないことを指摘し、今後は第一、普通教育に重きを置いて、圓滿完全な人格を養はなくてはならぬ。第二、女子が女子としての天職を盡すに足るべき資格を養はなくてはならぬ。之が爲めには、從來の如き低度の裁縫料理ぐらゐでは到底不足である。道徳智能體格に於て、更に高尚な學理的修養を與へる必要がある。第三、女子が國民としての義務を全うする資格を養はなければならぬ。國家に對する國民の責任を解し、國家を愛し、且つ之に必要な知識技能を有するところの女子にして、始めて、忠良なる國民の妻母となり、又非常の際には、男子を助けて國家に貢獻することができると論じ、結局女子を人として教育すること、婦人として教育すること、及び國民として教育することの三方針を立てた。

第二章は「智育」と題して、まづ本邦婦人の智育の程度が歐米列國に對してあまりに懸絶してゐることを指摘し、尋で高い智育は女子には不可能である、又有害であるとする謬論を説破して、却つて個人社會各種の方面に適切必要であることを論證し、而して少くも心身及び社會的地位の上中位に居る婦人には、普通教育を内容とする高等教育を與へなくてはならぬ。之がためには高等女學校の程度

を高めると共に、修業年限三ヶ年位の特殊の大學を少くも關東、關西、九州に各一校づゝ、漸次設立する必要があるとして、猶本邦女子に適當なる學科の種類、價值及び其の教授法を各科に就いて概論し、大に自發主義を高唱してゐる。

第三章は「德育」と題して、まづ其の目的を「女子をして道德上の理想を懐かしめ、之を實現するの志を起さしめ、且つ之を實踐する習慣を與ふるに在り」と定め、次に各種の女徳を論述して、「將來の日本が希望する所の女子は、その慈悲心を擴大して、以て日本帝國を包含し、優美に加ふるに精神上の勇氣を以てし、從順なるも、而も見識あるもの」と總括し、次には其の教育法を説いて、注入的、束縛的、器械的、消極的方法を避けて、開發的、自動的、自然的、積極的でなければならぬと主張し、道德上の理想を養ふ要件として、萬有、學藝、社會、國家、宗教の五つをあげ、學校と教會、教育と傳道とを混同して、一定の宗教宗派を學校教育に用ふるのは不可であるが、人心に自發する普遍的の宗教心は人間最勝の力、德育の根柢であつて、是非とも之を培養しなくてはならぬことを力説してゐる。猶教員を論じて、男女併用が適當であり、校長には男子が適當であるが、その孰れも、苟も女子教育に當るものは、之を以て自己の天職とするところの献身的人物でなければならぬこと、寄宿舎

は家庭的の小組織でなくてはならぬことを説いてゐる。

第四章は「體育」と題して、其の價值、特に本邦女子に必要な所以を説き、更に歐米の體育史、各種體育法を略述批評して、本邦教育に採用すべき體育法の方針を定め、本邦女子體育振起策として、日本體育學を興すこと、體育教師養成所を設けること、美麗の標準を變更すること、早婚の弊を矯正すべきことを説いてゐる。

第五章には「實業教育」と題して、手工教育が教育方法として、且つ社會的生活基礎として、女子に必要であることを説明し、殊に本邦女子に勞働の價值を解せしめる必要を力説してゐる。さうして最後には専門教育が女子の自治のために、進歩のために、社會のために、老後のために必要であることを略説して、この稿を終つてゐる。

「女子教育」に對する世論の反響 以上菊版二百五十餘頁に亘る女子教育論は、大冊の多くなつた今日から見ても、決して長篇とは言へないが、當時にあつては決して小著ではなかつたのである。而して此の種の獨創的研究的教育書、殊に女子教育に關する論述に乏しかつた時代であるから、識者からはかなり好評を以て迎へられたやうである。今其の代表的の批評紹介の辭を拾つて、本書に對す

る社會の反應を検して見ると、東京日々新聞は

從來女子教育を説く既に其人あり、之に關するの著書亦從つて少からずと雖も、未だ今日に至るまで、女子教育の筈蹄たるべきものに乏しきは、吾輩のみならず、世の教育に熱心なる者の私に憾みとする所なるべし。今者成瀬氏の著に係る本書を觀るに、素より斬新奇峭平地に波瀾を起すの卓論なしと雖も、要するに、氏は元と女子教育に經驗あるの人、乃ち其學說の如き、調査の如き、頗る精覈にして、鑿々能く肯綮に中り、且つ洋化主義と國粹主義の中庸を取つて、説の我田に水を引くが如き偏執の嫌ひなきは、即ち本書の一頭地を抽く所以なり。文章も亦平易流暢にして溢難の跡なし。余輩は此書が女子教育に裨補すること少からざると共に、百日の大旱を満すの雲霓たるを疑はざるなり。

と贊稱し、又當時批評界の權威であつた、「六合雜誌」は、内容の各項に就いて批評した最後に、

……行文頗る平易にして而も明白、全編を貫くに著者の誠實と熱心とを以てす。今日女子教育の衰へたる時代、殊に世の師父たる者が、如何に女子を教育すべきやに關し、五里霧中に徘徊する時代に於て、本書の如きは實に時を得たるもの、否女子教育の方針を指定するに足るの指南車なりと云

ふべし。

と結んでゐる。明治女學校から出てゐた「女學雜誌」も、當時に在つて、極めて特色ある文明評論及び文藝の雜誌であつたが、やはり「此の類の書に於て、未だ曾て有らざるの確實豊富なる論材を有す。就中體育の一章は、ことに斬新の實見多きを覺ゆ」と推稱した後、「美育の一章を缺きたるは少しく憾むべし」と評したのは、多分當時一部の人から教學界の明星と仰がれ、又先生と並べて、女子教育界の双璧とも推されたことのある、明治女學校長巖本善治氏の筆であらう。とにかく以上の斷片數章によつて見ても、先生の意見が恰も時代の要求——少くも最高新知識階級の要求に投じ得たことは明かである。先生が歸來の第一聲として、又準備着手の豫籤として、先づ祝賀すべき成績と言はなくてはならぬ。

時勢の一瞥——日清役の結果 當時の趨勢を一瞥すると、明治廿七八年の日清役はあらゆる方面から見て、實にわが國民生活の一大轉回期であつた。維新以來養ひ來つた文化と富力と武力とを傾注した、此の國際戰爭に於て、外國人は勿論、國民自身すら豫期しなかつた勝利、殊に建國以來始めての見事な勝利を收め得たのであるから、國民の國家的自覺自信は非常な勢を以て昂張した。そこに彼の

いはゆる三國干渉の巨拳が、豫期しないくらやみから突き出されて、戦果の一部はわけもなく奪回されてしまった、この最後の幕の一悲劇は戦勝に陶醉して、意満ち氣驕る状態になりかけたわが國民に、一種痛烈な鎮靜劑、清涼劑となつたのであつた。一大痛棒に愕然と見開かれた國民の眼に映つたものは、清國の鎖鑰を容易に斷ち切つた、彼方の進路に横はつてゐるところの、更に恐るべき強大な障壁であつた。早晩其の大勢力を突破してゆかなければ、爾後の國際的發展の自由を與へられないといふ實狀であつた。戦勝から得た、この内的自信の充實と、及び外的壓迫の發見とは、共に相俟つて、我が國民生活を二重に緊張させた。志弛み情流れる危機を轉回して、戦勝の意氣を向上の一路に精進させたことは、實に三國干渉の惡夢が我が國民に齎らした、料るべからざる恩恵であつた。

痛棒は痛棒であつても、併し戦勝の經驗は更に偉大であつたのである。我を壓迫する外敵の勢力は如何に強大であつても、國民の努力如何によつては、決して不可抗なものでないことを、最近の經驗が略々確實に暗示してくれた。慘として萬歳の聲を沈黙に落した國民の眉宇の間には「今に見ろ」といふ物凄い氣概が閃いた。「臥薪嘗膽」といふ言葉は國の隅から隅に傳はり響いた。是に於て此の異様な國民の精神的緊張は、必然に國力の培養充實といふ方向を取つて、流動して往つたのである。

驕泰は憤懣と化し、憤懣は奮發と化し、奮發は努力と化した。而して戦勝の一主因が教育の普及にあるといふ見解、更に國力の充實には教育の普及が先きであるといふ見解から、國民教育の振興といふことは、經濟軍備と共に、實に戦後經營と呼ばれた、其の重要な努力の集中點の一つであつたのである。先生の新しい教育運動が此の汐先きに乗つて始められたといふことは、たとへ偶然であつたにしても、恰も其の機に投じ得たといふべきであつた。

國家的全民衆的——明治廿年後との比較 今、更に少しく時代の内容を検討してみると日清役後に於けるわが文化運動が、著しく民衆的若くは國家的特色を帯びて來たといふことは、明治廿年後に於ける状態に、略々類似してゐるやうに見える。けれども其の内容に至つては、彼此決して同一ではない。概括してその差別をいふと、第一、明治廿年後に於ける思想運動は、極めて狹隘な、いはゆる思想界、乃至は少數の知識階級に於てのみ見られた現象であつて、國民の大多數は、之に對して何の關心をも持たなかつた。従つて全國民的生活乃至精神の上には、格別の影響を與へなかつたのである。然るに日清役後に於けるそれは、嚴密な意味に於ける思想としては、よし知識階級のみの問題であつたにしても、少くも氣分乃至感情としては、實に全國的であつて、従つて國民としての實際の生活乃

至精神に、特定の著しい意向を附與したのである。第二に、前述の結果として、前年のそれは國民の實生活から游離した抽象的運動であり、たとへ實生活に影響しても、局處的、散漫的であつて、全局的、統一的ではなかつた。然るに日清役後のそれは、國民の實生活から生れ、又國民の實生活に歸入する、生きた具象的運動であつて、而して且つ全局的、統一的であつた。第三に、前年のそれはたとへ思想運動であるにしても、著しく感情的衝動的の要素を持つてゐたのであるが、後年のそれは、著しく批判的意志的要素を持つてゐた。従つて著しく概念化され、知識化されたと同時に、又著しく現實的となり實踐的となつた。第四に、前年の思想運動は反動的にして且つ消極的、乃至保守的にして而も破壊的であつて、忘れられた過去の憤激が新來の歐化趣味の急躁な跋扈に對する反撃であるに過ぎない要素が多かつたのであるが、日清役後のそれは、主動的にして且つ積極的、進歩的にして且つ建設的であつて、要するに一步進んだ新日本を生み出す努力であつた。第五に、前年に於けるものは、全然國內に於ける二派の潮流の對抗消長であつて、外國に對する自國の意義價值、又はその地位任務といふものを客觀的に把握した運動ではなかつたのであるが、日清役後のそれは、全然對外的であつて、東洋に於ける地位、歐米に對する關係の中に、自國の意義價值を發見した、全個體としての國家

的自覺であつたのである。

時代の特色と女子大學計畫との交渉 明治廿年代初頭に唱へられた國粹保存主義には、時勢必然の

傾向として、勿論排外的のみではなく、いはゆる採長補短の趣意が加へられてゐたのであるけれども、其の特質は到底保守的消極的たることを免れなかつた。併し日清役後に唱へられたいはゆる日本主義は、文化の局處的外形よりも、更に廣く深くわが民族固有の精神を探討して、それを以てわが國民生活を指導し、改善し、建設する原理、乃至理想としようとする、現實的積極的進取的努力であつた。日本主義は即ち生々發展主義であるといふ説明の中には、當時の意氣態度を明かに見ることができるのである。政治でも産業でも文藝でも、廿年頃のそれとは比較にならないほど緊密化し、内面化し、又知識化すると同時に、現實化して來てゐる。さうして全生活に即した實踐的主張を持つ傾向になつた。二十七年伊藤内閣と自由黨とに依つて企てられた以來の、官僚と政黨との握手、資本家の傀儡と評された大隈内閣の成立、紅露二家に代つて起つた新進諸作家の手による、寫實の精化と、自然主義の萌芽、文藝評論の發達、印象派畫風の勃興、美術學校に於ける洋畫科の開設等は、皆何等かの意味で、前述の思想傾向を具體してゐる。

殊に國際關係に至つては、日清役が明かに時代を劃したのである。わが國は東洋の盟主を以て自任する一面、運命的の利害關係に於て、歐洲の勢力に面接するやうになつたと共に、歐洲の各強國は政治と軍隊との實勢力を以て、東洋に集注して來た。三國干涉といふ芝居の樂屋には、實は歐洲を主とする或る策略が含まれてゐたとしても、とにかく歐洲勢力の東洋集注を知らせる曉鐘ではあつたに相違ない。歐洲勢力の東洋集注は、いふまでもなく歐洲勢力の日本壓迫である。併し又日本の戰勝が、遙かに歐洲壓迫の先勢を爲した意味もないではない。即ち戰役の終り頃から或る瞭解を交換し初めた英國との關係は、年と共に親密に赴き、遂に三十五年の同盟成立となり、日英同盟の成立は、露佛同盟の改訂を促し、露佛同盟の改訂は又更に三國同盟の改訂を促してゐる。この日英同盟は即ち平等の地位に相對立する、東西異人種の政治的握手であつて、世界史の上の一新事實であるばかりでなく、實に本邦政治上の一新紀元を開いたものである。かくて世界の勢力を東洋に、而して日本に牽き寄せると共に、日本の日本が東洋の日本となり、更に世界の日本になりかけたのである。緊密に實力的に日本が歐洲と接觸し始めたのである。このやうな歴史的潮流に乗りかけた、日清役後の日本といふものは、當然内にも外にも、國民生活の新しい緊張を経験した。経験しないわけにはゆかなかつた。こ

の勢ひに刺戟されて、明治廿四五年以來、その主張を強め來つた國家至上の觀念は、日本主義思想と聯繫して、益々國家主義、帝國主義の色彩を加へ、之に對しては、歐化思想に脈を惹いて、等しく更に概念化、且つ現實化された世界主義の主張が起り、民衆的勢力の勃興、資本的勢力の勃興、軍閥的勢力の勃興と、互に絡み合つたのである。

日本女子大學校設立計畫案が、此の如き特色ある内容を持つた國民的自覺と努力との、汪然と溢湧し來る時代の源頭に於て結體されたといふことは、決して文化的意味のないことではない。而して其の一度發表された曉に、容易く當時の社會上層の文化的一焦點となり得る由因が、時代思潮の上にも既に存在してゐたと言はなくてはならぬ。

中、發 表

計畫の發表——内海氏、土倉氏、廣岡夫人　この時勢の渦卷の中に立ち上がった先生は、先づ資金三十萬圓を募集して、大阪に一女子大學を設立する計畫を立て、明治廿九年始めて世間にそれを發表する運びになつた。而して第一着に郷黨の先輩で、且つ舊知であつた、時の大阪府知事内海忠勝氏に話して、其の意見を叩かれた。内海氏は「わが國風は西洋と違つて家族制度を重んじてゐる。従つて

家産は擧げて之を子孫に傳へ、子孫は又其の承継いだものを増殖はしても、決して減損しないのが義務であるとしてゐるのであるから、米國などのやうに、私的事業に對して多額の寄附をするといふやうなことはあまり望まれない。一私人の事業に三十萬圓の資金を集めることは、極めて困難であらうと思ふ。併しながら君の計畫はわが今後の國家にとつて、實に重要な事業であると同時に、君は元來熱誠の人であるから、努力一つで、決して出来ないといふことはあるまい。出来るだけ廣く朝野の有力者に發表して、其の力を借りる方針を採つた方がよからう。自分も出来るだけの盡力はする」といふ返答であつた。

次に先生は大和の富豪土倉庄三郎氏に話された。土倉氏は以前から其の令息を新島襄氏の同志社に托する一方、令嬢をば梅花女學校に送つて、先生の薫陶を受けさせ、又尙ほ家庭教育女子教育等に就いて、先生の意見を求めたり、又嘗て同志社にも、梅花女學校にも援助をさうげたことがあつて、地方の豪農としては稀れに見ることのできる、非常に進歩した頭腦と、又公共の精神事業に感動して、助力を吝まない情熱とを持ち、夙に勸業教育等に貢献してゐた人であつたから、先生の計畫には、寧ろ驚喜を以て賛同し、爾後の助力を約した。

それから先生は當時女傑として聞こえてゐた、大阪の廣岡信五郎氏夫人淺子女史を訪問された。女史は又明敏濶達剛毅果敢、氣概あり、識見あり、平生多數男子の無氣力をすら罵倒して措かなかつたと共に、殊にわが國婦人の懦弱無識、徒に家庭の裝飾となり、男子の玩弄品たるに甘んじてゐる陋態を憤慨して、女子教育振興、婦人界改善の切要を唱説されてゐた人であつたから、其の援助を借りて學校を設立しようと企てたものが、これまで幾人かあつたけれども、女史の眼から見れば、それ等は皆不徹底な計畫ばかりで、一として耳を傾けるに足るものがなかつた。そのために「女史は口ばかりの人だ」など、蔭口もきかれた程であつたさうである。女史の令嬢はこの頃梅花女學校に入學されてゐたさうであるから、先生と女史とはまだ直接に面會しなかつたまでも、間接には互に相識つてゐられたであらう。それに當時の梅花女學校の裁縫教師であつた婦人が女史と相識であつたので、その人の紹介で、先生は女史を訪うて意見を述べ、計畫を説明して賛同を求めた末に、「女子教育」の閲讀を乞うて辭し去つた。女史は平生男子も及ばない果斷の聞えがあつたに拘はらず、この時唯々綿密に先生の説明を聞いたゞけで、何等賛否の意見をば漏さなかつたさうである。當時女史は夫君を助けて家業の經營に奔走し、席の暖まる暇のない多忙の人であつた。先生の訪問後も、女史は筑前國潤野炭坑